シャドウランＦ

WD

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法の覚醒。神秘の技が蘇り、幻想の種族が再び地上を闊歩する。

テクノロジーの畸形的発達。人と機械、精神とネットワークの境界を揺るがす。

マヤ歴・第六世界は相反する力のうねりで混沌のるつぼと化した。

しかし、肥大した社会はそれすらも貪欲に呑み込んだ。

タグをつけ、値札をつけ、ファイリングし、囲い込み、管理した。

混沌は歪な秩序に切り分けられた。

テオドールは厄介事専門の私立探偵。

日の当たるところと当たらないところを行き来し、お零れを分配する。

テオドール本人はどうということはない人間だが、少なくとも仲間はいる。

テオドールの仲間とは、日の当たらないところの住人、影を走る仕掛け人、シャドウランナーだ。

目次

ディア・マイ・サムライ

ディア・マイ・サムライ【前1】 1

ディア・マイ・サムライ【前2】 18

ディア・マイ・サムライ【中1】 35

ディア・マイ・サムライ【中2】 55

ディア・マイ・サムライ【後1】 72

ディア・マイ・サムライ【後2】 87

ディア・マイ・サムライ【後3】（完） 104

チェイス・ザ・ゴースト

チェイス・ザ・ゴースト【序】 118

ディア・マイ・サムライ

ディア・マイ・サムライ【前　1】

銃声が聞こえて、微睡みから醒める。

見れば壁掛けのトリッドが《サムライ・ストライダー》シーズン５を投影しており、主人公マーカス・ブラックがＵＺＩサブマシンガンを二丁持ちして撃ちまくっているところだった。アーマーベストから伸びた黒光りするサイバーリム、肩から指先まで隈無く装甲された両腕がマーカスのトレードマークだ。彼が銃口を薙ぎ払うたび悪党がバタバタと景気よく死んでいく。

来客用のソファにはステラが尻を深々と沈めていて、トリッドをぼんやり眺めながらテーブルに山盛りのフライド・ソイと缶コーラを交互に口へ運んでいた。テーブルには空き缶が既に四つ転がっていた。

外見が小娘然としているステラはそんな風にしていると更に子供っぽくて、学校から帰った一人っ子の女子高生が両親の不在を良いことにジャンクフードをデリバリーし、コムリンクを放り出し、子供なりに煩雑な人付き合いから一時の解放を得て、溜め込んだ配信動画プログラムを怠惰に満喫している――と、さながらそういう風に見えた。

ただ生憎とステラは女子高生ではないし、テオドールは不在でもなければステラの親でもなく、そもそもここはリビングではない。

「ステラ、テーブルに油がつくから、食べるなら自分の机で食べてよ」

「んー？」

あっけらかんと、あどけない褐色の顔が振り向く。無造作に切り揃えた髪。オーバーサイズのフライトジャケット。袖を折らないといけないのは流石にどうかと思う。

「ボスも食べる？」

「ステラ、来客用のソファに座るのはやめてって――」

「だって、来ないじゃん。お客。……食べない？」

「……食べる」

テオドール自身、今の今まで惰眠を貪っていたことを思えばあまり強く言えた筋ではない。テオドールは今後の人間関係を慮って抗議の矛を収め、熱々の大豆成形食品が発する油の匂いにふらふらと近寄っていった。そう言えば酷く空腹だった。

ステラの向かいに腰を下ろす。ソファの安っぽいスプリングが軋むが、なんとか体重を受け止めてくれる。ステラは指についた油を舐めながら画面を見つめている。画面の中ではスーツ姿の逞しいオークがＡＫの銃口をマーカスに向けていた。マーカスのＵＺＩは弾切れだった。オークが何者か分からなかったので、手元のコムリンクで登場人物設定を閲覧する。イタリア系マフィア幹部と出た。今回の悪役であるらしい。演じているのは疎いテオドールでも名前を知っている大御所だったが、下顎から伸びる牙に大袈裟な編集がかかっていて、顔の造形を崩していた。

マーカスとオークが何やら気の利いた皮肉の応酬をしているのを横目に、拳大のフライド・ソイを鷲掴みにしてかぶりつく。鶏肉に似せた成形大豆肉の歯応え。油と塩分と合成旨味成分の汁が染み出て舌に広がる。体に良くなさそうな滋味。

立体画像の中のマーカスは、暗い工場跡かどこかでガラクタの間を縫うように走っていた。オーク・マフィアがライフルをバースト射撃する瞬間を強化された反射神経で見抜き、絶妙のタイミングで物陰に飛び込んでいる（映像がスローモーションになってそれを強調している）。マーカスは弾切れのＵＺＩをとうに捨て、散発的に撃っていた拳銃も放り捨て、今は腰からカタナを抜いたところだ。敵がマガジンを換える瞬間を狙って斬りかかろうというのだ。

マーカスの視界にはオークのＡＫの残弾がカウントダウンされている。銃声を拾い、画像分析で銃の種類を特定して残弾を数えるシステムだが、実際に使ってみると間違いが多いので恐ろしくてとてもアテにはできない。しかしこれはドラマだ。しかも主人公が勝つと決まっている筋書きだ。果たして我らがマーカス・ブラックはアサルトライフルの弾倉が空になった瞬間を突いて鋭く詰め寄り、オークの野太い首目がけてカタナを繰り出した。しかし敵もさるもの、咄嗟に掲

げたライフルの銃身でがっちり刃を受け止める。
　オークはすかさずのしかかるように力を込めてマーカスのカタナを押し戻した。ライフルを掴む逞しい両腕は筋肉が膨れあがって、スーツの袖が弾けてしまいそうだ。マーカスが身長一八〇センチ／体重九〇キログラムであるのに対して、敵はアメリカ人オークの平均を頭ひとつ上回る身長二一〇センチ／体重一七〇キロの筋肉マンだ。マーカスが両腕を機械に置き換えているといっても体格差は歴然で、全身の体重を使った押し合いになると流石に分が悪い。マーカスはみるみる押され、膝が震えて、ついにはがくりと頽れる。オークがにやりと笑い、ＡＫの銃身を支える左拳からスパーを――中手骨の間に埋め込むサイバークロー、《ウルヴァリンの爪》と俗称される仕込み武器を伸ばした。マーカスを押し倒し、そのまま突き刺すつもりだろう。
　主人公、危うし。そう思わせた次の瞬間、マーカスの両手がアップになって目まぐるしく動いた。左手でカタナの刀身を握り、柄をオークの野太い右手首に引っかけて、カタナをＡＫに絡みつけたのだ。そのままテコのようにカタナを捻ると、魔法じみてオークの巨体が引っ繰り返った。どう、と重い音を立てて仰向けに倒れたオークの首に、今度こそ白刃が食い込む。やたらリアルな流血描写。血飛沫が立体投影で画面から飛び出し、テオドールの鼻先を掠める。そんなところに力を入れなくていいのに。
「ファーストが前にやってたね、あれ」
「やってたね」
　ステラがぽつりと友人を引き合いに出した。相槌を打ってまだ開いてないコーラの缶と、二つめのフライド・ソイを確保する。ドラマはそろそろエンディングに差し掛かり、廃工場の奥に捕まっていた少年をボロボロのマーカスが救出するところだった。動画情報から粗筋を確認すると、イタリアンマフィアに誘拐された少年をマーカスが成り行きで助けに来たという経緯らしい。もっと細かいことを言えば、その少年の家庭環境について主人公が過去の自分と重ね合わせたりとか、少年の父親はマーカスが直近で片付けたシャドウランに関

わっていたりとか、そういうことが起きていたようだ。
感動的な音楽を背景に、マーカスは少年と父親と喧嘩した時の仲直りの方法について語らった後、手ずから少年を家まで送り届け、親子の再開を遠くから見届けて立ち去った。遠ざかっていくマーカスの愛車は番組スポンサーのフォードだ。ヒーローの車としてはちょっとどうかと思う平凡な車体の後ろ姿がフェードアウト。エンドロールと共に次回の予告が流れ出す――以前ヒロインをやったエルフの魔法使いが企業の陰謀に巻き込まれるのを助けるという筋らしい。アイリッシュ・エルフの少女が五年前の出演時と全く変わりない美貌を見せつけて、大仰な仕草で精霊を呼び出している。精霊は本物、女優はマンディン。魔法はカメラに映らない位置で裏方の魔法使いが使っているのだ。余韻を残して音楽が終わる。次回の配信開始は三日後。
ステラが大きく伸びをした。けっこう満足げな様子だった。
「いいねえ。今年のはイイ感じじゃない？」
「ん。演出良くなったなぁ。前期がグッダグダで評判悪かったから、テコ入れしたのかな。けど今期のマーカス、ちょっといい人過ぎない？」
「ハンパにワルぶってるより格好いいよ」
「そうかな」
「どっちみち、あんなサムライいないし」
「そりゃドラマだもの」
「だったら下手に本物っぽいよりは、見てて楽しい方がいいじゃん」
「まあ、そうかな……」
テオドールはあっさり折れて、指についた油を舐め、コーラで舌を濯いだ。
本物のサムライがロハでマフィアと戦争をするわけがない。金ずくでも、よほど信頼できる筋からでないとやらない。そして、やるとしても決して一人ではやらない。味方の頭数を揃え、ドローンを買い、仲間割れを仕向け、あらゆる手段で敵に向く銃口を増やすだろう。更には知恵を尽くして素性を隠すだろうし、可能なら他人に罪をなす

りつけるだろう――積極的に。
　この種のエンターテイメントが大抵そうであるように、《サムライ・ストライダー》でも不快を催す生々しさや冗長さが意図的に省かれている。もしくはそれらがただのスパイスに成り下がるよう、上手い具合に料理されている。感動的な戦争ものの映画と違い、実際の戦争は長ったらしくて過酷で不潔で全貌が見えず、故に退屈だがいざとなれば感動的な台詞を吐く暇もなくゴミのように人が死ぬ。刑事ドラマと違って犯罪捜査現場は忍耐と過労と妥協と慣例に彩られ、発酵するローカルルールが正義に成り代わる。同様、シャドウランナーだって実情をあまり克明に描きすぎると視聴者の不興を買いやすい。ストリートサムライの多くがサイバーアップしたチンピラに過ぎず、その仕事は大半ちょっとばかり手の込んだ強盗や誘拐でしかないということを殊更あげつらったところで誰も得をしない。
　そう言えばマーカスも最初はなるべく本物らしいサムライに似せられていたが、その最初はもう十年も前になる。その頃のテオドールは本物らしいサムライのマーカスを、まだしたり顔で楽しんでいた気がする――
　ステラがエンドロールをはしょって、ライブラリから次のトリッドを物色し始める。テオドールはかけっぱなしのＡＲ眼鏡を起動。コムリンクに繋いで視界オーバーレイを開く。古風な封筒を象ったアイコンが、現実から薄皮一枚隔てた仮想領域に描画される。封蝋を切り、便箋を手に取って開く――というイメージをすれば、コムリンクが額のトロードからそれを読み取ってメールアプリを起動してくれる。新着一覧を流し見るが、めぼしいメールはなし。予約の申し込みもなし。幾つかのアドレスに、仕事があったら回して欲しいとメッセージを送る。
　続いてスーツの左内ポケットに仕舞ったコムリンクを起動し、眼鏡をそちらに切り替える。着信履歴が一件。送信者はホルヘ。あまり素直に喜べない名前だ。用件は素っ気なく「人探し」とだけ書いてあって、引き受ける場合の返答期限はきっかり１７：００だった。現在時刻１３：１８。ひとまず話を聞かせて欲しい旨を返事すると、即

座に待ち合わせ場所が返ってくる。インターナショナル・ディストリクトのフィリピン・ナイトクラブ。時間は１５：００。
「ステラ、出かけるから支度」
ステラがトリッドを消す。
「お仕事？　何やるの？」
「人探し、だって」
ソファを立ち、机から拳銃とホルスターを取り出す。拳銃はアレス・プレデター。マーカスを含め、トリッドに出てくる大抵のサムライが持っているやつだ。ごつく、重く、大口径で、普通のボディアーマーなら簡単に貫通する。更には内蔵スマートシステムが標準装備。周辺機器の申し込みをせずとも店頭でプレデターを指さすだけで高性能のスマートピストルが手に入るという寸法だ。
グリップを握る。コムリンクが自動で銃のスマートシステムと通信し、視界オーバーレイに本体情報を表示する。型番。ファームウェア版数。セイフティがオンになっていること。通常弾が十五発装填されていること。ライセンスは所持、携行とも問題なし。
プレデターを左脇に吊り下げ、上からジャケットを羽織る。
「行こうか」
「うぃ」
ステラを伴って事務所を出る。テオドールの事務所はジェームス・ストリートに面した緑色のオフィスビルの五階、東側の一角にあり、ドア脇には控えめな《アルゴイ情報サービス》という看板がかかっている。
探偵事務所だ。
★
カナダ・アメリカ合衆国。
一世紀前までは北米の大半をこの国家ひとつが――当時は別の国家だったが――領有していたという歴史を小学校で習ったとき、子供のテオドールには今ひとつピンと来なかった。ネイティブアメリカンはどうしていたのだろうと思ったのだ。その頃はメタヒューマンも魔法も存在しなかったのだと教師が付け足して、「ええー」と疑いの

声を上げたものだった。呪わしいＨＭＨＶＶ、偉大なるドラゴンさえ影も形もなかった覚醒前の世界。ネイティブアメリカンは精霊の加護を得られず、従って二百年以上も侵略者の膝下に敷かれていた――などという話が、子供に信じがたいのは無理もない。メタヒューマンがいないのだからメタヘイトもなかったのだろうと思いきや、人間同士で肌の色を比べあっていたと聞いて、随分呑気な話だと思ってしまったものだった。

そんな単純な話ではないというくらいは分かるようになったが、そもそもテオドールには前世界のことが本当には理解できない。平面映像と史料を見て想像するのが関の山だ。

逆に言えば、前世界の人々に取り、現代の物事は全く想像の埒外であったのだろう。

第五世界から第六世界へ移る過渡期にあって、その光景はどのように映ったか――

それこそ、想像するしかない。

例えばネイティブアメリカンが壮大な魔法の儀式で火山を噴火させ、混乱に乗じて北米大陸の支配権を握ったという当たり前の近代史も、北米が一つの国だった頃は馬鹿げた悪夢としか認識されなかったようだ。当時の人々が書き留めた諸々の史料は、そのすべてが彼らの受けた衝撃と驚きを訴えており、或いはメディアニュースの錯乱を疑っていた。つまりは彼らの現実逃避の記録だった。しかし彼らがどう思おうと《覚醒》は現実の出来事であったし、眼を瞑ってもネイティブアメリカンの蜂起から成る戦争が消えてなくなるわけではなかった。

テオドール達が暮らす今のシアトル市は、その近代史の延長線上に誕生した。

先住民部族連盟に西部の大部分を返還したデンバー条約において、合衆国が領有を許された僅かばかりの飛び地として。

しかし合衆国は条約締結後も現実逃避を引きずったきらいがあって、例えばシアトルの小学校でサーリッシュ公用語を教えるようになったのは２０５０年代、僅か二十数年前のことだ。官民からの根強

い抵抗があったであろうことは資料を捲るまでもない。
何はともあれ、今の市内では羽根飾りとビーズの先住民衣装が正装の一種として定着しているし、事務所のビルの入り口に立っている警備員もネイティブ・アメリカン系のオークだ。出がけにテオドールが会釈すると愛想良く笑い返してくれる。
事務所からインターナショナル・ディストリクトまでは、休日の昼下がりであれば歩いて行っても良いかと思えるくらいの距離感だ。デスクワークのホワイトカラーならそうするべきだろう。今日は日曜だし、昼下がりであったし、テオドールは白いシャツを着ていた。だがテオドールにとって休日ではない。徒歩を選んだのは車を整備工場へ出しているせいだ。頭上は真っ青に透き通っていたが、風は冷たかった。コートを着てくれれば良かったかも知れない。ステラもだぼだぼジャケットの襟を掻き合わせている。
高架下を潜ってイエスラーウェイの傾いだ交差点を渡り、インターナショナル・ディストリクトに差し掛かる。コムリンクに市史チップを差して二十一世紀初頭に設定し、視界オーバーレイに映してみれば整然と区画整理された街並みが映るだろうが、現実のインターナショナル・ディストリクトは都市計画もへったくれもないコロニーの発生と融合を繰り返した結果、街路は動脈硬化めいて肥厚し、建造物や人や雑多なガラクタが溢れて車道を狭めている。その有様が観光客を惹き付け、一帯の人口密度を奇妙に押し上げているのだが、彼らの目にはこのゴミゴミした様子がサファリパークか何かに見えているらしい。
駐車場でベトナム人がローカルな広告タグを幾つも張り付けて立っている。ＡＲ視野で見ると無数の看板が人型に集合して蠢いているような風体だ。魚醤を使った屋台料理の匂い。酷い訛りで喋る客寄せの声。人混みの顔ぶれは雑多な人種とメタタイプの見本市になっていた。サウス・ジャクソン・ストリートを越えて中華街に入ると猥雑さはいや増し、人間の密度たるや歩いているだけで圧殺されるのではないかと錯覚されるほどになる。そこまではいかなくとも、トロールに足を踏まれたり蹴飛ばされたりしないよう注意が必要だ―

―テオドールはビールの金樽を五本抱えた二メートル半のトロールと慎重に擦れ違った。小籠包を売る店先でまるまる太った中国人エルフ女性があくびをして、人種もメタもバラバラの子供達が何やら楽しそうに叫びながらその前を走り抜けていく。ドワーフの果物屋台の隣で中古回路を売っているヒューマン黒人女性は半年前まで男性だったが、更に一年前はやっぱり女性だった。テオドールは彼／彼女と顔見知りで、時々立ち話をするけれど、元の性別がどちらなのか分からない。その斜向かいでイタリア／中国ハーフの男がやっている歯医者は、夜中に地下でグールの乱杭歯を診察しているという噂。食屍鬼も虫歯になるのだろうか……

それらしい雰囲気の日本人男性の前を通る際は、奥ゆかしい態度を示し、卑屈でない程度に丁寧なオジギをする。この辺はヤクザの縄張りなので彼らに礼儀を弁えない輩と思われてはやってられない。

テオドールとステラは表通り沿いに二ブロック歩き、まだ閑散としている繁華街を抜けて飲茶の店に入った。培養烏龍茶と紛い物の――合成澱粉と合成食物繊維とフレーバーの――ココナッツ団子を二つずつ食べ、当たり障りのないお喋りで少々時間を潰す。待ち合わせ十分前に店を出て歩くと、二分もせず営業時間外のフィリピンナイトクラブ《重力》の勝手口まで到着する。この店が日中は談話室代わりに席を貸してくれることを、知っている人間は知っている。

搬入用エレベーターを使って地下三階まで降りる。事務所にお邪魔すると、ＶＲに没入していた顔見知りの従業員が数瞬遅れてこちらに気付き、ハッと顔を上げた。だらしなく弛んだ口元。ぎらついた目。多分ポルノでも見ていたのだろう。

「十五時から予約入ってる？」

テオドールが尋ねると、彼は黙ってホールを指した。テオドールが会釈を返す間にステラは進んでしまっている。早足で追いかける。

昼間のホールを照らしているのはヴァイオレットの毒々しいライトアップではなく無味無色の作業灯で、赤黒モザイクになったカーペットや石材を模した模様のソファ、中央の小さなステージをくっきり照らし出しており、営業中であれば緻密に演出されているだろう陰

影の妖しさは欠片も見あたらない。カウンターを掃除しているフィリピン系オークのウェイターも気の抜けたジーパン姿だ。テオドールは挨拶を交わして前を通り過ぎ、ホルヘが待っている隅っこのブースへ座った。
「やあグレイ」
　ホルヘは褐色の皮膚がたるみかけた顔に人畜無害な笑みを作り、テオドールのあだ名を呼ぶ。
　彼の服装は日曜に家族サービスに連れ出されたお父さんのようなポロシャツとスラックス。冴えない風体をしたラテン系の中年ヒューマンだ。《T＆T》探偵社の所員であるはずだが、ホルヘは他のところからも仕事を持ってくる。
「こんにちは、ホルヘ。急ぎの仕事？」
「うん。まあ座って座って」
　ホルヘはテオドール達に席を勧めて、ソイ・ラテのペットボトルを差し出す。トリッドなら小洒落たカクテルでも頼むところだが、クラブは営業時間外だし、仕事の打ち合わせ中にアルコールを摂取する神経が――例えフィクションだろうと――テオドールには理解できない。従って文句があるわけもなく、キャップを捻ってラテを一口煽る。甘い。ステラは遠慮無く一気のみして、一息で半分空けてしまった。
　三人のコムリンク間でＰＡＮ／パーソナルエリアネットワークを接続し、サブボーカル通話を開く。喉元に張り付けたマイクが声にもならない囁き声を広い、必要なら補正をかけて内緒話を成立させてくれる。テオドールはふと視界オーバーレイの片隅に囁きアプリの設定を開き、音声フィルタがきちんとオンになっているか確認した。でないとラテを飲む音が全員の耳へダイレクトに届いてしまう。
「家出した高校生の女の子を捜して欲しいんだけどね」
　囁き回線にのんびりとしたホルヘの声が入る。イヤホンから響く補正のかかった音声は肉声よりも鮮明で聞き取りやすい。
「依頼者は親御さんでね。身元は綺麗な人なんだけど、子供の素行はちょっと良くなかったみたいでね。三日前にその辺のことで口論に

なって、出て行って、それきり帰って来ないということだ。予算は経費込み三万新円。期限はできるだけ早いうち」
　明細も何も交わさない。酷く大雑把な契約だ。正規の探偵社がやるべき外注の手続きではない。つまりテオドールとステラは正規の外注先でないということだ。当然、ホルへの方では色々と辻褄を合わせるのだろうが。
　強いて詮索することもなく、テオドールは幾つか質問を投げた。
「警察には？」
「ナイト・エラントとローンスター、両方に相談済み。ただ、まあ、分かるだろ。高校生の家出で彼らが総力を尽くすことはない。巡回地域で見かけたらお知らせしますって程度さ」
「素行が良くないっていうのは？」
「ギャングの男に引っかかったらしいよ」
「どこのなんていうギャング？」
「それは分かってない。失踪者の友人から聞き出したところ、それらしい話があったっていうところらしい。まあ、その他、分かってる範囲のことは資料にまとめてる。やってくれるなら渡すけど？」
「やる」
「ＯＫ」
　ホルへが共有領域に資料ファイルをアップロードし、テーブルの上に支払い保証済みクレッドスティックを置いた。黒いスタンダードタイプ。ステラが摘み上げて、液晶表示をテオドールに見せてくる。前金に五千新円。
「十九時に顧客との面談と、対象の部屋への立ち入り調査をセッティングしてある。後は任せても？」
「分かった。ありがとう」
「ああ、金の話はそっちからはしないでくれ。うちで出した明細と食い違う」
「分かってる」
　他に幾つか細かいことを確認してから解散になった。ホルへは改まって例を述べ、テオドールとステラに握手を求めると、忙しなく立

ち去っていった。囁き回線を切らないままステラがクスクス笑いをしたので、テオドールは耳がくすぐったくなった。
「ジョンソンごっこが板に付いてきたよね、あいつも。段取りに凝っちゃって」
テオドールは苦笑いを返して、トイレを借りに立った。

★

サラ・エファーソン。
女性。年齢十六歳。アフリカ系ヒューマン。ＵＣＡＳ市民籍。高校生。
資料は大元の依頼者であるサラ嬢の父親、トーマス・エファーソン氏から提供されたものだ。顔写真とＳＩＮの照会番号、コムリンクのコード、それからトーマス氏が知る限りサラ嬢の交友関係が記載されている。ただしコムリンクの現在位置を検索してもエラーが表示されるばかりなので、コムリンクは既に乗り換えているのかも知れない。
いったん事務所へ戻るまでの間、テオドールとステラは手分けしてＳＮＳを漁った。あまり良くない行いだ。歩きながら神経直結インターフェースを使うのはけっこう注意が逸れるので交通事故の元だし、強盗にも目を着けられやすい。
ささやかに悪いカルマを積み上げつつ、テオドールはサラ嬢とトーマス氏、その他の家族、それから親しい友達について、すぐ分かる範囲のことを調べた。一家は四人家族。トーマス氏と妻のエミリー、長女サラ、弟のジョージ君。いずれも容姿はアフリカ系の印象が強いが、全員生粋のシアトル産まれで母語は英語。サラ嬢の祖父母になると違ってくるが、近頃は疎遠になっているようだからひとまず除外しておく。仕事はトーマス氏がマトリックスデザイナー、エミリー氏は水産会社の事務、サラ嬢が高校生でジョージ君が中学生。夫妻はそこそこ熱心なクリスチャンだが、子供二人の方は日曜の礼拝をよくサボる。
サラ嬢の悪い素行やボーイフレンドについては、よく分からなかった。お気に入りの服の色も特定しかねた。トーマス氏が把握してい

る限りでは、三ヶ月ほど前からサラ嬢の帰宅時間が遅くなったこと、「みっともない格好」をするようになったこと、それから反抗的になったことと、親しい友人にボーイフレンドの存在を自慢していたこと。そのくらいだった。「みっともない格好」をしたサラ嬢の写真は撮っていなかった。サラ嬢のＳＮＳアカウントに自撮りでもないかと思ったが、最近著しく利用頻度が落ちていたようで、やはり見あたらなかった。変名で別のアカウントを作ったのかも知れない。それでも以前までの行動範囲を知ることくらいはできた。

テオドールは事務所に戻ると、コート掛けからコートをひったくって袖を通し、留守中の来訪者がいなかったことを確認し、路面電車のダイヤに急かされるままビルを飛び出た。走ったかいあって停留所には二分前で到着。前髪の下からトロードを外し、熱を持った額に冷たい風を浴びる。

時刻は１６：１４。

テオドールはやってきた路面電車に尻を落ち着けると、囁きマイクを使って《オーガン・グラインダー》の窓口に電話し、サラ嬢の写真を見せた。幸い、モルグにサラ嬢と思しき死体が運び込まれたということはなかった。少なくとも合法な臓器売買ショップには。

当然、違法な方も当たる。路面電車でパイクプレイスマーケットの近くに乗り付け、まだ明るいうちに観光客向けでない区域の寂れたトルコ料理店へ駆け込む。テオドールは挨拶もそこそこに中東系オークの店主へサラ嬢の画像を渡した。彼の本業は非合法な臓器売買と非合法な売春の問い合わせ窓口だ。「この子がどこかで死体か売春婦になってたら教えて欲しい」と頼んで、支払い保証済みクレッドスティックから三百新円渡す。精算の名目は食事代金になる。店主は奥に引っ込み、すぐに戻ってきた。こちらでもサラ嬢らしき死体や売春婦は見あたらないということだったが、闇マーケットで死体や性奴隷の顔をカタログに出さないような業者は幾らでもある。深みに嵌っていればそれまでだ。テオドールはそうでないことをお祈りし、今後情報が入ったら知らせてくれるように頼んで店を出た。

辺りはそろそろ暗くなっており、街灯も疎らだ。眼鏡の暗視が勝手

に作動し、風景がモノクロになる。酷い生ゴミの臭いが吹き抜けてくる裏路地に、ヒューマンの少年が気取った格好でたむろしていて、ニヤニヤと嫌な目付きでこっちを見ていた。テオドールは彼らを見つめ返し、プレデターを納めた左脇の膨らみをちょっと突き出して見せた。彼らのニヤニヤ笑いはそれで納まり、テオドールは早足で歩き去った。ステラがヒヒッと笑い、視線を振り向ける。「あたしの尻とボスの尻、どっちが目当てだったかな」「勘弁してよ」

トーマス・エファーソン氏の家はセントラル・ディストリクトにあったので、タクシーを使った。タクシーの中から顔馴染みの用心棒に電話し、直近の予定を尋ねる。ちょうど暇だったということなので、今夜から付き合って貰いたい旨を申し入れた。やはりテオドールとステラの二人だけでは夜遊びに支障がある。

エファーソン氏の家に着いたのが十九時の五分前。大きくはないが小綺麗で新しい邸宅だった。「《ジョンソン保険サービス》です」と事前に取り決めてあった肩書きで入れて貰う。ステラの格好が肩書きにそぐわないのはこの際、仕方がない。

「《T＆T》探偵社契約調査員のテオドール・マガトと、アシスタントのステラ・ミラーです」

リビングに通されて早々テオドールが名乗ると、エファーソン夫妻は「よろしくお願いします」と折り目正しく応じた。二人とも表情には疲弊の色が濃く、こちらを見る眼には「望みを託せるものなら託したいがどこまで信用して良いのか分からない」という消極的な疑いが浮かんでいた。探偵に依頼する人間というのは大体そうだ。

ジョージ少年は立ち合っていない。部屋にでもいるだろうから、後で話を聞かせて貰うことにする。

トーマス氏から話を聞いてみるが、概ねホルヘから貰った資料に書いてあったことしか聞き出せなかった。

「無断での外泊を叱ったら、それが切欠で口論になったんです。それまでも何度か、サラには素行や学校のことで叱ったことがありましたから」

「素行の面で、過去にこういうことは？」

「それは、サラだって子供ですから、時には反発することもありましたが……悪い友達を作って夜に遊び歩くなんていうことはありませんでした。ここしばらくでのことです」
「三ヶ月ほど前からだったと伺っています」
「ええ、はい。そうです」
「改めて確認したいのですが、行き先に心当たりは？　悪い友達の名前とか、乗っていた車とか、悪い友達と会ってた場所……そういったものは何かご存じないですか？」
「いいえ……家族には隠していたようです。親しい友人にもあまり話してはいなかったようです」
「ボーイフレンドがギャングだという話は？　サラさん本人が言っていたのですか？」
「学校の親しい友人に、サラがそう仄めかしていたそうです」
「ギャングのグループ名は？」
「それは分かりません」
「そのご友人の名前を伺ってもよろしいですか」
「マリア・タナーという子です。この近所に住んでいます」
「後で、マリアさんをお訪ねするかも知れません。エファーソンさんからタナーさんへ事前の連絡をお願いします」
「分かりました」
「それで、最近、その悪い友達に会いに行く時に着飾っていた彼女の写真などはありますか」
「いいえ、ありません。その、あまりにも見られたものではなく……」
「どのような格好でした？」
「私は服には疎いのでなんと言えばいいか……革を使っていて、肌を出していて、気味の悪い首飾りをして、あちこちタトゥーシールを貼って……そういうような」
　エミリー夫人にも尋ねてみるが、聞き出せた服装のディテールは同じようなものだった。
「最近、服の色に拘りだしたとかは？　特にその友達に会いに行く時とかに」

「色、ですか」
「全体の色使いか、目立つ場所のワンポイントか……ギャングが仲間同士の目印にすることがあります。サラさんが付き合っている悪い友達を特定できるかも知れません。服の革の色は黒でしたか？」
「いえ……ブラウンか、レッドか、そんなような色でした」
「タトゥーシールの色も同じ？」
「そちらは黒でした」
「サラさんのＳＮＳにはパイクプレイスマーケットがよく写っていましたが、頻繁に遊びにいかれてましたか？」
「そのようでした」
　サラ嬢の部屋を見せて貰った。あまり整理されているとは言い難く、清掃の状態を見るに、掃除機も走り回るのを難儀しているようだった。雑多な持ち物は日本製ブランドコートの偽物、安っぽいブーツ、流行外れのジャケットなど。あまり遊び慣れているようには見えない。肌着を中心に普段着の多くは母親が買い与えたものだ。棚に転がっているシムセンスソフトのパッケージを見る――アクションものが多い。テオドールは写真を撮りながら、コムリンクのエージェントに一つ一つリストアップさせた。本やシムセンス、トリッド、ミュージッククリップについてはタイトルから概要も検索させた。心持ち、クライムアクションものが多いような気がする。特にシャドウランナーを題材とした。
「ステラ、ＢＴＬが混じってないか見ておいて」
「あいよ」
　というやりとりは、勿論、トーマス氏に聞こえないよう囁き回線で行った。
　ソフト類をステラに任せ、サイドチェストを開けるとガラクタが詰め込まれていて、中国の玩具やイミテーションのボトルシップ、プラスチック製の狼の牙、カタナを模したペーパーナイフ、シュリケン、といった雑多な品揃え。小物類についてトーマス氏に尋ねてみるが、トーマス氏もサラ嬢が買い集めたものはよく知らないようだった。
「そういうおかしなものが好きだったようです」と苦々しげに言うば

かりで、トーマス氏は娘の趣味をあまり良く思ってはいなかったようだ。テオドールは、エファーソン夫妻が熱心なクリスチャンだという資料の記述を思い出す。そこに軋轢があったのだろうか。

チップ類にＢＴＬは混じっていない、というステラの囁きが聞こえて、ひとまず懸念のひとつが消える。電脳麻薬で脳を焦げ付かせた子供の将来はどう甘めに見ても明るくない。

サラ嬢が使っていたというタトゥーシールのストックか台紙がないかと隅々を捜してみるが、見つからなかった。コムリンクは本人と一緒に行方不明。トーマス氏に頼んで邸宅の中央ホームノードにアクセスして貰い、管理者特権でサラ嬢のアクセス履歴を調べようとしたら、履歴が消されていた。

夫妻立ち合いのもとでジョージ少年とも話をした。仲は悪くないようだったが、異性の兄弟の常として、お互いの私生活にはあまり踏み込んでいないようだった。姉の様子についても知っていることは両親と大差なかったが、タトゥーシールの図案は覚えていた。

「狼のシールだったよ」

玩具にもそんなものがあった。プラスチックの狼の牙。

一通り調べ終え、テオドールは場を辞した。立ち去り際、夫妻とジョージ少年はどうかサラ嬢を無事に連れ戻して欲しいと改まって述べ、テオドールは「全力を尽くします」と答える他はなかった。

ディア・マイ・サムライ【前　2】

２２：００。
パイクプレイスマーケット近くのレストランで用心棒と待ち合わせた。
エルフのマスターが切り盛りしている店内は植物と木工細工で彩られたシックな内装で、いかにも妖精趣味だ。テオドールとステラはかなり早く到着したので魚料理で遅い夕餉を済ませ、食後の飲み物を楽しんだ。テオドールは紅茶で、ステラは焼き菓子とキャロブの代用ココアだ。
奥のブースで待っていると、ファーストは時間のきっかり三分前に来た。《カラスマ》のスリーピースと裾長のコートをきっちり着こなしており、股上が深いスラックスの腰を紺色の帯で引き締め、そこにカタナを差し込んでいる。流石にネクタイは締めていないが、その保守的な風体は〝さらりまん〟のようだ。コートの切れ目（ベント）から突き出た黒鞘が露骨に人目を引いていたが、当人は気にした風もない。
幾ら日本では成人男性の帯刀が一般的と言っても――そして日系企業の敷地内では企業民の帯刀が合法であり、それ以外の地区では日本人男性のカタナの携帯ライセンス保有率が九割を超えているとしても、ここまで堂々とカタナを差して歩く人間は余りいない。大抵の日本人は目立つのが嫌いだから、このシアトルでは懐にナイフサイズのカタナを忍ばせるくらいが普通だ。応対するウェイトレスのエルフ少女も彼の腰ばかりをちらちら見ていて、客の案内というより珍品の見物に駆け寄ったようだった。
ファーストはウェイトレスにチップを渡し――ＡＲのオープンレイヤに現金アイコンが飛ぶのが見えた――会釈してテオドールの向かいに腰掛けた。この店は木組みの丸椅子なので、帯刀したままでも楽に座れる。
「ハイ、ファースト」
「今回はどういう話だ、グレイ」

お互い第一声から囁き回線を開いているのは心得たものだが、この男と来たら挨拶も世間話もなしで本題に切り込んでくる。
ファースト、というのは勿論あだ名である。
対面すると彼の方が少し目線が高い。モンゴロイド・ヒューマンの割にすっきりした背格好をしているファーストであるが、体付きは酷く筋張っていて、引き締まっているのか痩せぎすなのか評価に迷う。どことなく貧相にさえ見えるのは服のサイズがゆったりしているせいか、それとも人相が良くないせいか。まだ二十五歳であるはずなのに、この男は目つきが落ち窪み、陰気で、妙に老け込んでいるのだった。
テオドールにとってこの日本人は友人だったが、あまり大っぴらには言えない類の繋がりでもあった。個人営業、無免許のボディガードが彼の生業だ。いや、正確に言えば免許はある。テオドールが入手に荷担した偽造免許が。
「家出娘を捜しにいくんだけどさ。彼氏がギャングなんだってさ」
と、ステラが答える。ファーストがフムと唸る。
「俺は何をすればいい」
「男の子ナンパしに行くから、あたしらの横で怖いお兄さんごっこやっててて」
「なるほど」
ステラの戯れた物言いに愛想笑いの一つもなく、背筋を伸ばしたまま生真面目に頷いてみせる辺りが、この男のおおよそのところを表しているのだった。
三人のＰＡＮ（パーソナルエリアネットワーク）の間に改めて信頼関係を構築し、共有領域に資料を置く。ファーストは真顔のまま画像やメモに目を通し、テオドールはＡＲ視野に広げた資料を手遊び気味に整理しながら、時々、ファーストと予算や道具や今夜当たる先などの予定といった細かいことを話す。
その間、ステラはクッキーをキャロブの代用ココアでふやかすのに忙しそうだった。
と、ファーストが共有領域に画像を保存した。開いて見ると、三ケ

月前にサラ嬢がアップした友人との写真を切り抜いて拡大したものだった。サラ嬢が嵌めている指輪を赤丸で囲い、参考リンクを添えている。精緻な銀細工の指輪。サラ嬢の年齢には少し不相応かも知れない。

「これが気になる？」訊ねてみるとファーストは頷き、「北米シャーマンの呪物の様式だ。模造品にしても、本格的だ。それなりの場所でないと手に入らない」「そういうのに興味を持っていた？」ファーストは答えない。そこを考えるのはテオドールの仕事、と言いたいらしい。ステラも同意見とばかり黙っている。

テオドールは少し考える。プラスチックの狼の牙。狼のタトゥーシール。北米シャーマンの呪物。サラ嬢は魔法使いに憧れていたのかも知れない。憧れるに留まらず、本物の魔法使いになろうとしていたのかも知れない。

パイクプレイスマーケットは賑やかな場所だが、日付が変わる時間ともなれば胡乱な連中しか出歩いていない。陰に回れば非合法な品もやりとりされている。観光ガイドには近寄るべきでない区画がきっちり記されているはずだ。その区画に敢えて踏み込んだなら、にこやかに手招きしてくる男についていけば内緒のお楽しみが味わえるだろう。それはドラッグかＢＴＬ、或いは未成年娼婦のフェラチオかも知れない。そうでなかったら単に銃を突きつけられて金を奪われるか。鷹揚な解体屋が近くにないから、死体になる可能性は比較的少なく済むだろう。あくまで比較の問題だが。

サラ嬢がこれまで悪い仲間と関わりを持ったことがなかったのであれば、どこかしら出会いの場所があったはずだ。マトリックス経由で知り合ったのだとしても、直接デートする場所はひとまず近所の行き慣れた場所であっただろう。このマーケットで何か分かるかも知れない。そうでなくても、話を通しておいたほうが良い連中がいる。

テオドール達は観光客が近寄るべきではない通りをぞろぞろと歩いた。毒々しいＡＲサインの流れに混じって、思わせぶりな隠語混じりの落書きや風俗店の広告が眼鏡に投影される。ちらと眼鏡を外すと、そこは大半の灯が消えた薄暗くて寂しい裏通りだ。スタッ

ファー・シャック脇の暗がり、酷い臭いがするゴミ溜めの裏で何かが悩ましい喘鳴を上げて蠢いており、ステラが覗き見してヒヒッと笑う。

海から吹く夜風は一際冷たく、そのおかげでそこらに放置されている生ゴミの臭気はかなり清められていた。浮浪者の集団がドラム缶の焚き火で暖を取っており、彼らを相手に売れ残りを捌こうとしてか、屋台を引くトロールのドーナツマンが不景気な顔で話しかけていた。周囲には流行りのストリートファッションで慎ましく着飾った少年がたむろして、テオドールとステラの二人だけならまた面倒が起きたかも知れないタイミングがあった。ファーストはさほど強面というわけではないが、目配りが鋭い。よほど激しくドラッグをキめた輩でなければ「からかうには面倒臭そうな奴だ」というくらいの見分けはつく。

それに、レドモンドのバーレン辺りに比べればこの界隈のチンピラは大人しくて上品だ。立ち居振る舞いに気をつけていれば、実際にカタナやプレデターを抜いて見せびらかす羽目にはならない。多分、そう滅多には。

概して静まりかえった区画で局地的に賑やかな《パープル・ガーデン》というナイトクラブに入り、音楽と野卑な嬌声に浸る。多くの知らない顔と少しばかりの見知った顔を素早く見分け、適当に飲み物とつまみを注文する。

テオドールはバーテンのジョニィとアーバンブロウルの試合についてお喋りし、仕事上がりの娼婦が擦れ違いざまに下品な冗談を言ってきたので野卑な文句でやりかえした。テオドールの服はストリート調なのかビジネスマン流なのかどっち付かずで、相応しい表情と振る舞いをすれば大体どちらの場面でも〝お客さん〟でいられるよう誂えている。

ビールのグラスを半分空けたくらいで、六人組の若い男連れが店に入ってきた。揃って鮮やかな黄色のジャケットを着ており、耳にエメラルドとトパーズを飾ったスタッド・イヤリングが輝く。石は安っぽいイミテーションだが、金色とグリーンのカラーには違いない。つま

りシアトル最大手ギャングの一角、《カッターズ》の色だ。早速、女の子や《カッターズ》フォロワーの少年らが群がる。
　テオドールは六人の中に見知った顔が一人いるのを確かめた。メイソンというアジア系ヒューマンの少年だ。彼らが席に着く様子をのんびり見守る。メイソン達は取り巻きの分も飲み物と料理を注文し、甲高い歓声を交えたお喋りで暇を潰し、やがてビールとナッツが届くと大声で乾杯して競い合うように喉へ流し込む。そしてまた賑やかなお喋り。フィッシュ＆チップスが届き、それぞれ手を伸ばす。その辺でテオドールは席を立ち、控えめに彼らへ近付いた。フォロワーの一人が突っかかって来たのをファーストにやんわりとあしらって貰い、メイソンへ愛想良く声をかける。
「やあメイソン、それにメイソンのお友達。申し訳ない。楽しんでいるところをお邪魔するよ」
「よう、グレイにステラ――そのニップもお友達？」
「うん。ファーストっての。友達で、手伝って貰ってる」
　テオドールが簡単に紹介すると、ファーストは折り目正しくオジギをする。しっかりとした角度だ。それが礼儀を示していると了解したのか、メイソンやその仲間達は彼に悪い印象を抱かなかったようだった。
　メイソンは仲間達を振り向き、
「みんな、こいつはグレイってんだ。探偵だぜ、探偵」
「探偵ェ？　何しに来たんだよ」
「浮気調査だろ。誰かどっかのオバンとヤったんじゃねーの？　オイ、ヤった奴、手ぇ上げろ」
　幸い、メイソン達は機嫌が良さそうだった。テオドールがビールのお代わりを注文すると、もっと機嫌が良くなった。探偵という職業を聞いても警戒より興味のほうを強く持ってくれたようだった。
「んでグレイ、何が聞きたいの？」
「家出した子を探してるんだ。それで、《カッターズ》に最近、こういうコが入らなかったかなと思って」
　テオドールはポケットからサラ嬢の写真を取り出して、そっとメイ

ソン達に見せた。彼らは写真を回し見た後、いずれも「知らない」と答えた。
「この辺のやつ？」
「ん。マーケットにはよく来てたみたいだ。ギャングの彼氏ができたらしいんだけど、どこのギャングかまだ分かってない」
「それじゃあ違うな。この近所の新入りなら分かる。そいつはいない」
と、メイソンの隣の大柄なオーク青年が答えた。テオドールの気分は落胆半分、安堵半分だった。サラ嬢の関わったギャングが《カッターズ》なら話は早かったが、家に連れ戻す際、彼らと揉める可能性があるのはぞっとしない。
「手助けがいるかい、グレイ」
「見かけたら教えてくれると助かる」
「分かった」
「悪いね」
「どうってことはねえよ」
軽くメイソン達に酒の肴を提供してテーブルを離れた後、テオドールは《パープル・ガーデン》でもう少し粘ってみた。概ね外れ、人違いが二件、サラ嬢を直接は知らないが同じ学校に通っているというのが一人。ホリィという白人オークの少女だった。パンクのボーイフレンドに引っ付いて夜遊びをしているようだが、危なっかしいほど無邪気な目付きをしていた。彼女本人は世の中――両親とか学校とか――に本心から反抗するつもりはさらさらなく、ちょっとのスリルと珍しい体験が欲しいだけ、という風に見えた。トリッドやシムセンスの中ではなく本物の世界で。
ホリィはテオドールが《カッターズ》の下っ端と友達面で会話していたことに感銘を受けたらしく、過剰なくらい協力的だった。ボーイフレンドを置き去りにする勢いでテオドールやステラにあれこれ質問し、コムコードを交換し、学校でサラ嬢の噂を調べておくとまで申し出てくれた。確かにありがたいことではあったが、テオドールは彼女が喜ぶような言葉を選びつつ、深入りしないよう釘を刺した。ステ

ラが仕事の話を面白おかしく脚色して話すのを、囁き回線から叱り付けなければならなかった。

成果が出たら連絡をくれるように約束してホリィと別れ、河岸を変えた。客層と音楽が下品な店を一軒。浮浪者のたまり場を幾つか。夜しか開かない思わせぶりなアクセサリー屋に立ち寄り、スタッファー・シャックの前で安酒を呷っているパンク気取りにも声をかけたが、当たりはなかった。

薄汚いバーを出て少し歩いたところで、ファーストがちらりと目線を寄越した。テオドールが「何？」と囁くより前に、ステラがそれとない足取りでテオドールの斜め前からファーストの真ん前に歩み出た。三人で並ぶには狭い路地だったから実際何も不自然なことはなかった。ファーストは裾長のコートを着ているので、猫のように小柄なステラは背後からすっぽり隠れて見えただろう。彼女はテオドールを見て唇に指を一本立てて見せると、横道に差し掛かったタイミングでさっとそちらに駆け出していき、足音一つさせなかった。ファーストは何事もないように真っ直ぐ歩き続け、テオドールもそれに倣った。

足取りを変えず、一区画ばかり歩いたところで、おもむろにファーストが振り向いた――テオドールには、ファーストが止まって振り向いただけにしか見えなかった。

しかし立ち止まったファーストに視線を向けるとそこには誰も居なくなっており、困惑して後ろを見ると二〇メートルほど先にファーストの背中が見えるのだった。つまりテオドールがのろくさ振り向く間にファーストは大股三十歩以上も移動していたということなのだが、一体どういう身のこなしをしたのか、テオドールはさっぱり理解できなかった。

ファーストが詰め寄っている浮浪者の男には彼の動作が真っ直ぐ見えていたはずだから、後で聞いてみるのも良いかも知れない。

浮浪者の男は酷く狼狽していて、腰を抜かしそうな様子だった。ファーストはさほど強面ではないが、陰気に落ち窪んだ眼光は夜道で遭遇すると強盗などとは別種の威圧感がある。それがいきなり鼻先

に生え出てきたらテオドールも腰を抜かすだろう。
　汚れきった襤褸の浮浪者は小柄なヒューマンだった。ゴミ袋の山に隠れてテオドール達を覗き見ていたのだろう。垢染みた臭いは路地裏の生臭さに溶け込んでしまっている。靴はぼろぼろだが足取りはしっかりしていて、ファーストから跳びすさり、逃げだそうとする動きは意外と機敏だった。
　ただ、逃げるために振り向いたその鼻先にステラがぴたりと張り付いて立っていたものだから、男は今度こそ腰を抜かしてへたりこんでしまった。ステラは悪戯っぽくニコニコ笑って、
「《ハデス》を出た辺りからついてきてたよね？　あたしらになんか用？」
　幸い、彼の口を割らせるのに銃やカタナを使う必要はなかった。物陰に連れ込み、ステラがキレたパンクの素振りをして脅かし、テオドールが百新円の支払い保証済みクレッドスティックを添えて優しい声をかければ良かった。腹を減らしていたらしく、チョコレート味のソイバーをオマケにつけると大層喜んでくれた。
　浮浪者は情報屋ケンゲルの手下だと名乗った。テオドールはケンゲルを知っていた。けちな密告屋だ。彼は登録している人間――浮浪者やウェイトレス、売春婦、露天商、とにかく暇を持て余して小銭を欲しがる人間に顔写真のリストを流す。リストに載っている人間の目撃情報を送ると十新円程度、より詳しい動向を知らせれば情報量に応じた報酬が返ってくるのだが、つい一時間前、そのリストにテオドール達三人の顔が載ったという。
　テオドールは浮浪者を放し、ケンゲルよりもっと口の軽い密告屋のカートンに電話した。カートンは誰がテオドール達の情報を気にしていたか知っていた。タコマ区で商売しているシャドウランナー上がりの若いフィクサーで、レックスという名前だった。

★

　ファーストと別れ、月極のアパートへ帰り着いた頃には午前二時を回っていた。ステラが上着を着たままソファの後ろに寝転がる――テオドールは彼女とルームシェアをしているが、寝室が一つきりの狭

苦しい物件であっても彼女は文句を言わない。どうせ床で寝るからだ。マットレスは柔らかすぎて苦手なのだとステラは言う。流石にリビングで段ボールを敷くのは勘弁して貰っているが、代わりにカーペットの手入れをきちんとしなければいけないので、引っ越しの時は常に掃除機の良い奴を持って歩かないといけない。今使っているのはどんなカーペットでもふかふかに保ってくれる老舗アイロボットの高級品だ。

ラフな格好に着替えて水のボトルを開け、一服しながらメールの整理をする。表向けのコムリンクには張り込みの交代要員を頼む内容のものが幾つかと、ほったらかしにしていた大規模調査増援の見積依頼を催促するものが一件。シャットダウンして裏向けコムリンクを開き、今回の件の情報提供がないか確かめるが、まだ入っていない。逆に情報を求めるメールが入っていた。こういう特徴のこそ泥を知らないか、という顔馴染みの賞金稼ぎからのものだ。時間がある時に当たっておく旨、返信しておく。

「ねえ、ボス」

ステラがソファの後ろから声を掛けてくる。「うん？」と背後を見下ろすと、天井を見上げてぱっちり眼を開けた彼女と視線が合う。

「あのサラって子は父親や弟にレイプされてたわけでも、母親に殴られてたわけでもなさそうだったよね」

「そう見えたね」

「学校にも通ってた」

「そうだね」

「ご飯は腹一杯食べてた？」

「痩せちゃあいなかったね」

「小遣いで好きなもの買ってて」

「みたいだね」

「父親と母親のお仕事もご立派」

「うん」

「ＳＩＮもきちんとした本物、犯罪歴もない」

「うん」

「それでも飛び出したくなるもんなの？」
「なる場合もあるかな」
「ふうん……」
　ステラは想像が及ばないものを想像しようとしていた。テオドールはステラと三年ばかりの付き合いになるが、これまで彼女と一緒に当たった家出人の捜索はまだしもステラが共感できる事情を備えていたもので、今回のようにごく恵まれた家庭で起こった非行というのは初めてだ。ステラから両親や兄弟の話を聞いたことはない。代わりに、寄り集まったストリートチルドレンのろくでもない思い出を冗談めかして聞かされる。荒廃地区で産まれたＳＩＮなしの子供達。ネズミに怯えて路上で眠り、日々の糧を賄うものはゴミ漁りと盗みかナイフ、さもなくば性器や尻の穴だ。身を寄せ合って眠る仲間と腐った食べ物を奪い合い、薬中のチンピラに殴られながら使い走りをして、体格が良い男の子は安物拳銃を与えられてギャングの兵隊、捨て駒の弾避けになるが、それすらも羨まれる。女の子の夢は稼ぎの良い売春婦。女衒のパシリになった兄貴分を巡って流血沙汰が起きた話はかなりえぐい内容だったが、ステラはへらへら笑って酒の肴にしていた。ソイバー数本と引き替えに初体験したアナルＳＥＸについても、ステラはビール片手に憚りなく語った。
　テオドールもステラの生い立ちをさほど知っているわけではないが、そうやって生きてきた子供の頃から、テオドールに雇われて探偵助手をやっている現在に至るまで、サラ嬢のような生活環境に縁がなかったのは間違いないのだろう。ステラがサラ嬢を理解するための参考文献は、それこそトリッドやシムセンスの中になってしまう。《サムライ・ストライダー》最新エピソードの、父親と喧嘩して家出した少年のような。
「自由……」
　天井を見上げて黙考していたステラが、ぽつりと単語を吐き出す。いかにも借り物を喉の奥から引っ張り出したような、釈然としない、確信のない声の調子だった。
「ってやつ？　お嬢さんは彼女の家にいたら自由がなかった？　少な

くとも、欲しいだけのは……なんかそんなフウな話が《フラッシュ》であったよね」
　と、案の定、ステラがホームコメディもののトリッドを引き合いに出してきたので、テオドールは苦笑いをした。
「多分そんな感じだとは思う」
「ボスはどうだった？　家。自由が不満だったりは」
「不満は……なくはなかった気がするけど。まあ許容範囲。家や食事やお小遣いを捨てて飛び出すほどじゃあなかったし、家族も嫌いじゃなかったよ」
「あの子はそうじゃあなかった？」
「そうなるかな。ただ、彼氏や悪い仲間とやらが色々吹き込んだかも知れない。家よりも、そっちが良くなったかも知れない。刺激的なものが欲しくなって、それで……とか」
「ギャングの仲間入りしたって、あの生活より良いモンだとは思えないんだけどな」
「彼女にとってはそうじゃなかった……そうじゃないと一瞬でも思えた。生きてりゃどんな良い暮らししてたって何かしら不満はあるもんだからね」
「そんなもん？」
「柵を跳び越えて知らない場所に飛び出せば、それが今より良い場所だって無条件に想像してしまうことがある。自分を縛るルールを嫌って別の場所に飛び出したら、そこで別の不自由や別の嫌なことがあるだなんて、想像もしないことがあるもんだ。分かるだろ」
「そうかもね……」
　ステラの返事は素っ気なかった。多分、彼女に自由という概念は馴染まないのだろう。彼女が生まれ育ったのは規律や規範のない環境だった。言い換えればそれは自由極まりない場所であり、狭苦しい汚水溜まりの中でなんの縛りもなく、お互い力ずくでどんなことでもできたはずだ。その自由の醜さ、不自由さをステラはよく知っているから、敢えて言葉に表そうとはしないし、自分から求める心理も理解ができないのではないだろうか……

「ボス、お仕事まだやってんの？」
「もうちょっと。別に寝ていいけど」
「そうする」
ステラは床に転がったまま、顔をソファの土台に押しつけるようにして顔を伏せた。
すぐに寝息が聞こえてきた。
★
翌朝早く、テオドールとステラはバスを乗り継いでサウスレイクユニオンで降りた。バス停では精緻なエルフの姫君を象った石像が歓迎してくれた。エルヴン・ディストリクトの風景には街灯が乏しくて街路樹が多く、ＡＲをオフにすれば広告や看板の類が驚くほど少ない。木や石で立てられた家々が並ぶ様などは、幹線道路から目を逸らせば別の時代に迷い込んでしまったかのようだ――とはいえ、シティバイクを手荒に漕いで学校に向かう子供やジョギング中の肥満主婦らの卑近さでは変わりない。ただエルフとドワーフがメインというだけだ。
しばらく歩いてホームズの自動車修理工場にたどり着いたのが午前八時半。まだ営業時間外であったけれども、声を掛けてみるとインターフェース越しにホームズの嗄れ声が「入れ」と勧めてきた。開きっぱなしのシャッターから中を覗いてみると、ホームズは古いヤマハのバイクを分解しており、ちょうど七五〇ｃｃエンジンを取り外すところだった。ホームズの身長はテオドールの腹の辺りまでしかないのだが、肩や胸板の太さはテオドールの倍以上ある。オイル塗れの太い指が一抱えほどの水素燃料エンジンをがっちりと把握し、持ち上げ、危なげなく近くの作業台に据える一連の様を、テオドールとステラは黙って見守った。その機種のエンジンは約七〇キログラムの重量があるはずだが、彼にはさしたることもないようだ。解剖学的見地によれば、ドワーフの小さな体に詰め込まれている筋肉の密度は大型爬虫類に匹敵する。
こちらに構わず、ホームズの節くれ立った指が器用にエンジンを弄くり回す。テオドールは彼が作業に区切りをつけるまで行儀良くし

ていなければならなかった。ドワーフのテックは偏屈で強情なものと相場が決まっている。機嫌を損ねないことが第一だ。

眼鏡越しに視覚化したマトリックスでニュースをぼんやり漁っていると、やがてホームズが油塗れの手をエンジンから離して振り向いた。時計を見ると十分ほど経っていた。四角い顎の形に添って豊かな髭をきっちり刈り込んだドワーフの顔は、どこに触れても岩のように硬いか、針のようにちくちくと突き刺さるか、どちらかであるに違いない。

テオドールとステラは改まって挨拶をした。

「おはよう、ホームズ」

「おはようございマス」

「おう……出来てるぞ」

ホームズはそう言うと隅の蛇口に向かって念入りに手を洗い、真新しいタオルで手を拭き、それから工場の裏に停めてある車の列にテオドールを案内した。居並ぶ車はどれもブルーシートで覆われていて、テオドールもどれが自分の車か分からない。

ホームズが一台の前で立ち止まり、シートを取る。この屈強なドワーフ男が酷い顰めっ面のまま、猫でも撫でるような優しい手つきでシートを剥ぎ取っていく様はいつ見ても可笑しいのだが、うっかり吹きだしたら叩き殺されかねないので頬を噛んで堪えた。シートから出てきたセダンはシアトル住人の大半が馴染み深いフォード・アメリカーだ。マーカス・ブラックの愛車でもある。口さがない連中に言わせれば、この世で最も退屈な車。テオドールは満更悪くないと思っている。出勤や学校の送り迎え時間帯、ダウンタウンの道を同じ車が無数に行き交うのだから、場所と時間を狙うだけでなんの苦労もなくニンジャになれるという寸法。カラーは以前まで赤だったが、この機会に青で塗り直して貰った。

セダンを改める。バンパーのへこみと、ドアの穴が綺麗に直っていた。運転席に腰掛けて軽くエンジンを回し、システムチェックを走らせ、全て問題ないことを確かめる。「いいね」テオドールは頷き、ホームズに二千新円の支払い保証済みクレッドスティックを手渡す。仏

頂面のドワーフはスティックの金額を確かめて頷くと、御愛想も言わずに車止めを外し、さっさと踵を返してしまった。テオドールもステラも強いて声はかけないが、そのまま黙って見送りをした。
　ホームズが工場の中へ引っ込んでから、二人はようやくセダンに乗り込んだ。テオドールはコムリンク経由で眼鏡にセンサー情報を投影し、運転を半自動モードに設定、工場の駐車場からスムーズに滑り出す。
　工場から離れたところでステラが「あー」と呻き、後部座席で体を投げ出した。
「ボスって、あのおっちゃんとどうやって友達になったの」
「ん、前の所長の時からの付き合いで。お行儀良くしてれば悪い人じゃないよ」
「あたし、前に『女が先を歩くな』とか言われてブン殴られたけど」
「うん、まあ……」
「ナニ時代のノリよ、ありゃあ……ヘンなシムチップやってんじゃないよね」
「口は堅いんだ」
「ヤワい方が驚きだよ」
　ドーナツを買い込んで自動運転の車内で朝食を摂っていると、昨晩メールを投げておいたナイト・エラントの知人から返事があった。添付ファイルにサラ嬢のボーイフレンドと思しき少年の画像があった。
　シアトルの警察企業は市民から一般的に想像されているよりもずっと勤勉で優秀だ。彼らの監視システムは緻密に仕上がっており、正しく運用すればシアトルの犯罪は一割以下に減るだろう――実際は同業他社の主導権争いとモザイク状の治外法権区域に足を引っ張られ、彼らはしばしば事件を取り零す。折角の監視システムもがんじがらめの法的手続きに忙殺されて融通が効かず、杓子定規な契約至上主義、ロボット的なルール遵守に席巻されてあるべき機能を果たしているとは言い難い。流石にサラ嬢の現在の居場所が分かっていたらエファーソン氏へ知らせていただろうが、過去の居場所しか掴んでいないのだったら、彼らは捜査上の機密として情報を握り込んでしま

う。そしてより優先度の高い事件が飛び込んできてほったらかしになり、死蔵される（彼らは人手不足も深刻だ）。テオドールはこの懸念を突ついてみたのだった。

　返事のメールに添付された幾つかの画像や動画には、パンクな身なりのエルフ少年と腕を組んでいるサラ嬢の姿が写っていた。パイクプレイスマーケットの防犯カメラで記録されていたものだ。繁華街をはじめ幾つかの場所、幾つかの日時で捉えられている。かなり鮮明に顔が見えるものもあった。

「マッポはこれだからなあ」

　ステラは馬鹿らしげにぼやくのだが、テオドールはこの点でナイト・エラントを批判するつもりはない。シアトルで毎日どれだけの凶悪犯罪が発生しているかを考えれば無理もないことだ。それに自分の食い扶持をもたらしてもくれる。こうやって快く努力の結晶を譲渡してくれる以上、彼らも折角の情報は然るべき人間が活用するべきだと思っているのだろう。そこに新円のやりとりが少々発生するのは、これはもう致し方ない。

　テオドールは幾つかの連絡先に件のエルフ少年の顔画像を流し、再びパイクプレイスマーケットに向かった。駐車場に車を停めて視界右上の時間を確かめると０９：５４。ナイト・エラントが捉えたカメラ写真を元にサラ嬢とエルフ少年のデートコースを推察し、手分けして聞き込みをする。昨夜の空振りが嘘のように、ステラがあっさり当たりを引いた。ちゃらけたカフェの店員が二人のことを覚えており、ステラは事情を話し、キスと小銭を支払って精算履歴をコピーさせて貰った。流石にデートで無記名の支払い保証済みクレッドスティックを使うような真似はしなかったらしく、サラ嬢の彼氏には《ライアン・ブレナン》という一応のタグがついた。この名前はナイト・エラントの知人に流しておく。だが、ナイト・エラント管轄地区の人間ではないだろう。そうだったらとっくに名前は分かっていたはずだ。偽造ＳＩＮということもありうる。ナイト・エラントが本格的に捜査を始めなければ追加の情報は望み薄だが、そうなったらなったでテオドールはお払い箱になる可能性が高いので悩ましいところだった。

さて。もしライアン・ブレナン少年が偽造ＳＩＮで名前を偽っているとして、このタグが全く役に立たないかといえばそうでもない。偽造ＳＩＮは高価だし、顔や体は名前ほど簡単に変えられないので、ある程度の期間は使い回すことになる。彼が《ライアン・ブレナン》である間の行動範囲は分かるはずだ。テオドールは昨晩、アルフレッドという懇意のデッカーに相談し、別口の仕事中だが少しなら時間を割けるという返事を貰っていたので、早速ライアン少年の名前と画像を送信しておいた。

フィクサーのポール・スタチューが今日中に捕まるか心配だったが、昼前に返事があって近くの海鮮レストランでランチを一緒することになり、しばらくぶりで彼の鉄面皮と対面しつつ魚料理を楽しむことになった。過去にショットガンで潰された彼の顔は旧型のサイバースカルに置換されており、表情が動かせない。顎の稼働域も小さいから彼の食事はゆっくりとしている。再建された彼の顔は四十絡みの白人ヒューマンだが、指先を見るともう少し年嵩であろうことが分かる。

テオドールは彼と差し向かいで、ステラは入り口近くの別テーブルで大きなロブスターと格闘して貰うことにする。ポールのボディガードもどこか別の場所にいるだろう。

「君が気にしているレックスという男な。鉄心会のサトウ夫人に取り入ってる若い奴だ。ちょっと幅は効かせてるが、新顔だな」

切り分けた海老の破片をちょっとずつ口に運ぶ合間に、ポール・スタチューはテオドールの質問に答えてくれた。

「良いチクリ屋を持ってないみたいだったけど、フィクサーの癖に友達少ない？」

「シアトルではな」

「というと、よそもの？」

「だろうとは思う。東海岸かどこか、レックスを踏み台にして商売してるやつがいるようだ」

「レックスはランナー上がりって話だっけ……そっちの繋がりかな」

「確証はないが、恐らくそうだろうと考えている」

「レックス君自身の商売の評判はどんなもんかな。どんな仕事を回してる？」
「良く言えば人材発掘だ。シャドウランナーの志望者を拾い、銃を与え、訓練し、相応しい仕事をあてがう」
「悪く言えば？」
「ゴミどもにプレデターを買い与え、ヤクザの使いっ走りをさせて上前をはねている。その気にさせて使い捨てる手際はまあまあだ。サトウ夫人は良い仕事を回してやっているし、上手くバックアップするやつもいるようだ」
「なるほどね……現役の頃はどういうポジションだったか分かる？レックス君」
「さてな、彼のチームの仕事を知らないのでどうにも言えないが」
「が？」
「筋肉担当ではなかっただろう、という話だ」
他に幾つか必要な話や、仕事の話や、直近の雑談をとっくりと交わした。
店を出た後、アルフレッドから返事があった。ライアン・ブレナン名義の駐車場支払い記録から彼の車を特定し、スタッファー・シャックやハンバーガー店の支払い記録などを漁ったところ、ライアン少年の代わりに《トニー・アボット》という人物が会計をしていることが少なからずあった。アボット氏はライアン少年と同年代のエルフ男性だが、不思議なことにカメラの映像で二人が並んで映っている場面は皆無だった。偽造ＳＩＮの使い分けで横着をするという、とてもありがちな失敗だ。テオドールは《ライアン・ブレナン》の名札に《トニー・アボット》の名前を書き加えた。
アルフレッドはライアン少年改めトニー少年のＳＩＮによる支払い記録を幾つか割り出していた。その多くがタコマ区の店舗だった。

ディア・マイ・サムライ【中　1】

テオドールにとっての筋肉担当であるファーストと合流し、一時間少々車を転がしてタコマ区に出た。

タコマ区は再開発された地区とそうでない地区の落差が激しい。清潔なベッドタウンと荘厳な商業施設を外れて二ブロックほども跨げば、腐乱したビルディングと錆びた工場の隙間を薄汚い住人が行き来している。パイクプレイスマーケットの裏路地と違って表通りのお零れが少ないから活気に乏しく、ただ倦怠感と形のない苛立ちが淀むばかりだ。日に日に最新設備の工場に奪われていく仕事と、掃き掃除の埃めいて隅へ隅へ追いやられる圧力を彼らは実感している。

ファイフの寂れたスーパーマーケットに車を止め、カジノの近くの裏路地で顔見知りを捜す。見覚えのない琥珀色のユニフォームを着たオーク少年がたむろして真っ昼間からビールを煽っている。新しいチーム、新しいカラーだ。また頭の中の勢力地図を更新しなければいけない。

求める相手は奥まった小道でカツアゲに遭っていた。さっきのオーク少年らと同じ琥珀色をしたジャケットのオークとトロール二人連れに小突かれて顔を腫らしており、フェンスへ押しつけられて磔の格好になっている。薄汚れたブルーカラーの壮年ヒューマンなど彼らに取っては枯れ木同然だろう。オークの方が見せびらかしているナイフなど使うまでもなく、ちょっと手に力を込めるだけで首をへし折られてしまう。

「悪いんだけど、その人に用事があるんだ」

テオドールはなるべくはっきりと声を張り上げて訴えた。煩わしげにオークとトロールが振り向いてくる。分厚い筋肉に覆われた彼ら二人の総重量は三百キロくらいあるだろうか。彼らにとってみればテオドールの前に進み出たファーストは痩せぎすの小男にしか見えないだろうし、ファーストの人種や腰のカタナに対してもあまり良い印象を覚えなかったかも知れない。日本帝国における苛烈なメタ差別、特にオークとトロールに対するそれはシアトルにも知れ渡って

いる。
「勘弁してあげてくれないかな。小遣いなら、その人の代わりにこっちであげるから」
　テオドールはなるべく和やかに言い、支払い保証済みクレッドスティックを取りだして見せた。壮年ヒューマンの首を掴んだトロールが唸り、オークがナイフを仕舞い込んだ。と、オークが鋭く拳を振るい、ファーストの顔面を殴りつけた。岩石のような拳骨だ。多分それでファーストをノックアウトしてビビらせ、「金を置いて失せろ」とかなんとか言うつもりだったのだろう。テオドールが食らったら顔面がぐしゃぐしゃになるようなフルスイングのパンチだった。それだけに空振りするとオークは派手によろけた。なんのことはない、ファーストはタイミングよく屈んでかわしただけなのだが、上手く引き付けて避けたからオークには目の前から消えたように見えただろう。たたらを踏むオークの足をファーストの爪先が蹴り払うと、オークはどうと仰向けに倒れ込んでしまった。
「ファック！」
　その遣り取りを見たトロールの少年は当然激昂し、壮年ヒューマンを放り捨ててファーストを打ちのめそうとした。軽く二メートル半はある巨体。トロールは存在自体が凶器だ。怒りの形相で迫ってくる様は人間というよりダンプカーか何かに見える。しかしファーストは至って平静にトロールの懐に潜り込むと、踏み出しかけた足の爪先を踏んづけてつんのめらせ、頭の大きな角を掴んで地面に組み敷いてしまった。トロールは何が起きたか分からない様子で、怒りすら忘れてきょとんと瞬きをしていた。実のところテオドールもその時には何が起きたか分からず、後から眼鏡の録画を見たり、ファースト本人に聞いたりしてようやく理解したのだが。
　テオドールは呆けているトロール少年の鼻先に支払い保証済みクレッドスティックを差し出して微笑みかけた。五十新円。
「ケンカしたいわけじゃないんだ、マジで。これで忘れてくれると助かるんだけど」
　ゲイルの顔は酷く腫れており、ナイフで引っかかれた傷も幾つか

あったが、緊急手術が必要なほどではなかった。カラオケボックスに連れていき、医療キットの診断を元に処置をする。洗浄して鎮痛剤を投与、創傷部に保護テープを貼付し、打撲患部を冷却――

ゲイルから話を聞く間、ステラには店の外での警戒をお願いしておく。

「助かったよ、グレイ。それと、あー」

「ファースト」

「ファースト＝サン。ドモ、アリガト」

下手な日本語で礼を述べるゲイルにファーストが会釈を返す。

「さっきのは？　なんで絡まれてたの……」

「《スコーチィズ》とか名乗って先々月辺りからうろつきだしてる連中だ。前までいた《サンズ》はやられたか吸収された。僕が絡まれたのは、汚いナリでドーナツを食べ歩いてるのが気にくわなかったからだとさ。それと僕がヒューマンだから。んで、グレイ、何の用？　いつもの？」

「いつもの。この辺の最近のことを教えて貰おうと思って。ああいう連中の」

「はいよ……いつ頃くらいから？」

「取りあえず今々の分だけでいい」

「ういういぃ。まああんまり変わり映えはしないね。ナントカーズが幾つか出来て、大体消えて、ちょっとしぶといのはマフィアかヤクザかカッターズに持って行かれて、さ」

ゲイルがすらすらと幾つもの名前を諳んじていく。痛み止めのせいで時々口籠もり、唇から垂れた涎を拭く。テオドールはコムリンクで書き留めながら頭の中の地図や名簿を更新していった。チームの名前。おおよその縄張り。カラー。リーダーや特筆するべき中心人物の名前。

よほど巨大な集団に育たない限り、ギャングのチームというのは入れ替わりが激しい。無軌道な少年達の集団はあぶくのように生まれては消え、お揃いのマークやファッションが消し炭になって堆積する。若さ故に変革を渇望する力が巨大な囲いと摩擦し、暴力という熱

エネルギーに浪費されて消え去っていくが、時折小賢しい奴がそういう無為の熱を金に変換する方式を思い付いて、暫くの間おいしい思いをしたりもする。レックスというフィクサーはどうやらその類いの人間だ。ＳｈａｄｏｗＳＥＡでランナー達のぼやきを拾ってみても彼の評判はよろしくなかった。ゲイルも彼の悪評は聞き留めていた。老いたヤクザオヤブンに替わって鉄心会を仕切るサトウ夫人（五十二歳）の後援を受けており（不倫関係にあるのではないかという噂だ）、無軌道な少年に鉄心会のシノギを手伝わせ、使い潰し、称してプロの仕事だの影の世界の厳しさだの宣っているようだ。

そのレックスが、何故テオドールに密告屋を差し向けて来たのか。子供に銃を与えてせこい稼ぎをさせる男と、悪い彼氏にほだされて家出した少女。連想と憶測がもやもやと沸き上がるが、現状当て推量に過ぎないので忘れておく。それよりもトニー少年を追いかけた方が話が早そうだ。

ゲイルから一通りの話を聞いた後、ステラに改めて周囲を見回って貰った。ギャングの二人はきちんと忘れてくれたらしく《スコーチィズ》が待ち構えている様子はなかったが、念のため全員裏口から出てゲイルも港の方まで送っていった。別れ際、五百新円の支払い保証済みクレッドスティックを渡しておく。

「毎度。気をつけてな、グレイ」

「そっちもね」

アルフレッドのリストにあった駐車場を調べ回ったところ、夕方になってサウスタコマでトニー少年の車が見つかった。車はざっくばらんな立体駐車場の三段目に停まっており、監視カメラはあったが死角が多い雑な配置だったので、身軽なステラに頼んでちょっと発信器を取り付けて貰った。そのまま近くで陣取って張り込むことにする。三人だと目立つので、ファーストが車と一緒に三ブロック先のカー用品店、テオドールとステラは道路を挟んで斜向かいのハンバーガー店だ。トニー少年がサラ嬢と一緒ならその場で確保、そうでなかったら後をつける構え。

昨晩きちんと眠ってないのでそろそろ睡魔がやってきた。テオ

ドールはステラと休息を申し入れた。窓際のブース席に陣取ってウェイトレスに睨まれない程度に細々と注文を繰り返しつつ、十五分置きに見張りを交代する。二人がかりの張り込みは天国のようだ。集中力を切らさないで済むし、トイレにも行ける。仮眠も取れる。テオドールは先に貰った休憩時間の間、本格的な眠りで頭がぼんやりしないよう数分だけのうたた寝を繰り返した。ショートスリーパーのステラは特に眠たげな様子もなく、休憩を代わるとコムリンクに没入し、ＶＲモードでトリッドを見ているようだった。続きが気になって張り込みが疎かにならないよう、休憩中にトリッドを見るなら何十回と見て内容を暗記したものだけにするべきだと、テオドールはステラに指導している。彼女の視覚野に直接投影されている映像は特にお気に入りのどれかのはずだ。交代の時間が近付いてステラがジャックインから上がってきたところへ、テオドールは退屈しのぎで何を見ているのか聞いてみた。ステラはお気に入りのＢ級アクショントリッドを答えた。古い作品だ。《サムライ・ストライダー》よりも更に陳腐でご都合主義な筋書きの映画だ。主人公は悪党と戦う正義のサムライ。ある日、悪辣な宿敵に妻子を攫われて窮地に陥る。しかし不屈のサムライは愛と友情に支えられてあらゆる障害を突破し、悪辣な宿敵を打倒し、家族と共に家へ帰って行く。その大団円のエンディングをステラは何度も見ている。彼女の三年前からの愛蔵盤だ。物理メディアのチップをわざわざいつも持ち歩いている。

窓の外はすっかり暗くなっていた。時々、眼鏡のアンプと赤外線を調整し、窓の反射も補正してクリアな視野を保った。ステラは裸眼だが、彼女の眼は《ツァイス・イコン》の義眼だ。暗視と望遠がついていて、張り込みではテオドールの眼鏡よりも頼りになる。

色味を失った景色の中、行きすぎる人間の顔を逐一確認する。

ざっと二時間が過ぎた頃、「ボス」背もたれに寄りかかってうとうとしていたテオドールをステラが呼んだ。はっとして眼鏡に共有視野を呼び出し、ウィンドウでステラ視界を開ける。義眼の暗視望遠ズームにくっきりと写っているのはトニーと思しきエルフ少年の横顔だった。服装はサラ嬢とデートしていた時の写真とは大分雰囲気が

違っていて、地味で人目を惹かないチョイスになっていた。見たところ、少年は一人だ。おんぼろのナップザックを背負っており、何かお使いの帰りというような風情だった。今は立体駐車場の精算機を操作して車を下ろしにかかっている。テオドールはファーストに呼びかけて車の準備をさせた。

トニー少年の車に取り付けた発信器の電波は微弱だが、距離を置いて尾行するには十分だ。ファーストの運転でつけまわしていると、彼の車はファイフのほうへ走っていき、ピューヤラップにほど近い通りで《サザンクロス》という胡乱なクラブの駐車場に停まった。今日更新したばかりのリストを頭の中でめくる。確かその店は《シャドウ・ハウンズ》なる新顔ギャングの溜まり場になっていたはずだ。少し離れた場所でステラ一人を下ろし、テオドールとファーストは適当に車を流してぐるぐる回る。この辺は迂闊なところに停めるとあっという間に車が盗まれてしまうので注意が必要だ。

ステラが周囲で軽くナンパをしたところでは、その店に一見さんが入るのはオススメできないということだった。予想通りではあったのでステラに預けたドローンを使うことにする。大きさも外見もスズメバチそっくりの小型ドローンだ。コムリンクのトロード経由で思考操作を接続すると、《ＭＣＴ―フライスパイ》というロゴが眼鏡の中で大写しになり、操作ウィンドウが開く。頭の中で命令し、そっとケースから発進――ステラの幼げな顔が大写しになる。彼女のジャケットの内ポケットから這い出たところだ。

「どこか入れそうなところは？」

「よさげなのがあるよ、ボス」

囁きを交わすと、ステラは素早くさりげない足取りで店の裏に回り、汚いゴミ袋をするする踏み越えてガタついた換気口まで至った。テオドールはドローンを飛び立たせる。マイクがドローン自身の羽根の音を拾ってブゥーンと唸るが、店内では音楽が流れているはずだから気付かれる恐れは少ないだろう。テオドールはドローンをダクトに潜り込ませたところで半自律モードに切り替え、電波が届かなくなったら店内をさっと撮影して戻るよう命令した。幸い鼠退治用の

ハンタードローンが配備されていることもなく、ドローンは赤外線と超音波カメラを駆使してダクトを踏破し、ヴァイオレットの照明に飾られ重低音の音楽が鳴り響くクラブのホールに到達した。搭載のＡＩは素早く、訓練された犬程度には知恵も回る。《フライスパイ》はホールに飛び出すと、素早く店内を一周した。ウィンドウの画像は速すぎて何も見えなかったが、録画をじっくり確かめればいい。ひとまず《フライスパイ》を脱出させ、ステラに回収して貰う。

テオドール本人は安っぽいコーヒーショップに落ち着き、店内の映像に対しトニー少年とサラ嬢の写真でマッチングをかけた。的中。二人が体を絡め合い、ギャングらしい少年達に混じって踊っている姿が捉えられていた。赤茶色の合皮が《シャドウ・ハウンズ》のユニフォームであるようだ。サラ嬢は上半身に艶出しチューブトップと丈の短いジャケット、下は股下に食い込むようなホットパンツで滑らかな黒肌を大胆に露出していた。じゃらじゃらと煌めくシルバーのアクセサリ。サラ嬢の左肩にちらりと見えるタトゥーシールの図案を拡大して観察する。ジョージ君の言っていた通り、簡略化された狼の姿に見えなくもない。

「連れて帰る？」

クラブの近くで待機しているステラが言う。音声のみでも《ツァイス》の瞳を爛々と輝かせているのが目に浮かぶようだったが、テオドールは否定した。

「彼らと揉めたら面倒だ。ここじゃまずい。もうちょっと事情を調べてからにしよう」

「ういよ――そしたら今日はどうする？」

「彼女が今どこに住んでるのか追っかけてみようか」

二十一時を回った頃、トニー少年とサラ嬢は腕を組んで引っ付き、歩いてクラブを出てきた。サラ嬢の表情は明るく、はしゃいでいた。トニー少年はエルフらしい如才ないスマイルを浮かべてサラ嬢をあしらっていた。車はクラブの駐車場に起きっぱなしにするようだった。路地裏に張り付いていたステラがそっと後を付ける。

彼らの住居を特定するのはすんなりと行った。有り触れたおんぼ

ろアパートメントハウスに見えたが、ステラが見たところでは意外とガードが固いようだった。正面ドアはマグロック付き、監視カメラと通報装置、窓の鍵もしっかりしていて窓自体は金属メッシュで補強されている。それに、警備と思しきギャングの少年が近くをうろうろしている。ステラは中に立ち入らず、外で部屋の明かりが付くのを見張った。四階の角部屋。テオドールはフライスパイを飛ばし、壊れかけの換気扇から中を覗いて、若いカップルが濃密なキスを交わしているところをほんの少しだけ覗き見て離れた。

そこから前後の状況について、テオドールは咄嗟には把握しかねた。

まずフォードを回してステラを拾い、フライスパイを返して貰った。運転はファースト、テオドールは助手席に座っていて、ステラは後部座席に座っていた。テオドールはミニドローンのケースをスラックスの左ポケットに縫い止めていたので、助手席に座ったままだとドローンを傷つけないように収納することができず、適当に車内のどこかに止まらせていたはずだった。

道は外套が少なくて薄暗く、眼鏡越しのモノクロ視界では位置の感覚が狂いそうだった。セダンが二台ぎりぎり擦れ違えるくらいの狭い道だ。ファイフの無計画な住宅地、古びたアパートメントハウスが建ち並ぶ辺りで、信号のない十字路があり――ファーストが徐に車を停め、よどみない挙動で外に出た。シートベルトを外し、ドアを開けて立ち上がり、ドアを閉めるまでの一連の動きは全く何気ないもので、まるで帰宅して上着をだらしなく脱ぎ捨てるかのように無造作だった。テオドールは一瞬、ファーストがセダンのドアを魔法で透り抜けたのかと疑ったほどだ。この時にはもうバイクのエンジン音が聞こえていたかも知れない。

暗視視野の色彩が明滅した。右手側からバイクが飛び出してきてファーストの目の前で急停車した。バイクは二人乗りで、そして突如として何か光を反射するものが煌めき、視界の中でファーストが瞬発的な激しい動きをした。竦み上がるようなクラッシュ音、次いでフルオート射撃の銃声と共に幾つもの細かい破裂音が反響した。

後から録画・録音を確かめたところでは――

建物に遮られて死角になった十字路の右側から、二人乗りのバイクが飛び出してくる。バイクはフォードの鼻先へ横付けするように停まり、後ろに座ったフルフェイスヘルメットの人影がサブマシンガンの銃口をこちらに向ける。そこへ歩み出て待ち構えていたファーストが録画では捉えられない速度でカタナを抜き放ち、恐らくは抜きざまに後部座席の人影を斬った。斬った瞬間は確認できないが、そいつは構えたサブマシンガンを撃たないままバイクから転げ落ちているので、斬られたのだろう。イアイだ。ファーストがカタナを両手で握り直して振りかぶり、刀身がセダンのライトを反射して光る。一人乗りになったバイクのライダーはやはりフルフェイスヘルメットで表情が見えないが、ぽかんと固まったまま動かなかった。実際の時間ではファーストがカタナを切り返してそいつを切り伏せるまで一瞬の出来事だったから、彼には反応する暇はなかったはずだ。ライダーがハンドルに突っ伏して動かなくなる。スズキのバイクは自動で自立し、倒れない――これら一連の出来事と大体同時に、右手側から新たな光源が近付いて路地を照らしていた。ファーストはカタナから右手を離してムチのように鋭く打ち振り、すぐさま体を翻して路地の角に潜む。クラッシュ音。数拍置いて連続した銃声。路地のそこらじゅうで小さな光りが弾け、二月に中国人が慣らす爆竹めいた音がする。

途中の場面はテオドールが見ていない部分なので半分推測になる。刺客はバイク二台に二人ずつ、計四人いた。恐らくは仲間同士で何か抜け駆けのようなものがあり、一台目のバイクが数秒先に現れたためにファーストは先んじて彼らを始末することができた。少し遅れて追いついた二台目の二人は仲間が斬られているところを目の当たりにし、当然と言うべきか、血塗れのカタナを持った男に近付く気持ちにはなれなかっただろうから、急ブレーキをかけた。ファーストはマジシャンの手さばきでクロス・シュリケンを取り出し、無理な減速で横滑り状態になったバイクのライダー目がけ容赦なく投げつけた。ライダーは肩の辺りにシュリケンを食らい、痛みと衝撃でバランスを

崩す。そしてクラッシュ。ライダーは転倒の際に失神したが、後部座席のもう一人は身軽に飛び降りて体勢を立て直すことができた。そして兎にも角にもファーストを追い払うべく、手にしたサブマシンガンを闇雲に発砲する。斬られた二人はひょっとしたらまだ生きていたかも知れなかったが、この乱射に巻き込まれて確実に死んだ。

テオドールの反応が出来事に追いついたのはこの辺になってのことだ。左脇からプレデターを抜き、ドアを遮蔽に外へ飛び出し、状況把握のためにフライスパイを飛ばした。フライスパイは俊敏に路地の斜め上まで上昇すると暗視カメラで状況を俯瞰、コムリンクに常駐している民生用戦術アプリを操作して３Ｄマップに敵味方と主要なオブジェクトをプロットする。敵四人。二人死亡。一人重症で行動不能。一人健在。テオドールとステラはフォードを遮蔽に様子見、ファーストは曲がり角に潜んで弾幕をやり過ごしている。クラッシュしたバイクと後から来たほうの二人は角の右手すぐそこ、精々五メートルくらいの場所にいたので、フォードが制圧射撃の射線から外れているのは本当にギリギリの幸運だった。さもなければ炸裂弾で外装をズタボロにされていただろう。

敵の銃はイングラム・スマートガンＸ。スマートリンク内蔵のサブマシンガンだ。標準装備の抑音器を通した銃声は咳き込むように不明瞭だが、代わりに炸裂弾の着弾がやかましい。フライスパイが捉えた彼の姿はやはりフルフェイスヘルメットだったが、男物のストリートファッションで体格が良く、一目でオーク男性だと分かった。彼は右手でスマートガンＸを小分けに連射しつつ、左手で腰の辺りをまさぐっていた。テオドールが眼鏡のウィンドウを強く凝視するとドローンのカメラが自動ズームし、彼のベルトに手榴弾が吊してあるのを見咎めた。金属のリングに安全ピンを引っかけており、片手でも手榴弾を思い切り引っ張れば安全ピンを抜いて着火できる装着方法だ。

スマートガンＸの弾薬クリップは標準で三十二発。そう長く弾幕を張ってはいられないが、ガク引きしない程度の配慮が効くならあと三秒か四秒は保たせられるだろう。そいつが手榴弾を着火し、仲間に構わず投げつけ、炸裂するくらいの時間は稼げるということ。

「手榴弾！」
テオドールは囁き回線に向けて警告を叫んだ。ステラがぴくりと身動ぎして飛び出しかけたが、ファーストは警告するまでもなくとっくに動いていた。彼はまずカタナを握り直し、左手を鞘に見立てて刀身の根元部分を逆手に持った。普通に握ったままだと具合が良くなかったのだろう。重心だとか、手元の動きだとかが。刀身の根元は切れ味が鈍いし鍔を固定する金具が嵌っているから、握っても手は傷つかない。そしてファーストは建物の壁に向き直り、一歩だけ助走し、思い切り跳んだ。彼の右足が壁を蹴る。テオドールが同じことをやっても腰の高さに足跡をつけるくらいが精々だろう。ファーストの右足はそれよりはずっと高い位置を踏みつけた。だが、彼の行動はそういう次元の話ではなかった。
ファーストは蹴りつけた右足を取っ掛かりに、壁を駆け上がった。垂直な壁を垂直に駆け登ったのだ。
あまりに自然で無造作な動きだから、まるで壁に立てかけたハシゴを素早く登っているだけのようにも見えるのだが、勿論そんなものはない。超常的な動きだ。大股四歩、三メートルばかり上がったところで向きを斜めに変え、今度は曲がり角を跨ぎ超える。
するとファーストが出るのは角を曲がってすぐそこにいる敵の頭上、斜め上だ。銃弾は彼の眼下を通り過ぎていく。敵は左手で探り当てた手榴弾からピンを抜こうとしており、ファーストに気付かない。敵のヘルメットはディスプレイを内蔵しておらず、視界が狭かったのも災いしたようだ。
ファーストが壁を飛び降りた。黒いコートをはためかせ、悪夢の使いめいて。左逆手に持ったカタナを右手で掴み直し、左手は峰に添えるようにして――
落下の勢いのまま、撫で斬った。
ファーストがそいつの背後に着地する。左肩をざっくりと割られたそいつは雨樋から溢れる泥水のように大量の血を流してふらつき、力の抜けた手からサブマシンガンを取り落とし、やがて倒れた。
「パねえわ……」

ステラが感嘆を通り越して呆れた調子で呻く。
ファーストはゆったりした仕草でカタナの血を振り払い、鞘に戻す。あれだけの大立ち回りを演じながら息の一つも乱しておらず、今し方作り上げた血の海を睥睨してなんら感情を浮かべていない。落ち窪んだ彼の眼は淡々と周囲を見回して、敵が死んだ振りをして隙を伺ってはいないか、新手が来ないかと機械的に警戒しているだけだ。そのあまりに平静な佇まいは暗視カメラ越しにも何か不吉な、亡霊や死神のようなヒトではない存在に思える。そして実際、ファーストがやってのけたイアイも壁を駆け上がる手品も人間技ではない。
比喩ではなく事実として、人体が本来持ち得る力ではなかった。
ファーストは広義の魔法使いだ。
タツジン、《アデプト》と呼ばれる類の覚醒者である。
アデプトは修行によって神秘的な〝キ〟（氣）の力を身につけ、人間を超えたパフォーマンスを発揮する。〝キ〟は鋭い反射神経や瞬発力といった肉体面の増強をもたらし、目に見えない精神的な要素を変質・拡張させ、また時には物理法則を無視した外的な働きかけを成し遂げる。そうした〝キ〟の顕れ方はアデプトごとに多種多様で一口には言えないのだが、ある種のステロタイプは存在する。古風な格闘技のタツジンがそれだった。例えば中国のカンフーマスター、日本のニンジャ、インディアンのバーサーカー……
彼らは修行した魔法様式に精神的な基礎が根付いているため、しばしばトリッドの役者めいた不条理で時代錯誤な振る舞いをする。銃を持った敵にカタナで挑み、あまつさえ勝ってしまうケンディスト（剣道家）のソード・アデプトといった風に。
「ボス、一人生きてるけどどうする」
完全に呆けていたテオドールをステラの声が呼び戻した。気がつくと彼女もそばにいなくなっていて、襲撃者四人の面相を手早く改めているところだった。三つの死体と一人の重症患者の顔画像が共有領域に上がっている。ヒューマン、男、若い。ヒューマン、男、若い。オーク、男、若い。オーク、男、若い——風防の下から表れた顔はどれも幼く、精々十代の後半というくらいに見えた。

ファーストに斬られた三人は即死と思われ、或いはまだ意識不明であるかも知れないが、生存の見込みがある者はいなかった。息があるのは二台目のバイクのライダー、転倒して意識を失っているオークの少年だ。シュリケンを受けた肩の出血と擦過傷、打撲、骨折などが疑われた。テオドールは頷き、「連れていこう」と答えた。

移動の間、車の後部座席でオーク少年に止血処置を施した。テオドールは医師ではないが、応急キットの指示は適切だった。キットは眼鏡のＡＲオーバーレイとリンクして手順を逐一表示し、シュリケンの摘出手順や鋏の歯が立たないアーマージャケットの脱がせ方を指示してくれた。縫合と止血は付属のハンディソーイングマシンを傷口に押しつけて自動でやって貰った。クロス・シュリケンは四方に刃が突き出た構造上、さほど深く突き刺さらないのが幸いし、アーマージャケット越しだったこともあって少年の創傷は軽かった。心配なのは転倒した際のダメージだったが、これもひとまず命に別状はないという診断だった。

エルヴン・ディストリクトに小五月蠅い詮索をしないモーテルを取り、少年を連れ込んだ。ファーストは見た目の割に力持ちだが、オークの少年は軽く一〇〇キログラム以上はありそうだったからテオドールと二人がかりで担ぎ込まなくてはいけなかった。

少年をベッドに寝かせると、テオドールはまず縫った傷口が出血していないことを明るい場所で確かめた。それからプラスチック拘束具を使って少年の両手両足を〝腕組み・気をつけ〟の姿勢で縛ったが、それでも彼が暴れたらテオドールくらいは打ちのめしてしまうかも知れない。何しろ腕といい胸板といい、テオドールとは倍ほども太さが違うのだ。テオドールはいつでもプレデターを抜いて突きつけられるように身構え、一声で少年をちびらせるような気の効いた脅し文句を頭の中で練習しておかなければならなかった。しかし残念ながら、失神した少年はテオドールに実践の機会を与えてくれる様子はなかった。ファーストは部屋の入り口に黙って突っ立っており、ステラはベッドの下に転がって一眠りしていた。ほどなく手配した闇医者が来て、応急キットと大体同じ診断をして帰っていった。

少年のコムリンクを（ちょっと親指を借りてロックを外し）調べて見たところ、彼が《シャドウ・ハウンズ》のメンバーであること、《ダリオ》という通り名であることが分かった。グループメッセージアプリの暗号はテオドールの手持ちツールで解除できるような簡単なものであったため、襲撃の経緯についてもおおよそ知れた。〝誰かさん〟にテオドールとステラの始末を頼まれたものらしい。事情を知らされないまま命令され、顔と名前を渡され、交通管制に不法アクセスして車の追跡をするツールを貸し与えられていたようだ。テオドールとステラの情報は表向きの職業程度、ファーストのことは触れられておらず、彼がアデプトの用心棒であることも当然知らなかった。情報の少なさについては仲間の間で、つまり死んだ他三人との間で若干議論はあったようだが、「これもシャドウランだ」というリーダー格（最初にファーストに斬られた少年だった）の一声で打ち切られていた。

シャドウラン。

テオドールは舌打ちを堪えた――シャドウラン。金ずくで実行される違法行為を、そんな風に気障ったらしく呼び慣わしたのはどこの誰なのだろう。今やシャドウランナーは職業と錯覚されるほど社会の隙間に根を下ろし、恒常的な需要を引き込んで金の流れを貪り、あまつさえ市場めいたものすら形成している。結局のところ、彼らの役割は企業や犯罪組織が珊瑚の毒触手めいて伸ばす末端、細く透明で切り離し可能な器官に過ぎないというのに。

少年達に「シャドウラン」を持ちかけたフィクサーは、彼らとの連絡では《タイラー》という名前を使っていたものの、連絡に使ったコムコードから辿れば容易くレックス氏であることが分かった。密告屋を差し向けるだけではなく、実力行使に及んだというわけだ。だが、ここまでする理由が分からなかった。レックス氏から恨みを買った覚えはない。過去に何らかテオドールが思い至らない因縁がないとは言い切れないが、だとしたら今更、お粗末な密告屋を頼ってテオドールを調べるはずがない。もっと以前から調べをつけているはずだ。つまり原因は直近の仕事、サラ嬢の捜索依頼にあるのだろう。だ

がテオドールが家出娘を一人連れ帰ろうとしているからなんだというのだろう。《シャドウ・ハウンズ》の連中が仲間のガールフレンドを守ろうとして勝手にいきりたったというなら、まだ分からなくはない。それであればちょっと銃やカタナをチラつかせ、賄賂を交えた駆け引きをすることで穏便に解決できただろう。だが現実には初っ端から流血沙汰だ。刺客らは事情を知っていた形跡がなく、〝仕事〟の一環として金ずくで襲ってきた。テオドールがサラ嬢捜索の過程で《シャドウ・ハウンズ》を探っていたことも、トニー少年のガールフレンドを連れ戻そうとしていたことも、彼らは知らなかった。

サラ嬢は思ったより厄介なことに巻き込まれているのだろうか。ただ悪い彼氏に着いていったニュービー・バッドガールというだけではなく、裏社会の利害に嵌り込んでしまったのか。その利害当事者はレックスか――或いはもっと後ろに誰か別の人間がいるのだろうか。

考えを捏ね回しているうち、テオドールは意識の焦点がぼやけ、思考が空転を始めた。自然とあくびが出る。

「休んだらどうだ」

というファーストの勧めに逆らわず、床に寝転がってステラの横で眠った。

結局、オーク少年のダリオが目を覚ましたのは夜明け近くになってのことだ。

「傷は痛むか」

「用便は大丈夫か」

「水を飲むか」

テオドールが起床すると既にステラは起きていて、ファーストは恐らく起きっぱなしだった。時刻は午前九時を過ぎていた。既に二人と少年の間で会話があったらしく、共有領域にステラの録画記録が置いてあった。記録は０５：０６から始まっていた。

痛み止めの注射がまだ聞いていたのが幸いし、ダリオ少年は目を覚ました時にパニックを起こしたりはせず、怯えて失禁することも、逆も興奮して暴れ出すこともなかったようだ。ファーストが淡々と傷の具合を確かめ、トイレの心配をし、水を勧めるのに対し、少年はぼ

んやりと受け答えをしていた。ファーストが仲間を斬り殺した男だと把握するまで一時間くらいは掛かっていたようだ。断続的でぎこちないやりとりがぽつぽつと交わされ、ステラが目を覚ましてもそれは変わらなかった。

「なんで殺らねえんだ……」

ダリオ少年がファーストにそう聞いたのが午前七時過ぎ。トリッドからの借り物めいた言葉選びではあったが、少年の口ぶりや物腰はおずおずと遠慮がちであり、怯えを押し隠し、死刑の実施はいつになるのか遠回しに探ろうとしていた。

「無為に殺す気はない。お互い仕事でやっているだけだろう」

ファーストの答えは少年は安堵させると共に、それとなくプライドを擽ったようだった。この男にしては上手いこと乗せたものだとテオドールは感心する。それとも本心なのだろうか。ダリオ少年は何度か躊躇った後、「あんたらも……その……ランナーか？」と尋ねた。ファーストは肯定。ステラは黙っていた。頷きさえしなかったようだ。

「あんたみたいなヤツがついてるなんて、全然、聞いてなかったんだ。あんたみたいなヤバいサムライがいるなんて」

「俺はサムライではない」

「え、あ、そ、そう、なのか……とにかく、聞いてなかったんだ」

「そうか」

「みんなは……死んだ？　死んだ、よな……」

「四人のうち、お前以外の三人死んだ。やったのは俺だ」

会話が途切れた。十五分弱、スキップする。ダリオ少年が「トイレに行きたい」と素直に言い出せたのが０８：１７。ファーストが少年の足を縛る拘束具をナイフで切り、立ち上がらせる。ステラに見守られて二人でバスルームに入っていき、すぐに戻ってくる。

また暫く沈黙。

ダリオ少年は落ち着かない様子で押し黙る。寡黙なファーストは強いて自分から会話を切り出すこともなく、ステラは相変わらず黙っている。

スキップ。テオドールが起きる前の最後の会話。
「俺、どうしたらいいんだ、ランをしくじって、みんな死んで……あんたもランナーなんだろ、なあ、どうすりゃいい？」
「お前はどうするつもりだった？　もししくじったら」
「……考えて、なかった……考えてなかった……」
「そうか」
「……」
「仲間の仇討ちをするなら相手をしよう。俺一人で。腕を解いて銃も貸す」
ダリオ少年は顔を伏せて、力なく首を振った。啜り泣きの嗚咽が漏れた。
そして現在。ダリオ少年は俯いたままだ。テオドールが起き上がると視線をちらりと寄越すが、すぐに視線を落としてしまう。大きな図体をして、テオドールにさえ怯えているようだ。
「朝飯にしようか」
自販機でソイバーとニュートリソイ・ケーキを買い求め、朝食にした。テオドールはソイバーを一つ食べた後、腕が使えないダリオ少年の口にニュートリソイケーキとコーラを運んでやった。ステラはコーラだけ、ファーストは顰めっ面でニュートリソイケーキをかじった。
食事が済むとテオドールは改めて名乗り、職業が探偵であること、家出人捜しをしている旨を述べ、何故自分達を襲ったのか尋ねた。ダリオ少年は知らないと答え、テオドールがじっと見つめると、本当に知らないと繰り返した。コムリンクに記録されていた会話通り、本当に知らないのだろうと思われた。
サラ嬢とトニー少年の写真を見せ、二人について知っていることはないかと質問すると、こちらの方には答えた。やはりトニー少年は《シャドウ・ハウンズ》のメンバーだった。仲間内での呼び名は《フィル》だ。テオドールはトニー少年のタグをフィル少年に張り替えた。これが最後のタグになりそうだった。
サラ嬢はトニー少年改めフィル少年が招き入れる形で最近仲間入

りをしたようだ。フィル少年は〝ボス〟のお気に入りで、よく内緒の使いっ走りをやらされている。他のメンバーからは軽いやっかみを受けているようだ。ここ最近は特に大事な仕事を任されているらしく、フィル少年とサラ嬢にちょっかいを出してはいけないと〝ボス〟から通達があった。

ダリオ少年の言う〝ボス〟は、彼の方では名前を伏せようとしていたようだったが、テオドールがタイラー（＝レックス）の名前を出して突っつくと諦めてそう認めた。

「そうだよ、タイラー＝サンだ」

「《シャドウ・ハウンズ》のリーダーはオブシーダ＝サンとか言わなかったっけ？　ストリート・サムライの」

「リーダーとはまた別で、ボスは……タイラー＝サンは、元締めっつーか、仕事をくれる人っつーか……なあ、俺が言ったってことは」

「言わない、言わない。それで、フィル君とミス・サラは《ハウンズ》の中で何してるの」

「……リーダーと、それからうちでも特にヤるやつらとでつるんで、何かコソコソやってる。大きな仕事、するんじゃないかって噂だけど」

「ミス・サラもそれに参加してる？」

「つるんでる風には見えた。フィルのやつにひっついてる、だけかも知れないけど」

「オブシーダ＝サンがその仕事に参加させてる人の名前、分かる範囲で教えてくれないかな」

流石にこの質問はダリオ少年も渋ったが、「こちらで調べれば分かることだが、サラが何か危険な目に遭う前に連れ戻したいので君がここで教えてくれると助かる」「言えばこれ以上は何も聞かない。警察にも連れていかない」と説得し、五人の通り名と特徴を聞き出した。

昼前にチェックアウトし、ダリオ少年を車でタコマまで送った。

「オブシーダ＝サンとタイラー＝サンによろしく。伝言はきちんと録音した？　こっちはミス・サラを連れ戻したいだけで他意はない。何か誤解があるようだからきちんと話し合いたい。だから銃を向けてきたダリオ君を手当したし、こうやって丁重に送ってやった。警察に

も話していない。こっちなりの誠意だ。だからテオドール・マガトのコムコードまで間違いなく連絡をくれ――と、そう伝えて欲しい」
拘束を解きながらそう念押しすると、ダリオ少年は戸惑い気味に頷き、テオドールらが離れるまで立ちつくしていた。
昨夜の悶着とダリオ少年に預けた伝言により、何かサラ嬢の立場に悪影響があるのではないかという気がかりはあったが、思ったより事情を把握できていないことが分かった以上、下手にタコマをうろついて彼らを刺激する方が危険だった。それに、眠っている間に幾つか新しい話が届いていた。
フリーウェイに入る前にスタッファー・シャックでトイレを借り、飲み物を買って、車の運転をファーストからステラに交代して貰った。結局徹夜だったファーストは缶マッチャに手をつけることもなく、後部座席に着くなりさっさと眠ってしまう。ステラはハンドル片手にチュロスを囓って、フリーウェイに入った辺りでようやく表情を和らげた。
「ねえボス、あいつさあ、あのダリオっての」
「うん」
「ブッ殺されるよ、多分」
「やっぱりそうなるかな」
「多分ね。ああいう連中のやり口って、そうだから……ああ、別にボスをどうこう言うわけじゃないんだ。だって、こっちが気を使ってやる理由なんてないじゃん？　成り行きで死に損ねただけで、ファーストだって命だけは助けてやろうとか、そんなことは思ってなかっただろうし――ボスだって、折角だからちょっと話を聞いて、ついでにこっちのポーズを見せるのに使っただけ、だろ……」
「まあ、ね」
「だからどうしたってワケじゃないけど」
「気分悪かった？」
「――ちょっとね。けど、どうしようもないよ。大体、そういうことやるのを決めたのはあいつ本人なんだしさ」
「うん……」

「……悪かったよ。ボスだって分かってただろうし、好きで仕向けたわけじゃないんだってくらいはさ、あたしでも分かるよ。凹ませたかったわけじゃないんだ」

ソイ・ラテを一杯飲み干す間にフォードはダウンタウンへ入った。

テオドールは車輌センサーを活用して尾行に十分な注意を払った。ダリオ達が使っていた交通管制への侵入ツールは、タコマの裏路地ならともかく幹線道に入れば追跡はできないだろう。

本当ならファーストは一度帰らせてきちんと休憩を取って貰いたいところだが、まだ働いて貰わないといけない理由があった。サラ嬢の指輪の出元が分かったという知らせが入ったのだ。

ディア・マイ・サムライ【中　2】

★

　出元を突き止めてくれたのはシルバという友人の魔法使いだった。彼女はシャーマンではなくドルイドだが、ちょっと込み入った事情によりシャーマン関係にも顔が効く。困ったことに彼女は精霊と話すのは上手いのだが人間相手となるとからきしで、彼女の交友範囲外の人間と交渉をするとなるとテオドールが付き添っていかなければならなかった。

　待ち合わせはエルヴン・ディストリクトの洒落たカフェにした。客の大半が見目麗しいエルフの有閑マダムだからテオドールやファーストは見事に浮くが、逆にこういう場所でなければシルバの方が目立ってしまう。

「みんな」

　と、聞こえた細い声は囁き回線からのものだ。ＡＲの誘導マーカーが床に光の線を曳く。それを目で追うと、奥まった席の脇で立っている北欧系エルフ女性の姿が見えた。絹糸めいた真っ白い髪にすらりとした長身。天然ものの雪化粧（なんとノーメイクだ）を施した色白で精緻な風貌は、〝可憐〟と表現するには大人びているし、ただ〝美形〟と言い捨てるには華奢で儚すぎる。稀代の芸術家の手になるアラバスターの彫像が動いているかのような錯覚に陥り、視界に捉えた瞬間、周囲の現実感を奪う。そんな美人だ。パーカーとレギンスという簡素な格好さえ、人形が服を来ているかのようで現実感の乖離に一役買ってしまっている。エルフだらけの店内にあってなお目立つその娘が、楚々とした仕草で手を振っていた。

　テオドールらは席を囲み、食事を注文し、挨拶を交わした。

「大学はどう、シルバ」

「う、ん……最近は、ん、まあまあ」

「論文が忙しい時に手伝って貰って悪いね」

「ん、いや、うん……別に」

　上等な弦楽器に似た美しい声が、どもりを含んでぎこちなく耳をく

すぐる。愛想笑いを浮かべるでもなく、ぼんやりした表情のまま俯き気味で最低限以下の受け答えをするシルバの姿は――傍目から何も知らずに伺えば、怜悧な美貌のエルフが超然と構えているようにでも見えるのだろうか。テオドールがジャブ代わりに投げた近況の話題ですらシルバは既にグロッキーだった。テオドールが失策を悟って話題をフェードアウトさせる構えに入ったところで、ステラが首を突っ込んできた。「同盟精霊の絵を描くんだって言ってたやつ、どうなったの？」「まだ……」「なんか新しい魔法覚えた？」「えっと……」「あ、ちょっと見てよ、ヴァシチューブでこんなトリッドあったんだけど、シルバってこういうのできる？」「できるかも……」「マジで!?」小柄で幼げなステラが、長身で大人びたシルバに絡む様はまるっきり子供と大人だ。

美人エルフの魔法使いなんて言うのはフィクションでは定番過ぎて最近逆に見ないくらい定番のプロフィールであるけれども、シルバは実在するそれだ。少なくとも容姿と魔法で言えば文句なしに陳腐なステロタイプそのままだった。ステラはそんなシルバに憧憬を抱いているのだが、シルバの方ではぐいぐい踏み込んで来るステラを苦手としていた。それでもいちいち一生懸命答えようとしている辺り、付き合いがいいのか柔弱なのか。

ステラの猛攻に押し倒されそうになったシルバが助けを求める視線を向けた辺りでファーストがステラを制し、「まず仕事の話だ」と場を促した。ステラが残念そうにいずまいを正し、シルバはちょっとだけファースト寄りに位置を直す。ステラから庇って貰おうというようだった。口数が少ないのが良いのか、シルバはファーストには懐いている。二人が並んで歩いたらうっかりファーストが職務質問されかねない眺めではあるのだが。

さて、と仕切り直し、テオドールは共有領域に資料を広げた。

「じゃあ、シルバ。調べてくれたことを教えて欲しいんだけど」

アンティークショップ《ＴＲＵＨＯ》はベルタウンの古く怪しげなビルの地下にあった。店頭のＡＲ広告はいかにもミーハーな魔法趣味者向けといったアクセサリを展示しており、看板にはわざとらしい

アルファベット表記のサーリッシュ公用語が踊っていて、バッファローの頭蓋骨のイミテーションが添えてあった。ここが裏に回れば本物を取り扱う店だということを知っている人間は、さほど多くはないはずだ。

シルバから店の名前を聞いた後、テオドールはポール・スタチューに頼んでこの店のことを調べて貰った。ポール・スタチューが返事をくれた頃には十五時を回っていて、幾つか他のことをするだけの時間があった。ステラにナイト・エラントの知人のところまでお遣いを頼み、彼女と合流して《ＴＲＵＨＯ》へやってきた頃には十六時前になっていた。

店主のホース氏はネイティブ・アメリカン系のくたびれた中年ヒューマンだ。安っぽい先住民衣装はくたびれており、目つきは虚無的な苛立ちと無気力に燻っていて、顔色と体臭から薬物の気配がした。テオドールはこういう手合いをそれなりに見てきた。なまじ魔法の才能があったばかりに全能感に溺れて道を見失い、無手勝流で好き放題に力を振るえる裏社会を選んだはいいが、魔法が使えるというだけでは通用せずにしくじりを犯して評判を落としたり、犯罪組織や警察に目をつけられたりしてやむを得ず足を洗い、前歴を隠してひっそりと暮らすような人間だ。自分如きの魔法では力ずくの世渡りができないことを悟り、しかし今更身の丈にあった成功を手に入れることもできず、学び直す機会もない。ホースはそんな人種の臭いがした。

シルバとポール・スタチューの話をまとめたところでは、ホース氏はＳＩＮも魔法免許も偽造のモグリであるらしい。シャーマンであることは確かで、前はひょっとしたらシャドウランナーでもやっていたのかも知れないが、今はこの胡散臭い店を取り回し、結界の張り替えなどをやって糊口をしのぐ傍ら、パイププレイスマーケットに出て占いやアクセサリー売りなどをやることもあるという。《カッターズ》へ上納金を納めてはいるが、特定の結社やギャング、フィクサーなどと深くつるんでいる様子は全くない。「落ちぶれたケチなまじない屋」というのが界隈の評価だ。口座への金の出入りもしょぼくれた

もので、自前で呪物を作る技があるから、それでもなんとかやっていけているようだが……

ステラを外の見張りに残してテオドールとファースト、シルバの三人で訪問したところ、ホース氏は友好的とは言いがたい様子でテオドール達を迎えてくれた。三人中二人が覚醒者であることは見張りの精霊が報告していただろうし、ファーストのカタナが剣呑な代物であることも分かっていただろう。魔法使いが堅気でないアデプトとマンディンを連れてノンアポで訪ねてくるなど、まともな客でないことは明らかだ。だから彼の取った対応も無理はない。店に入るなり、テオドールらの背後で水の精霊が顕現した。後ろに精霊が張り付いていることはファーストが囁きで警告してくれていたから、人間の輪郭を象った水煙の塊が異様な唸り声と共に顕れた時もテオドールは平静を保っていられた。シルバはおどおどと腹の前で組んだ手指を弄んでいたが、それは目の前の中年男にどう接したものかと怖がっているものであって、魔法的な脅威には至極自然体だった。それとなくテオドールとファーストの脇に一歩離れて立ち、ホース氏とテオドール達が視界に入るように保っていた。そしてファーストは相変わらず、落ちくぼんだ死神の目つきで周囲を睥睨していた。

顕現というのはアストラル体のまま物理空間に姿だけを投影する魔法的な所作のことだ。人間で言えば服の襟をめくって脇の拳銃を見せびらかすのに等しい。これが精霊の実体化にまで踏み込むと安全装置を解除して銃口を向けた状態だ。幸いにして店内に他の客はいない。

少しの間、睨み合いがあった。

こちらが手慣れていることをホース氏は察したようだ。シルバが呪文防御を敷いているから呪文が決まる確率はぐっと低くなっているし、爆発を起こすような防ぎにくい呪文もこの至近距離では使えない。精霊をけしかけてもファーストが迎え撃ち、テオドールが術者を撃つ。ホース氏は緊張の面持ちで精霊を引っ込めた。テオドールは内心で胸を撫で下ろす。もしホース氏が呪文を撃とうとしていたなら即座にファーストのイアイが飛んで流血沙汰になっていたところ

だ。魔法使いは呪文の隠蔽性をしばしば過信するが、これだけ間近なら呼吸や目配りから呪文の前兆を察知するのは難しくない。ホース氏に分別があったのはどちらにとっても幸いだった。

張り詰めた気配が和らいだのを見計らって、シルバが防御の構えを緩めないまま口を開く。

「あの、ホースさん。その、ちょっと伺いたいことがあって、あ、乱暴なことをするつもりはないんです。こっちの二人は友達で、その、ファーストはカタナを持ってますけど、日本人だからで、えっと、カタナを抜いたりは……するかも知れないけど、乱暴な人じゃないんです。あ。それで、こっちのグレイが聞きたいことがあるって。えっと、ああ。指輪！　指輪のことなんですけど……」

シルバが一生懸命にホース氏へ事情を説明するところを、テオドールは暫くの間、辛抱強く見守った。魔法使いという人種は概してプライドが高く、マンディン（非魔法使い）を緩やかに見下す傾向がある。会話を拗らせないためには第一声をシルバに任せるべきだった……彼女が多少口下手であっても。

そしてホース氏が「指輪」と言われた瞬間に反応を見せたのに、テオドールは気がついた。劇的な反応というわけではない、むしろ静かで落ち着いた、事前に予測していたことに確信が持てたというような、そういう目の光だった。

音色は詩吟のように快いがいまいち要領を得ないシルバの言葉を聞き流しつつ、ホース氏はゆっくり息を整えてこちらをじろじろ品定めした。

「なんなんだ、あんたら」

「あ、えっと、こっちのグレイは探偵で……」

シルバの視線に助けを求められて、テオドールはサラ嬢の画像を広げつつ口を開く。

「ホースさん。少し前、この女の子に呪物の指輪を売ったでしょう。銀細工の。そこらの子供に売るには本格的だなと思いまして」

「俺の商売のことだ。探偵だかなんだかに押しかけられるようなことじゃない」

「彼女は今、家出をしているんです。それもいかがわしい連中に引き入れられています。ただの不良というだけではなく、ある種の……プロのような人間が関与をして、彼女を狙い撃ちしているような様子があります。ですが、彼女はただの高校生です。裏社会の深みに嵌まっていたような前歴もありません。何故彼女が狙われたのか、あなたは何か事情をご存じでないかと思いまして」
「知らねえ」
「指示はアストラル投射で面談して受けているんですか？　ですが、見返りを受け取る時にマークされていたら無意味ですよ、ホースさん。アストラル空間で物品は受け取れないでしょうから。この街のフィクサーが貴方のことを知れば、今まで通りには行かないでしょうね」
「……脅す気か」
　勿論、脅す気だった。テオドールが「冷酷非情な謎のエージェント」顔でぶちまけたのは、ポール・スタチューがくれた情報を元に憶測半分ハッタリ半分でデッチ上げたカマ掛けに過ぎない。テオドールの見てくれはお世辞にも迫力がある方ではないが、左脇を膨らませて魔法使いのトモダチを二人も引き連れ、いかにも自信たっぷりスラスラまくし立ててやればけっこうマシになるものだ。少なくとも世間に倦んだヤク中予備軍のシャーマンを、武力的優位を盾に怯ませるくらいの効果はあった。
　サラ嬢が件の指輪を手に入れたのと同時期にギャングが接近してきたというのはタイミングが良すぎた。単なる偶然なら見当違いで済むが、必然であればホース氏がことの根幹と関わっていることになる。だがホース氏の近況はクリーンで、例の《シャドウ・ハウンズ》やレックスは愚か、フィクサーや特定のギャングなど裏社会の人間相手に仕事をしている様子はなかった。なさ過ぎた。だから「あるとすれば魔法絡みだろう」という当て推量を駄目で元々とぶつけて見たのだが、どうやら当たりだったらしい。以前、浮気調査で似たようなやり口に出くわしたのが幸いした。
「……大したことは知らない。本当だ」

「あの指輪、同じようなものをこれまでも売ってきたようですが？」
「ああ……全部で六つくらいだ」
「どういう品物なんですか、アレは」
「タグだ」
★
ステラがナイト・エラントの知人から受け取って来てくれたデータチップを裏用コムリンクに差し込む。チップの中身は二週間前に起きたとある強盗事件について、監視カメラの記録や現場検証を元にエージェントＡＩが画像編集した再現トリッドだ。流石にアレス重工傘下の警備会社は良いエージェントを使っており、動画投稿サイトにでも横流しすればかなりの再生数を稼げるだろう出来映えだった。
被害に遭ったのはピューヤラップ地区のとあるアパートだったが、そのアパートは一軒まるごと小さな麻薬ディーラー《サムスン＆エッグス》のアジトになっていた。当の麻薬ディーラーが防犯機器を設置していたのでナイト・エラントの現場検証はかなり楽だったようだ。
強盗の一団は裏口から侵入した。
事件発生直前の２１：５５から再生し、再現トリッドの視点を裏口に移動させると、警備員と思しき下っ端の若い男が二人、裏口の近くの階段室に詰めているのが見えた。鼻に大きなピアスをした黒人と瞼にリングを通したアジア系。退屈そうにＡＲモードのコムリンクを弄り、無為な会話を交わしたりして時間潰ししている。吸っている煙草もニコチンを摂取するだけの健全な代物だ。階段室にはエアロゾルセンサーがあって、見張りが仕事中に大麻やらブリスやらを嗜むようなら雇い主に通知が行くよう設定されていた。
２２：０２。異変が起きる。階段室の何もない空中から突如として青白い炎のようなものが発生し、渦を巻き始めた。空気が蒸発するような異様な物音が一緒に記録されていた。一時停止して火災報知器のログを確認する。温度の異常はなし。
再生再開。
炎のような超常のオーラは螺旋を描いて収縮し、ぱっと弾けた。次の瞬間には巨大な狼のようなものがその場に現れていた。体高が人

間の腰ほどもあるので狼というより熊に見えるが、骨格や特徴で言えばサイズアップしたハイイロオオカミだ。前兆の炎が見えてから出現まではおよそ一秒。体の輪郭が揺らめいて見え、青白いオーラを纏い、そして空中に浮かんでいる。勿論普通の狼ではない。合成映像という可能性を無視すれば、これは魔法使いが操る精霊だ。何もないところから突然現れたように見えるのは、一度アストラル体の状態で接近してから実体化したためだろう。アストラル体は通常の物質をすり抜けてしまうし、肉眼を含む通常のセンサーでは一切捕捉できない。

警備員の下っ端二人のうち、鼻にピアスをした黒人の方が咄嗟にＵＺＩサブマシンガンの銃口を向けることができた。もう片方はスリングで吊して腹に乗せたＵＺＩの銃把を探り当てるのにもたついた。しかしどのみち、結果に大差はなかったはずだ。

黒人が発砲する。三点バーストの銃火がＵＺＩの無骨な銃身で瞬き――テオドールは一秒巻き戻してコマ送りした。斜め上から俯瞰するカメラには、狼の精霊に銃弾が命中する瞬間が写っていた。発砲と同時に精霊の胴体と鼻先の辺りで焚き火が爆ぜるような青い火の粉が舞い散っていて、そしてそれだけだった。狼の精霊は怯みすらしない。アストラル体の状態と違い、実体化した精霊に物理的な攻撃をぶつけることは可能ではある。しかし実体化した精霊の肉体は物理学・生理学的に『不思議なエネルギーで出来た不思議なカタマリ』としか言い表しようがないものだ。銃弾にせよナイフにせよ、人間なら体のどこかに当たれば出血性ショックや動作の阻害といった効果が見込めるところを、精霊に対しては力尽くで削ぎ落とすしかやりようがないため、効率が悪い。映像に映っているようなサイズの精霊と戦うならせめてライフルが欲しいところだ。サブマシンガンでは甚だ心許ない。

再生を続ける。

精霊が実体化してから行動に移るまでにＵＺＩは二度発砲されていた。距離が近いのでバーストの二射分、六発の弾丸は漏れなく命中しただろうが、狼の精霊は意に介さず飛びかかり、野太い前足を叩き

つけた。鼻ピアスの黒人は階段に叩き伏せられて動かなくなった。
下っ端のもう片方、瞼にリングのアジア系がここでようやく自分のＵＺＩを掴むことに成功するが、揺らめくオーラが肌を炙るほど間近で精霊に睨み付けられ、硬直した。銃を向ける前に頭を囓り取られそうな間合いだ。しかも頼みのＵＺＩは目の前の敵に効果がないということを見せつけられている。これで戦意を保てという方が無理な話だ。
「扉　ヲ　開ケロ」
狼の精霊が牙の間から軋るような音声を発する。驚くには値しない。精霊が魔法的なロボットではなく知性体であることは既に一般知識の範疇だ。だが実際に精霊から声を掛けられた経験のある人間は少なく、いざそうなったら大抵は肝を潰す。
瞼リングのアジア系は何度も頷き、言われた通りにした。
再現トリッドをズームアウトし、建物を半透明に、裏の路地が見えるようにする。
裏口のロックが解除されるのとタイミングを合わせ、潜んでいた強盗五人が殺到してきた。五人のうち三人は大柄、もう二人はそれよりも大分小柄に見えた。小柄な二人は並んで行動しており、どうやら片方がふらついているのをもう片方が補助しているようだ。五人は全員覆面をして、民生用アーマージャケットとサブマシンガンで武装していた。
アジア系はドアを開けて逃げだそうとし、その五人と鉢合わせした。五人の先頭にいた大柄な一人が虫でも追い払うように軽い仕草でアジア系を殴り、裏路地の片隅に転がした。調書によれば彼はその一発で死亡したようだ。
アパートの上階ではＵＺＩの銃声を聞いた《サムスン＆エッグス》の幹部格がカメラで状況を把握し、精霊がいると分かって武器を準備していた。アサルトライフル一丁とショットガン二丁。ショットガンから散弾を抜き、炸裂スラッグ弾を装填するのに手間取った。
事件当夜、このアパートにいた《サムスン＆エッグス》の人間は計七人。アパートの表側にも警備の下っ端が二人と、三階のベントハウ

スに幹部格が三人いた。それと近隣を縄張りにするギャング《ブラック・ボーン》に金を払っており、警報に応じて駆けつけてくる約束をしていた。

強盗の五人は迷わず三階へ殺到した。大柄な三人のうち二人が前に、一人がしんがりに立ち、小柄な二人を守って行動していた。階段室から三階へ通じるドアは頑丈だったし施錠されていたが、強盗はマグロックパスキーでシステムを騙してこれを突破した。

《サムスン&エッグス》側は階段の上から彼らを迎え撃てれば良かったのだろうが、銃の準備にもたついたためベントハウスのリビングを挟んで撃ち合うことになった。幹部格三人は防弾加工されたドアのある寝室に立てこもって迎え撃ったようだ。強盗の銃はいずれもサブマシンガンだったから、アサルトライフルとショットガンを準備した《サムスン&エッグス》の方が装備は良かった。

しかし、彼らの背後に精霊が出現した。

記録の最初でもあった手管だ。アストラル体で潜り込んでから実体化する。魔法使いを相手に戦う時は精霊がいつどこで実体化するか分からないということを忘れるべきではないのだが、《サムスン&エッグス》の面々はそれができなかった。

彼らは精霊によって遮蔽から蹴り出され、浮き足だったところを強盗の一人、アジア系を殴り殺した大柄な男に撃たれた。強盗のリーダー格と思しきその男――小柄なトロール女性か細身のオーク女性かも知れないがひとまず男とする――は記録された限りでも異様に素早くて銃の扱いが上手いように見えた。サムライかも知れない。この時も二人は急所に当てて即死させ、一人は脚を撃って動きを封じるに留めている。強盗はこの生かしておいた《サムスン&エッグス》幹部を脅して金庫を開けさせ、クレッドスティックとブリス五〇〇グラムを奪った後、幹部を改めて撃ち殺して逃走した。

アパートの表側にいた警備二人は駆けつけるかどうしようか迷った挙げ句、あっという間に雇い主がやられてしまったので逃げ出してしまったようだ。

《ブラック・ボーン》のメンバーが重武装で駆けつけてきたのは、強

盗が引き上げてからおよそ三分後だった。
ナイト・エラントが調べたところによれば、《サムスン＆エッグス》はこれまでロシアン・マフィアの傘下で商売をしていたが、つい最近仕入れ値の折り合いがつかずに関係を絶ち、別の後ろ盾を探していたところだったという。つまり《サムスン＆エッグス》を潰しても報復に動く組織はない。むしろ揉めたロシアン・マフィアの方が襲撃を手引きした可能性さえある。また、ナイト・エラントもこの事件の捜査にはあまり力を入れていない。一般市民の犠牲者は出ていないし、ピューヤラップ地区でこの手の血生臭い抗争は日常茶飯事だからだ。

★

一応ホルへの《Ｔ＆Ｔ》社も調査に人手を割いてくれてはいるのだが、アルバイトの調査員が洗ったサラ嬢の学校生活については通り一遍でしかなく、選択科目や評価が分かってもあまり参考にはならなかった。目についたのは近代史のプレゼンが高評価だったことくらいだが、プレゼンの内容までは入手できなかったようだ。また若い女性調査員がサラ嬢の親しい友人に聞き取り調査を行っており、その対象には両親との面談で名前が出たマリア・タナーも含まれていたが、やはりめぼしい話は出てこなかった。特に親しい友人であったと言うし、サラ嬢のボーイフレンドがギャングだという話も彼女から出ていたからもう少し何か知らないかと期待していたのだが……
ホリィと夕食を摂るにあたっては、ちょっと段取りを凝らして記録に残らないよう人目につかないよう工夫をした。テオドールが使い捨てのアドレスから送った意味ありげな入店手順は彼女の興味をより一層惹きつけたようだったが、それらは別に演出でもなんでもなく必要な手筈だった。これまでの成り行きを鑑みるに、テオドールが彼女とつるんでいるところを誰かに見咎められると危険なことになる恐れがあった。
行きつけの店に時間を三十分ほどずらして入店し、予約したブース席で落ち合った。《ホールＡ》のバーテンダーはテオドールと顔なじみであり、裏口から未成年の客を迎え入れるくらいの融通は利かせてくれた。

テオドールが十八時過ぎにステラと二人で《ホールＡ》へ入店すると、ホリィはボーイフレンドと一緒に待っていた。下顎から覗くキュートな牙に金メッキのグリルが光っていて、黒基調のストリートファッションで変に気合が入っているのが見て取れた。

「今日はあのカタナのヨージンボーはいないの？」

とファーストを気にしており、いないと答えると残念そうにしていた。ボーイフレンドは早く終わらせて欲しそうに気怠くビールを呑んでいた。テオドールとステラが着席して間もなく揚げ物とサラダのざっくばらんな夕食が運ばれて来て、ウェイターは多めのチップを受け取ったらもうブースには近寄らなくなる。他の席からの視界や音もしっかり遮られる場所だ。

「シャーマニズムのクラブ活動に興味があったみたい。科目も本当はもっとそっち系を取ろうとしてたんだけど、後から取りやめたって。パパに反対されたんだってさ」

フィッシュ＆チップスを摘まみながらホリィが話してくれた内容は、《Ｔ＆Ｔ》のアルバイト調査員よりはずっと上等なものだった。一体学生の生活というのは外から隔絶されているところがあって、接点のない人間からすると摩訶不思議な価値観で成り立っているものだから内側から話を聞き出してくれる伝手の存在は非常に有り難い。だが彼女らの情報網は狭くて有効期間が短く、それにテオドールのような人種との関わりは甚だ悪影響になるので付き合いを維持するべきでもなかった。こういう案件での伝手の確保はいつも悩ましい問題だ。

ホリィの話によれば、サラ嬢はテオドール達が当初思っていたよりも熱心にアメリカ先住民の文化、とりわけシャーマニズムに関心を持っていたようだ。そして家族の口から聞くよりもずっと露骨に摩擦が生じていた。エファーソン夫妻の信仰に対する忠誠は子供から玩具や映像作品を取り上げるほどではなかったようだが、費用を支払って子供にシャーマニズムを学ばせるほど寛容ではなかった。それだけに表面化しづらく、そして夫妻の自覚も乏しかった。

ただ、サラ嬢は以前からそういった分野に関心を持っていたわけで

もないようだ。友人の話では、精々ここ半年ほどのことだという。子供の気まぐれにしては熱心に調べ物をしていたという証言が文化人類学の教師から得られている。そして学校で学習する機会を逸した彼女は、マトリックスや学校外に手を伸ばしたであろうことは想像に難くない。

取り留めなく右往左往するホリィの話の中から要点を掻い摘まむと、そんなところだった。

「ミス・サラは何故シャーマニズムに興味を持ち始めたか、っていうのは分かる？」

「さあ？　でも、けっこうそんなもんじゃない。何かの切っ掛けでいきなり目覚めちゃったり」

「なるほどね……」

テオドールは曖昧な風に相づちを打ったが、実際のところ、その通りではあった。

「ミス・サラがそういうことを相談してそうな子って言ったら誰かな」

「マリア・タナーって言う子と仲が良かったみたい。住所要る？」

「ああいや、その子なら知ってる」

「もう聞いたんだ」

「他の人がね」

「んで、んで？　何か言ってた？」

「大したことは」

「それさ、絶対何か隠してるよ。もうちょっとちゃんと調べてみた方がいいんじゃない、そいつのこと」

「まあ、そうだね」

「そんでさ、グレイ」

「うん？」

「情報量。これ、幾らぐらいになる？」

ホリィの稚気めいたおねだりに、百新円の支払い保証済みクレッドスティックで応じる。

「ありがとう。いい情報だったよ」

「へへ。どう？　私、探偵になれる？」

「探偵なんかよりもっと面白いことといっぱいあるよ。これっきりにしておくのがいい」
「えぇ、なんで？　役に立ったじゃん」
「ファーストがなんで居ないかって話してなかったっけ。昨日の夜、銃で撃たれたんだ。まだ意識が戻ってない」
傷一つなく返り討ちにして、今はホテルで仮眠を取っているところだと言う必要はない。
絶句するホリィを置いてテオドールとステラは席を立った。
シャーマニズム。自然崇拝。テオドールも全く知らないというわけではない。
史上最初に記録された大規模な魔法〈大いなる交霊の舞い〉についての史実は学校で嫌というほど学んだし、学術番組やバラエティ番組、そして《サムライ・ストライダー》を初め各種娯楽作品にシャーマンが出てきて魔法を披露することはままある。なんなら自分の目で彼らの魔法と接したこともある。つい数時間前にだって危うくそうなるところだった。だが彼らの価値観、認識、世界を見る視点について理解しているかと言えば甚だ怪しい。魔法という実利的な力は顕れ方の一側面に過ぎず、本来は人間が生きる上でもっと根本的で卑近な、空気のようなもののはずだ。
シャーマニズムに従う人々は大地そのものを崇め、あるがままの感受性を尊び、大いなる自然への一体化を指向している（というのがテオドールの解釈だが、サーリッシュ・シー出身の人に披露すれば恐らく鼻で笑われるだろう）。クリスチャン的な価値観に内在する無自覚な傲慢を指弾し、人間が自然界に対し特権的な支配者であるという保証はどこにもないと、それを保証する神はまやかしに過ぎないと、暗にそう説いている。ＵＣＡＳの国民感情と先住民部族連盟の溝が半世紀経っても埋まりきらないのは戦争被害によるものばかりでなく、価値観の断絶も要因の一つだろう。皮肉なことには《覚醒》と先住民部族連盟の台頭によって前世界末期に漫然と広まっていた無神論的風潮が却って一掃され、シャーマニズムに対するアンチテーゼとしてのクリスチャニズムが鮮明化したという。

そういった土台があるので、エファーソン夫妻がシャーマニズムに関心を寄せた娘のことをごく当然のように恥じ、積極的に話したがらなかったのも無理はないのかも知れない。彼らからすれば「娘がサバトの乱交儀式に参加している」と告白するようなものだったのだろうから。

「ボスはさー。魔法って使えたら欲しい？」

ファーストをホテルまで迎えに行く車内でステラがそんな話題を振ってくる。

「昔は欲しかったけど、今はそんなでもないかな。才能もないみたいだし」

ありきたりな答えだなと、テオドールは自分の口から出た文句を他人事のように分析した。魔法が社会通念上でより重要な位置を占める地域はどうか知らないが、ＵＣＡＳに暮らす良い年をした大人なら大抵はそんな風に思って生きてきただろう。漠然とした憧れと隔意。魔法の素質がある人間は統計上およそ百人に一人。素質を見出されて適切な訓練を受ける機会に恵まれるのはそのうちの更に何割か。大抵の人間にとってみれば、自分には無関係な世界の話でしかない。

とはいえ、一万人いれば百人、百万人いれば一万人は魔法の素質がある計算だ。このシアトルの魔法人口がどれくらいかは諸説あるが、地勢上、一般的な割合よりもずっと多くの覚醒者がひしめいている可能性は高い。

テオドールは自分がその一人ではないかと強く夢想したことがある。実際に適正検査を受けてみたこともあった。結果は陰性。様式を変えて五回やってみたが全て同じ結果が出た。その後、魔法の実情をそれなりに調べて諦めをつけた。

「どんな凄い魔法使いだって、なんでもかんでもできるってわけじゃないみたいだし……それに使えたら使えたで大変そうだしね。シルバやファーストを見てると」

「あぁ、修行と勉強大変そうだもんねー。修行は面白そうだけど、勉強はやだなあ」

「ステラは魔法欲しい？」

「欲しいなあ。精霊とか怪我を治す呪文とか、あと、バシーッてやっつける呪文とかさ」
「……精霊と怪我の手当はともかく、武器に使うなら銃でいいんじゃ？」
「えー、カッコいいじゃん」
「みんな一発撃つたびに凄く疲れてて大変そうだよ」
「あー、そんなにきついのかな、アレ」
「らしいよ」
「《サムライ・ストライダー》でさ、呪文のドレインで顔中から血がドバッて爆発してたことあったけど、マジでああなるもんかな。シルバはそこまでにはなんなかったよね」
「なったことはないけど、力の入れかた次第ではなるかも知れないって」
「聞いたことあるんだ？」
「そりゃね。呪文をお願いしたせいで倒れられたら大変だし」
「そっかー。でもさー、やっぱ欲しいな。カッコいいじゃん。それに顔がドバってなるくらい力込めたらさ、銃より凄い威力が出るんじゃん？　防護服着たサムライ・トロールでも一発で吹っ飛ばすみたいな」
「魔法がどうこう言うより、そんなのと戦うような成り行きになった時点でどうかなって思うけど……」
「なんだよ。ボスは夢がないなあ」
「夢ってそんなんでいいの？」
「手からビーム出したいっていうのは夢じゃん？　やっぱ。魔法じゃなくてもキとかカラテでもいいけど」
「それも魔法でしょ、結局。アデプトの」
「そっか。そう言えば、ファーストはどうなのかなー」
「呪文は全然だって言ってたよ」
「知ってるけどさ。そうじゃなくて、キのビーム使いたいって思ったことあるかな」
「聞いてみたら？」

「やだよ。怒るかも知れないじゃん。ファーストって冗談通じないし。――どっちだと思う？　最初から使うつもりなくって練習してないのか、使いたかったけど駄目だったか。案外、使ってみたかったけど駄目だった方かも。ニップの男って子供の頃に絶対やってみるんだってさ。ほら、アレの」

ステラが助手席で体を捩り、開いた両手を腰だめに、真面目腐った顔で古い古いカートゥーンの真似をして見せる。陰気な目つきのファーストが柔道着姿でそれをやっているところを想像してしまい、テオドールは不覚にも吹きだしてしまった。

「っくく……ファーストには言わない方がいいよそれ、マジで」

「言わないって」

「まあ、そうだね。……あるなら使いたい魔法っていうのはあるけどね」

「どんな？」

「んー……恥ずかしいから言わない」

それにテオドールが使いたい魔法は、どんなに強力な魔法使いでも、大いなるドラゴンでも使えない、絶対に実在しえないものだ。

それくらいは調べたので、知っている。

ディア・マイ・サムライ【後　1】

★

タコマ区でダリオ少年と思しき死体が発見されたという情報がボディショップの新着から引っかかった。検死によればダリオ少年は物凄い力で顔を殴り潰され、脳挫傷を起こしていた。凶器はサイバーアームの拳と断定された。《シャドウ・ハウンズ》からテオドールに対する接触は何もなかった。ダウンタウンに籠もっていればともかく、タコマ区に顔を出せばただでは済まないだろうということは簡単に想像できた。

時間がないという漠然とした予感はあった。

もしこのまま調べ続けて埒があかないようなら、別の手を打つ必要があるだろう。例えば手持ちの金をありったけ費やしてサムライを何人か雇い、力技に訴えるとか。

ただ無理矢理にサラ嬢を連れ出せば《シャドウ・ハウンズ》やその背後にいるレックス、延いてはレックスが取り入っている鉄心会と揉める可能性は高く、更にはレックスの背後にいる何者かもなんらかの介入をしてくるのは疑いない。サラ嬢は既にただの家出娘ではなく、彼らの大事な商品になっているのだ。表だって妨害したら確実に恨みを買うだろうし、サラ嬢の将来に禍根を残しかねない。それに力尽くの手段ではサラ嬢本人から抵抗されてしまうことも考えられる。そうなったらこちらの側が彼女を傷つけてしまうだろう。

どうにかして良い手を模索したいところだった。

ちょっとした当てがあって、テオドールは翌日の夜からマリア・タナーの自宅を張り込むことにした。

デッカーのアルフレッドにお願いして通信記録を漁って貰うが、これは念のためで恐らく成果は出ないだろうとは思っていたし、実際その通りだった。だが仲の良いデッカーに楽で実入りの良い仕事を頼むのは悪いことではないだろう。

見込みがあるとすれば引き続き付き合ってくれているシルバだ。

魔法使いは生涯の多くの部分を魔法に捧げる。それは精神の指向

性さえもだ。自分が根ざした文化、自分の信念、もしくは自分が従う価値観に基づいた欲望の中で、より良く魔法を使うために全力で邁進する。テクノロジーを使った方が手っ取り早そうな部分においてさえ努力の結晶である魔法を頼まずにはいられない。ファーストがカタナとシュリケンで銃に立ち向かうように。そして多くの魔法使いが、その方がずっと優れているという妄執に囚われてしまう。ただ困ったことに、その妄執が正しかったというケースもしばしばあるのだが……

シルバはテオドールの求めに応じて《ウォッチャー》と呼ばれる矮小な精霊を呼び出してくれた。その通称通り、見張り番によく使われる存在だ。やはりアストラル体なので物理的に見つけ出すことは不可能であり、アストラルパトロールが巡回していない地域なら張り込みでは無敵の存在と言える。ドローンのカメラと違って浮気現場の証拠を押さえることはできないが、今回はその必要もない。シルバはテオドール達に向けて《ウォッチャー》を顕現させ、その姿を見せてくれた。シルバが呼んだ《ウォッチャー》は蜂鳥に似た鳥の姿をしており、忙しない羽ばたきがエメラルド色の光を水飛沫のように散らしていた。

三体の《ウォッチャー》に張り込みを任せ、テオドール達はフォードに詰めてタナー氏宅の近くに待機していることにする。

これで駄目なら力尽くの方も考えにいれなければいけない。シルバの魔法とファーストのカタナがあればかなり静かに押し込み強盗ができる。デッカーを雇って《シャドウ・ハウンズ》のセキュリティを誤魔化し、姿を消して潜入し、見つかったらファーストに始末して貰い、後詰めと退路の確保は――

「マジカルアクティブ。アストラル体がひとつ、家の中に入っていった……周りに他のマジカルアクティブはない。えっと、どうしよう、グレイ？」

午前一時半。物騒な次善策を模索していたテオドールの耳に福音が差した。

福音を伝えてくれたのは、まさしく天使のようなシルバの声だっ

た。
　テオドールは笑みと歓声を噛み殺し、仮眠中のステラを揺り起こす。
「打ち合わせ通りに」
　そうお願いするとシルバの唇がスペレシエルの旋律を奏でた。それに応えて後部座席に銀色のオーラが渦巻き、闊達な少女の姿をした風の精霊が実体化する。幻想的な光景だったが魅入っている暇はなく、まして後部座席がシルバとファーストと風の精霊の三人でぎゅうぎゅう詰めで精霊がちょっと苦しそうなことを心配する余裕もなかった。急いで車をタナー氏宅の近くにつけると、テオドールはステラと一緒に風の精霊を連れて車を飛び出し、取り急ぎ彼女の助力を受け取った。
「どう、消えた？」
「大丈夫だ。見えなくなった」
　ファーストが頷く。精霊が持つ隠蔽の力はテオドールとステラの姿を消してくれているはずだったが、力の庇護下にある人間同士は姿が見えるので本当に姿が消えているのか今一つ実感できない。何度も世話になっている力ではあるが未だに拭えない心細さを押し殺しつつ、テオドールとステラ、風の精霊の三人連れでタナー氏の玄関先へ忍び寄る。タナー氏宅は防犯カメラが完備されている。夜間に不審者が忍び寄れば自動で警報が鳴るだろう――無反応。冷や汗を拭い、鍵穴にマグロックパスキーを差し入れる。マグロックの照会を騙して解錠する違法なツールだ。セキュリティが上等な場合は騙されてくれずにやはり警報が鳴る。差し込む瞬間はいつも心臓が凍り付くようだ。グリーンランプが明滅し、解錠の手応えがあった。そっとドアを開け、家人の気配がしないことを確かめる。
　タナー氏の家の間取りは確認してある。足音を殺して二階にあるマリアの部屋へ近づきながら、シルバへ「いいよ、来て」と囁きかける。シルバが返事をし、通話が切れる。ステラがナイフを取り出し、マリアの部屋の鍵を静かにこじ開ける。
　ドアを開き、押し入った。

その瞬間、暗い部屋の中でこの世の物ではない争いが勃発した。
小綺麗なマリア・タナーの部屋の中央で青い魔法のオーラが攻撃的に燃えており、そのオーラはしなやかな裸の女の姿をしていた。ただ、女の頭は狼と人間をまぜこぜにしたような奇怪な輪郭を描き、肌は毛皮で覆われていた。部屋の隅のベッドではマリア・タナーがパジャマ姿で竦み上がり、怯え固まった表情で狼女のオーラを見つめていた。狼女は何もない空中に向けて激しく唸り、腕を振るい、殴りつけていたが、それはテオドールには見えない何者かと争っているためだった。もっと言えば、その見えない何者かが誰であるかをテオドールは知っていた。と、テオドールの背後に付き添ってくれていた風の精霊が虚空に溶け消えた。テオドールはそっとドアを締め、鍵をかけ直した。
争いは激烈で素早く、そして静かだった。エネルギーの鬩ぎ合いは物理空間ではない場所で行われたために実体を伴わず、大気を振動させることがなかった。ただ間近にいるテオドール達には、生物がそれぞれに備えたオーラめがけて伝わってくる震えとして争いの気配を感じ取ることができた。
恐らく、ほんの五秒かそこらだったはずだ。狼女が忌々しげに唸って体を硬直させ、力んで反り返ったような姿勢で動きを止めた。見えない何かがその体を拘束しているようだった。そしてさっき姿を消した風の精霊が、狼女に絡みつくような格好で再び姿を見せた。風の精霊の体は顔以外が不定形のうねりに変わっていて、狼女の全身をすっぽりと包み込み、雁字搦めにしてしまっているようだった。
絡み合って奇怪な芸術作品のようになった二体のオーラの傍らに、銀色の法衣を纏った美しい少女が顕現し、くたびれた様子でため息をついた。
「どうか落ち着いて、暴れないで。危害は加えないから。私達は貴方の助けになりたいの。話を聞いてくれるなら、その子に手を離すよう言うから――ね？」
銀色の少女の美しい声は彼女の肉体が持つそれとは大分印象が異なっていたし、彼女が肉体を通して話す時よりもずっと美麗で静かな

威厳を湛えていた。銀色の少女がじっと静かに狼女の目を覗き込み、狼女も銀色の少女を見つめ返した。二つのアストラル体は言葉面で交わす会話よりもずっと多くの情報をやりとりしたはずだ。お互いが目にしているのは剥き出しの精神なのだから。そうして暫くの空白が過ぎり、やがて狼女がゆっくりと頷き、体から力を抜いた。風の精霊が体を綻ばせて彼女を解放した。

「――ぁ……サラ、大丈夫なの……ケガとかしてない？」

事態についていけずに固まっていたマリアだったが、やっとのことで発したのは友人を気遣う声だった。彼女ははっきりと狼女に視線を向けてサラと呼んだ。狼女は頷いて「うん、平気。心配ないよマリア」と少女の声音で答えた。つまり狼女の姿をしたこのアストラル体は、間違いなくサラ・エファーソン嬢だ。

狼女は蓮っ葉な仕草で肩を竦め、じろりと銀色の少女と精霊を睨んだ。話を聞く構えではあるが、戦って取り押さえられてしまったことにはプライドを傷つけられ、面白くないという様子だ。

「で、なんなのあんた？　それに、そっちの……」

狼女がテオドールを振り向く。テオドールは堂々と会釈を返す。

「ヒッ――」

と尻切れ蜻蛉の掠れ声がした。見ればマリアがテオドールを見て悲鳴を挙げかけたところを、ステラがそっと口を塞いでいるところだった。そう言えば風の精霊が戦いに参加したので隠蔽の力も解除されている。ステラがおどけた調子で唇に指を当て、にんまりとマリアに微笑んだ。

銀色の少女、つまりシルバのアストラル体が優美な仕草でテオドールを示した。

「サラさん。この人は私の友達で、グレイとステラ。みんな貴方を助けるために来たの。ああ、マリアさん。勝手に入ってしまったのはごめんなさい。だけど、今は普通じゃないことになっているから――どうか許してちょうだい」

マリアが強ばった顔で頷く。ステラがマリアの口から手をどけて両手を挙げる。ナイフは勿論フライトジャケットの中にしまい込ん

でいる。
「そうそう、何もしない。サラちゃんが嫌がることはしないし、マリアちゃんにだって何もしない。ただ、きっと助けになると思うよ、あたし達。あたしとグレイは探偵なんだ。サラちゃん、あんたを探すように家の人に頼まれて来た。あ、でも、だからって無理矢理連れ戻す気はないよ。きちんと説得して、サラちゃんが自分で帰ってくるようにしたいと思ってる」
「探偵？」
サラはステラを気味悪げに見つめ、疑いを露わにする。
「あんたが探偵？」
「正確に言うと、探偵なのはそこのグレイ。あたしは助手さ」
「助手、ね……」
「まあまあ、まずはお話しよう。ただし、マリアちゃんのパパとママに見つかったら怒られちゃうから、静かにね――」
サラ・エファーソンは《覚醒》していた。
去年の夏、自然公園へキャンプに行った時、自分にしか見えない狼が現れたのだという。特に劇的な事件があったわけでも、他の魔法使いから教えを受けたわけでもなく。そういう唐突で前触れのない《覚醒》というのは、実のところ珍しくない。
サラ嬢は家族にそのことを秘密にしていた。打ち明けたのはマリア・タナーただ一人だけだった。サラの忠実な親友である彼女はそのことを誰にも話さず、彼女が家出して警察や探偵社が話を聞きに来た時も黙っていた。
話を聞いたところ、サラの魔法は正式な訓練を受けていないとは思えないほど上達していた。少なくとも精霊を呼んで助力を受けることはできたし、アストラル投射を立派に使いこなしている。たまに狼が現れて魔法の使い方を教えてくれるのだという。「狼の導師精霊に目をかけて頂いてるみたいね」とシルバが頷く。精霊が人間の元にふらりと現れて覚醒を促すというのはよく知られている現象だ。魔法の素質があるから精霊が訪れるのか、精霊が訪れたことで素質が芽生えるのかは分かっていない。初めは誰にも相談できないまま怯え戸

惑っていたサラであったが、やがて自分が目覚めた不思議な力のルーツについて、先住民のシャーマニズムに根差したものではないかと彼女なりに解釈した。そうしてシャーマンの文化を調べ始め、知識を蓄えたり自分なりに考察したりしていたところ、不安が消え、魔法の力も目に見えて安定したという。

今こうしてマリアの元を訪ねているのもまた、魔法の力によるものだ。

精神を肉体から離脱させ、《アストラル界》に入り込むこの技を《アストラル投射》という。

アストラル界とは普段人間が知覚する物質界に重なり合って存在する異次元であり、そこでは生命のオーラが光となって輝き、思念が色彩となって揺らめき、人工物は冷たい影に過ぎない。多くの人間はアストラル界そのものを見たことはないが、CG再現された映像を見たことはあるはずだ。言うなれば精神世界とでも言うべきもので、アストラル体は実体化しない限りこの神秘的な異次元に存在しているために通常の物質とは触れ合わない。

つまり、ここにいるのはサラの精神だけが形になったものだ。彼女の肉体はどこかで――恐らくはボーイフレンドと暮らすタコマ区のアパートで――眠りについているだろう。

アストラル体は魔法使いが強く望む自分自身の姿を象る。狼女の姿は彼女がイメージする強い自分であり、それは剥き出しの精神を外敵から守るための自然な働きでもある。

サラはこのアストラル投射を使って、家出した後もマリアの元を密かに訪れていた。

アストラル投射は魔法使いにとって非常に重大な意義を持つ技なのだが、下世話なことを言ってしまうと、こういう密会や不法侵入にはこれ以上ないほどうってつけの技でもある。見えない上に触れないし、精神の速度で動くために滅法素早い。地球を一時間程度で一周できるというのだから、生身の人間にはどうすることもできない。

「探偵さんはどうして私がここに来るって分かったの？　マリアが話したわけじゃないでしょ」

「話してなさ過ぎたから。マリアさんがサラさんの一番の友人だっていう話はご両親からも学校からも聞いていた。けどそれならサラさんのことを心配して、警察や探偵社にもうちょっと話すんじゃないかって思ったからさ。だからマリアさんは、ひょっとしたらサラさんと連絡が取れてるのかも知れないと想像した。ついでに言えばサラさんは電話を掛けづらい状況だろうから、魔法を使って連絡を取っているんじゃないかなと」

サラが肩を竦め、マリアはおずおずと頷いて、それぞれに肯定を示した。

マリア・タナーは赤い癖毛が印象的な、ぽっちゃりとした白人ヒューマンだった。あまり活動的なようには見えず、写真で見たサラ、今この場にいる狼女のサラのいずれとも正反対の雰囲気だったが、視線を交わす二人の間からは確かな信頼関係が窺えた。正反対だからこそ一度仲良くなってしまえば緊密になるのかも知れない。

「……ちょっと待ってよ。ソレ、あてずっぽうだったってこと？」

「魔法関係のことはあてずっぽうなくらいで丁度いいことが多いんだ。実際、当たったでしょ」

「……私が魔法を使えるっていうのはなんで知ってるの？」

「うん。まあ、順番に話そうか……そうだサラ。アストラル投射していられる時間に限界があるのは知ってる？」

「知ってる。狼が教えてくれた。まだ全然平気だし、体の場所も覚えてる」

「ならいいんだ。もし限界が近づいたり、体に何かあったりしたら、すぐ戻ってくれていい。さて、とにかく順番に話そう」

アンティークショップ《ＴＲＵＨＯ》の店主・ホースは魔法使いに冠する情報を売っていた。

何者かの指図でそれをしていたようだ。

相手の詳しい素性をホースは知らなかった。マトリックス上で知り合い、遠く離れた場所――東海岸とかソルトレークとか――を待ち合わせ場所にしてアストラル投射で面談をした。

魔法使いは訓練すれば人間のオーラを読み取ることができる。

オーラを読むことによって人間の健康状態やおおよその思考、整形手術前の人種などを分析することができるが、相手が魔法使いであるかそうでないかということは比較的容易に分かる。

そして後ろ暗い仕事に従事している魔法使いは、往々にしてもっと詳細にオーラを分析し、相手のプロフィールを言い当てる。例えば目の前の彼に魔法の素質があるとして、彼は自分の素質に気付いているのか、いないのか。正規の訓練を受けているか、野良覚醒者か。現状に満足しているか、それとも現状に不満を抱き、もっと刺激的な世界を指向してはいないか……「持ち物や受け答えと合わせてオーラを見れば、その程度のことは分かる」とホースは豪語していた。彼は言わなかったが、相手の精神に働きかける呪文も使ったことだろう。

目当ては魔法の素質を持ち、かつ、そのことに気付いていないか、もしくは教育を受ける機会に恵まれずに腐っているような人間だ。

確率で言えば百人に一人。条件に沿う人間となればもっと少ない。気が遠くなる話ではあるが、辛抱強く続けていれば何人かは見つけることが出来るだろう。ホースは六人引っかけたと言っていた。この点で彼は相当に優秀な結果を残していると言える。勿論、ホースに仕事を持ちかけた誰かはホース以外にも同じようなことを依頼していただろうが。

そしてホースは目星をつけた人間にタグを与えていた。

タグは依頼者から渡された呪文式を使ってホースが作成した呪物だ。外見はアクセサリや護符、場合によっては相手に気付かれないよう衣類に忍ばせるための小さな破片であったりと様々だった。対象にそれらの品物を気に入らせる手管は、やはり大抵の場合は呪文を使ったのだろうが、なんらかの示唆を与えて暗黙の合意を得ることもあったかも知れない。例えば刺激を求める向こう見ずな子供は、魔術結社の勧誘を仄めかせば涎を垂らして飛びつくだろう。

サラ嬢の場合はどうだったかと聞いてみれば、単に「安くて良いものだったから」だった。元々シャーマニズムに傾倒していた彼女にとって、本格的なシャーマニック様式の呪物をお小遣いの予算内で手に入れられるのは魅力的だったようだ。

シルバが推測したところでは、恐らくホースが作らされた呪物はなんらかの探知呪文、或いは特定の人間によるアストラル追跡によって捕捉できるような呪文式が組み込まれている。そうすることでホースと全く連絡を取らずにいても、彼が目星をつけた魔法使い候補を見つけ出すことができる。

ホースはタグをつけた後のことは関知しない。ホースが上手くやれば依頼者はそれを漏らさず評価し、報酬を出す。受け渡しは古めかしいデッドドロップ方式であり、依頼者はホースの元へ精霊を送り込んで指示を出し、特定の時間特定の場所でオリハルコンや覚醒ドラッグなど、少量で隠し持ちやすく金になる品を渡す。ホースはそうやって手に入れた報酬をほんの少しずつ目立たないように捌いて金にしていた。報酬を受け取る機会は年に一度あるかないか。回数の少なさと用心深さが迂遠な取引を内密のものにしていた。

「……それで？」

サラが平坦な声で続きを促す。

「さっきも言った通り、ホースはここから先のことは関わっていなかったし、確証もない話なんだけど――」

「前置きはいいから。で？」

「《シャドウ・ハウンズ》の元締め、リーダーのオブシーダに指示を出してるタイラーっていう男は、シャドウランナーのスカウト・育成みたいな真似をしてた。サラも知ってるだろうけど、魔法使いっていうのはシャドウランに物凄く役立つ。同じ魔法使いじゃないと対抗できないからね。だから才能がある若い魔法使いをなんとかスカウトして影の道に引っ張り込むような真似だってするんじゃないかと思う。魅力的な異性とか、使えるものはなんでも使って」

「つまり？」

「君のボーイフレンドは、君の才能目当てで差し向けられた」

「……」

「それと――ああ、マリア。悪いんだけど、少しの間、耳を塞いで貰っていいかな」

テオドールはマリアの方を振り向いてそう頼みかけたが、サラは頷

いて「必要ない。マリアに隠してることはないから」と制止した。マリアもカクカクと頷き返してくる。
「分かった。前置きするけど、これは脅しとかのつもりじゃないし、誰に言うつもりもない。サラ。君はボーイフレンドのお誘いでシャドウランに手を出さなかった？　ピューヤラップ地区で麻薬ディーラーを襲ったやつだ」
「――うん。やった。ビックリした。もうそんなことまで調べたの」
「トモダチにここ最近で《シャドウ・ハウンズ》が噛んでそうなシャドウランを洗って貰った。その中で魔法が使われたやつがあるって聞いて、ソレをもっと詳しく調べてみた。現場の監視カメラに狼の精霊が映ってたよ。シャドウランに手を貸す魔法使いっていうのは割といるけど、《シャドウ・ハウンズ》に魔法使いがいるなら噂くらいにはなってるだろうし、外注にしても魔法使いより先にデッカーを雇った方が良さそうな段取りだった。それで《ハウンズ》に新入りの魔法使いがいるんじゃないかっていうのが分かった。それと同時期に君の夜遊びが始まって、それでこの家出騒ぎでしょ。タイミングが良いなあと思って。……今までにも何回か、あいつらの仕事を手伝ってたんじゃない？　理解がない家族のところにいるより、影の世界の方が自由に魔法を磨ける、って誘われて」
「言われた。……言われたよ」
「また当て推量で申し訳ないんだけど……家出したのも、彼氏から『本格的にシャドウランナーにならないか』って誘われたから、とか？」
「ホント、あてずっぽうが上手いんだね、あんた。そうだよ。フィルに誘われた。このクソみたいな街を出て、もっとでかいことやって暮らそうって。一緒に行こうって……」
「サラ。君の意志を確かめたい。今の話を聞いた上で、彼と一緒に行ってシャドウランナーをやるか。一旦家に戻って別のやり方を探してみるか」
「……あんたの仕事は私を家に帰らせることだもんね」
「仕事上っていうばかりじゃなく、ね。君よりちょっとばかり長く世間を見てきた人間としては、やっぱりいったん考え直すのをオススメ

するよ。だって君が望めば教育を受けるのは難しくないんだ。君の援助をしたいっていう人間は、然るべき方法で探せば幾らでも見つかる。君は才能ある魔法使いなんだから。裏街道へ進む前に、試せることが色々ある。それをやらないで決めてしまうのは損失だよ。……まあ、ご両親とぶつかることになるのは気詰まりかも知れないけれど――相談相手くらいはなってあげられる。どう？」

「街を出る前に、最後の一稼ぎをするって話になってる」

サラの言う『一稼ぎ』は明日の夜に計画されていた。

サラはこの街で最後に大きな仕事を一つ片付けてから、フィル少年と東海岸へ旅に出る予定になっていた。つまり出荷だ。テオドールが思うに、その『一稼ぎ』の仕事は彼女には内緒でちょっとばかり派手に暴れる段取りが組まれており、警察や大きなギャングに彼女の噂が知られるように仕向け、その結果として彼女がシアトルの親元へ戻れないよう退路を断ってしまう算段ではないだろうか。

サラが東海岸へ旅立った先でどうなる予定なのかは分からないが、この幼くて才能のあるシャーマンは決して無碍には扱われないだろう。例の迂遠な黒幕のことだから、サラが都合の良い魔法使いに育つよう、色々とストーリーを用意しているはずだ。そして刺激的なシャドウランナーの世界で成功を掴めるようにお膳立てをして貰えるはずだ。

だが、サラはそのストーリーに対して背を向けることに決めた。

「後腐れのないシチュエーションで、サラをランナーに引き込む算段をおじゃんにしないといけないね。我々もなるべく恨みを買わないようにして」

「そりゃそうだけどさ、ボス。実際どうする？」

「なんとか考えてみる。ああ、サラ。確認したいんだけど、《シャドウ・ハウンズ》に他の魔法使いはいないと思っていい？　作戦を立てたらシルバから伝えて貰うけど、もし魔法使いの見張りがあるようなら考えないといけない」

「いない、と思う。私が知ってる範囲では」

「ＯＫ。ありがとう、良い知らせだ」
次いでサラが使える魔法も聞きだしておく。渋られるかと思ったが彼女は素直に答えてくれた。自分の魔法を秘密にしておくという所作は彼女にはまだ身についていないようだ。
彼女が使える魔法は「精霊の召喚」と「魔法の力を弾丸にして飛ばす呪文」、それにアストラル投射を加えた三つだけだった。精霊の召喚は狼の精霊は得意――彼女を導く狼の精霊が同族を仲介してくれるらしい――だが、風や土や水といったそれ以外の精霊はあまり自信がない。弾丸の呪文は「動かない的を相手に練習していたが人間に撃ったことはなく、威力もよく分からない。コーラの缶に当てたら粉々になった」とのことだ。精霊の指導があったとはいえ、セルフトレーニングで実践に足る力を身につけているのは大したものだった。
「ただどのみち、サラの魔法に頼るつもりはあんまりない。サラが睨まれるようじゃあ不味いからね。こっちは君を無事に連れ戻すのがこっちの仕事なんだし、危ないことはさせられない。だから、まあ、自分の身を守る程度のつもりでいて欲しい」
「分かったよ」
「『最後の一稼ぎ』についてはどんな仕事かは聞いてない？」
「うん。ちゃんとしたことは教えてくれない。シャドウランはギリギリまでヒミツにするもんだって、フィルが」
「そりゃごもっとも。……とにかく、サラ。君をできるだけ後腐れのない形で《ハウンズ》から連れ出そうと思う。君のボーイフレンドとは多分お別れになる」
「分かってる。……ありがとう。お願い」
「色々考えてはみるけど、多分、荒っぽいことになる。何度も言うようだけど、魔法は自分の身を守ることに使って」
「うん」
「《ハウンズ》の後ろに魔法使いがいるのは間違いない。表だって動かないとは思うけど、サラのことを怪しんだら人や精霊を差し向けてくるかも知れない。アストラル投射が絶対にバレないとは限らないから気をつけて」

「うん」
　テオドールは再び隠蔽の力を借りてタナー家を辞すと、街頭カメラの死角になっている地点で合流、隠蔽を解いて貰ってファーストが運転してきたフォードの後部座席に駆け込んだ。
　端に座ったシルバの隣にテオドール、ステラ、そして風の精霊と飛び乗る。風の精霊は座るスペースがないのでテオドールの膝にダイブしてきて、実体化した彼女の意外としっかりした質量感が腹を圧迫した。「ぐぇ」とおかしな声が出る。ファーストはこちらのドタバタに頓着せずにさっさと車を発進させる。
　シルバは既に体に戻っており、寝転がった精霊の髪を撫でて働きを労っていた。風の精霊の美しい髪は重力を無視してそよいでおり、衣服越しに涼感を伴って肌をくすぐった。繊維というよりは空気の流動を物質化したような、不思議な存在感だ。
「グレイ。この子、もう帰していい？」とシルバが聞くので頷くと、シルバはスペレシエルで精霊に囁きかけた。スペレシエルは得意でないテオドールだが古風な言い回しの謝辞だというくらいは分かった。精霊の少女は微笑みを残して唐突に消え失せ、腹の上に載った重みもなくなった。
　一息つき、三人に向けて口を開く。
「《ハウンズ》が計画しているランを探り当てよう。内容次第だけど、ランの失敗に見せかけてどさくさ紛れにサラを連れ出せるかも知れない」
「斬り込んだ方が手早いのではないか」
　ファーストが異を唱える。テオドール自身も悠長な考えだとは思う。
「派手にやるとサラが危険だ。それに、彼女はもう何度かシャドウランに加担してる。真っ正直に連れ出したら、そのことを警察や学校に密告すると脅してくる」
「あの娘自身がやったことだ」
「だとしても、だよ。その対応も仕事のうちだ。それに、こっちに降り掛かる恨みだって少ない方がいい。でしょ？」

「……うむ」
ファーストが頷く。この男は一度頷いたことを翻すことはない。テオドールの考えに任せることにしてくれたようだ。
「要するに、あいつらの計画にケチをつけてやる。サラを連れ出しつつ、あいつらだけを追われる身にしてやれたらいい。ナイト・エラントが巡回している地区には顔を出せないように仕向ければサラにも手は出せなくなるし、新人シャドウランナーとしてスカウトするにしても、そうやってケチがついた人材をしつこく追いかけることはない……ハズ」
「ボス、ちょっと自信ない？」
ステラの苦笑いが胸に痛い。
「回りくどいとは思うけど、やるしかないよ」

ディア・マイ・サムライ【後　2】

★

ファーストを宿まで送った後、テオドールとステラはシルバを連れてことに取りかかった。

シャドウランは秘密を守らなければならない。

それは至極もっともな話であるが、利害が相反する人間にしてみれば自分に不利益をもたらすランの情報は出来る限り把握しておきたいものだ。この世に存在するあらゆる戒めと同様、放置すれば蔓延するからこそ明文化されている。実際「シャドウランを仕掛けたら情報が漏れていて酷い妨害に遭った」という話は枚挙に暇がなく、そして酷い目に合わせているのは大抵の場合、同業のシャドウランナーであったりする。

テオドールは探偵という立場上、同業を酷い目に遭わせる側に回ることが多い。

そもそもシャドウランとは何か。

俗語としてあまりにも一般化しすぎたために一口で言い切るのは難しいところだが、〝営利目的の犯罪行為〟と考えれば概ね差し支えない。

だが路地裏での無差別な強盗、単純な転売目的の置き引きがシャドウランかと言えば多くは「違う」と答えるだろう。もっと段取りに工夫を凝らした、もっと大きな利益に繋がる行動でなければいけない。強盗を働くなら警戒厳重なアレスの開発施設から試作品のドローンを強奪するべきだし、置き引きはアレスの幹部候補に失点をもたすよう政敵から依頼されて行うものであるべきだ。それらは自分自身の安易で即物的な物欲に基づいて行う仕事ではなく、社会上の表沙汰にできない需要、メガコーポや巨大犯罪組織の暗部を担った労働であり、金は正式な対価として支払われる。シャドウランナーは専門知識と専門技能を持ち、動物的略奪からは脱却したプロでなくてはならない――云々。

それなり以上のシャドウランナーは、口にこそ出さないが、大体そ

のような認識を抱いているのではないだろうか（やっていること自体は大して変わりなくとも）。
ともあれ、シャドウランと称して営利犯罪を働く人間は彼らの思考が及ぶ限りにおいてスマートにことを運ぶべく、段取りを凝る。
段取りを凝るには事前の下調べが不可欠だ。
シャドウランと称される営利犯罪は非常に多岐に渡るため、多少の技能や知識があったところで個人が対応しきれるものではなく、普通のランナーチームは仕事に合わせて他人の助けや助言を求める。強盗、誘拐、妨害工作に産業スパイ等々、いずれの場合においてもターゲット周辺の人間に探りを入れ、伝手を頼りに内部の協力者を求めたり、場合によっては脅迫や賄賂を駆使して協力者に仕立て上げる。チームメンバーでは不足している技能の持ち主を新たに雇い入れることもあるだろう――当然ながら、そういった諸々の準備をすればするほどシャドウランの秘密なるものを守りきるのは難しくなる。巻き込む人数が多いほど絵空事になる。だからランナーチームは多くても精々五人か六人だ。集団になればなるほど話す口は増え、ヒューマンエラーの要因が増す。時にはメンバー個人個人の思惑や利害が擦れ違い、上下関係が明白な場合は特にしわ寄せを食う人間が出てくる。食い詰めたチンピラにプレデターだけ与えたようなチームなら尚のこと。
「ダリオのことは残念だった」
テオドールは沈痛な面持ちで言った。腹の底に苦ヨモギを噛んだような味が広がる。変装用ナノペーストを塗りつけた顔の皮は普段より一ミリメートルばかり分厚くなっていて、表情を抑制するのに役立ってくれる。
仮初めの顔面には《アッシュ》というぞんざいな名前をつけた。
夜明けが近づく午前四時過ぎ、旧州立公園での待ち合わせに応じてくれたイーストン少年はオークにしてはスレンダーな体系をしていた。真っ暗な林の中ではあったが、テオドールは眼鏡の赤外線をオンにしていたし、近くに隠れたステラと、アストラル投射したシルバが見張っている。イーストン少年はきちんと一人で来たようだ。

テオドールは彼に向けて訥々と言葉を続ける。
「実は半月ほど前から彼らに預けていたデータがあって、それを回収したいと思っている。後払いの報酬もある。自分に何かあったときは、イーストン、きみに話をしろと彼はいっていた。金も君に渡せばいいと」
「ダリオが……」
イーストンが憔悴した様子で首を打ち振る。ダリオ少年のコムリンクを漁ったとき、履歴の中で一番親しい友人に見えたのがこのイーストン少年だ。イーストンはダリオと同じチームとしては動いていなかった。体つきが痩せていて銃の扱いも上手くなかったから、ギャングの中では雑用ばかりをやっていたようだ。アストラル投射したシルバが彼のアパートを覗き見たところでは夜も眠らずに鬱屈としており、オーラは悲嘆と不信が真っ黒に沈殿していた。
即座にコンタクトを取ってみると流石に訝しがられたが、ダリオのコムリンクから盗み見た情報を元に仕事上の交友関係をデッチ上げてみるとあっさり信用させることができた。実際にダリオ達と付き合いのあったチクリ屋を買収して仲介させたとはいえ、彼が冷静ではない精神状態なのは明らかだ。汗をかいていて目配りも忙しなく、恐らくはハイになるクスリを少量呑んでいる。急に激昂して襲いかかってくるかも知れなかったから、テオドールは咄嗟に飛び退れるようそれとなく身構えておいた。
ゲイルからの知らせによれば、テオドールとステラ、ファーストの顔は《シャドウ・ハウンズ》の手配対象になっているようだったが、末端メンバーに背景事情は知らされていないようだ。このタイミングで接触してきた《アッシュ》なる人物に大した疑いを抱かないのは事情を知らされていないせいか……或いは、どうでも良いと自暴自棄になっているのか。
「ダリオは何故死んだ？」
「ランでしくじったんだ……」イーストンが一瞬息を整える。「チームの仲間を見捨てて自分だけ敵に助けられた。敵からナメたメッセージを持ってこさせられた。だから、オブシーダ＝サンが……処刑し

た」
「仲間だろうに、酷いことをする」
「それがプロだろ。金と銃を貰える代わりに受けた仕事は絶対やる。そうでないといけない」
「しくじりを犯しても仲間は仲間を守るべきだよ。命で償うにしたってもっと別の立場の人間がやるべきことだし、それは携わった組織全体が受けるべきものだ。そんな風に仲間が仲間を殺して罰するなんていうのはまともなランナーチームではやらない。……ダリオはいいやつだったが、君達のリーダーはイカれてる」
　テオドールは慎重にイーストンの表情を……赤外線視野に映るオーク少年の体温で淡い緑色に見える輪郭や息使い、些細な身振りを観察しながら言葉を吐き出した。身内に親友を殺された少年が望む言葉を選ばなければならなかった。
　テオドールは事前に考えておいたストーリーをゆっくりとイーストンに吹き込んでいく。表沙汰にできない拾い物のデータをダリオに預けていたこと。ボディショップで見たダリオの遺品のコムリンクからはそのデータが消えており、恐らく彼は《ハウンズ》リーダーのオブシーダに報告したために、オブシーダからデータを横取りされたであろうこと。データが流出したという噂がまだ出ていないので、恐らくオブシーダは割の良い転売先を探して、まだデータを手元に置いている……
「ダリオが殺されたのはそのせいもあったかも知れない」
　結びの一言がどうやらとどめになってくれた。
　イーストンの目に殺意が点った。
　ダリオから聞きだした名前のリスト、オブシーダと一緒に動いているという《ハウンズ》幹部メンバーに接触が容易そうな奴がいるかどうかを相談したところ、イーストンから《ペドロ》という名前が出た。エルフの商売女に入れあげており、いつでも同じシムセンスに入れるようペドロは女にコムリンクを買い与えた上、ＰＡＮをマスター・スレイブ状態にしているという。商売女は勿論ペドロとの逢瀬にシムセンスを使うだけではなく、ペドロの通信契約回線を介して色々と遊

んでいる。彼女に金を渡せば《ペドロ》のコムリンクへのアクセス権を渡して貰えるだろう。
「君は何故そんなことを知っている？」
「ペドロのやつが自慢してたんだ」
「なるほど……」
　他人に繋がったヒモを引きずって歩いていることが気にならないものだろうか――気にならない場合もあるのだろう。それで致命的な自体に陥った経験がなく、陥るかも知れないという想像が及ばない人間の場合は。
　商売女を買収するための資金として、テオドールこと《アッシュ》は二千新円の支払い保証済みクレッドスティックをイーストンに渡した。アルフレッドの臨時コムコードを記したメモも一緒だ。
「コムに相乗りして、オブシーダ達のランを見てみたいとでも言えばいい」
「そうするよ」
「ペドロのコムリンクを経由して、オブシーダのコムリンクをハッキングする。データを取り戻したい。こちらでデッカーを雇う。昼過ぎから夕方のタイミングが望ましい。早すぎても遅すぎても良くない」
「ああ」
　イーストンが虚ろに頷く。
「なあ、アッシュ＝サン」
「なんだ」
「データを取り戻すだけか。オブシーダに……ダリオからデータを盗んだ落とし前ってやつはつけさせないのか」
「そうして欲しいか？」
「ああ。して欲しい」
「分かった」
　イーストンが立ち去った後、一息ついていると囁き回線からステラの静かな声がする。
「やるの、ボス？」

「やるよ」
即答をした。
★
テオドールが集めた噂話によれば、《シャドウ・ハウンズ》リーダーのオブシーダ氏はあまり個性的な人物とは言えないようだ。粗野で横暴で手が早くて引き金が軽い。サイバーアームの拳で気に入らないやつを殴りつけるのが大好き。そんなありふれたチンピラだが、「やると言ったらやる」ことにかけては一目置かれていた。必要なぶんだけ残忍で必要なぶんだけ身内の面倒見が良い。場末のギャングをまとめるには過不足ない人材と言えるかも知れない。
シルバを家まで送って行った後、適当な場所に車を止めて一眠りし、ステラに起こされると午前七時を過ぎていた。表と裏それぞれのコムリンクからメールをチェックして返事を出す。頼みの綱のアルフレッドは在宅勤務であれば昼から動けるとのこと。
九時過ぎにファーストとパイクプレイスマーケットのスターバックス・コーヒーで合流すると、彼の方でもオブシーダ氏のプロファイルを当たってくれていたらしく、氏の経歴について幾つかの新しい情報をもたらしてくれた。曰く、「刀剣愛好会の集まりで名刺を交換したことのあるサムライ何人かにメールで当たってみたら、オブシーダの前歴を知っている者がいた」とのこと。この業界は秘密の帳を払ってしまえば意外と狭いものだが、それにしてもサイバーアップしたむくつけき男達が恭しく名刺交換している様を想像すると少し気が遠くなった。
オブシーダは以前の名前を《ミゲル》といって、レドモンドを拠点とするストリートギャングのチンピラだった。そのストリートギャングはもう解散しており、今は名前を覚えている者さえいない。スタッファー・シャックの輸送トラックを襲い、用心棒代と称して近隣住人から金をせしめ、ヤクザのＢＴＬ売買に加担し、気に入った女の子にちょっかいを出して……概ねよくあるギャングだったらしい。
サムライの経歴を調べる時、最も注目するべきはサイバー化手術の資金元だ。サムライがどういう〝用途〟でサイバー化されたのかが

分かれば使用しているサイバーウェアの目星もつくし、繋がりを持っている組織も浮かび上がってくる。オブシーダ氏の場合はどうかと言えば、ストリートギャング時代、敵対していたマフィアの倉庫を襲って奪い取った税金逃れの隠し現金が元手だったのではないかという話だ。しかも襲撃に携わった仲間の多くが死んだのをいいことに、その上がりを仲間には隠して独占していた。そうしてギャングが散り散りになった後で金を持ち出し、黒光りする腕と強化された反射神経を手に入れた。

当時ミゲルが属していたギャングが解散した成り行きについては、マフィアの報復に遭ったものか、やり過ぎてもっと厄介な連中に目を付けられたのか、リーダー格が次々に命を落として立ち行かなくなったという。解散の経緯にミゲルことオブシーダ氏の関与があったのかどうかは人づての噂ではなんとも言えないが、

「《空から小銭が降ってきた》ってやつ。こいつは多分何もしてない」

というのがラテにたっぷり乗ったホイップクリームを舐めているステラの見解だった。

「ちょっと金を独り占めするくらいはやったんだろうけど、その後で仲間がカイメツするよう仕向けたってのはないよ。一度そういうことやったヤツはさ、その後も似たようなことやろうとするもんだ。性格とか頭の回転とかっていう以前の話として、さ。あたしらみたいなドブ育ちってのは、上手くいった思い出……あー、なんつーの、セイコウタイケン？　ってのが少ないから、一回上手くいったやり方に拘っちゃうんだよね。オブシーダにその後そういう噂が立ってないなら、こいつはただちょっとラッキーに金を独り占めできただけじゃないかな」

「そういうものか」ファーストが納得げに頷き、「サイバーウェアはどう思う？　聞いた限りでは両腕のサイバーリムと強化反射神経、サイバーアイ程度しか分からなかったが」

「そんなとこじゃない？　自分でチョイスしただろうから、あんまり難しいやつは入れてないと思う。早くて強くてタフで、ただそれだけ」

とするとオブシーダ自身には厄介な背後関係もないということになる。些か楽観的だが、テオドールはステラの意見に飛びつくことにした。集めた限りの情報を鑑みても、ヤクザや企業の非合法部門に繋がったサムライではないはずだ。《ミゲル》のプロファイルを奪って潜伏しているような凝り性の手合いだったら手に負えないが、それならそれで向こうは深入りしないだろうという期待が持てた。サラ嬢を取り巻く迂遠な陰謀は、どう考えても企業が仕組むような洗練されたものではない。

《シャドウ・ハウンズ》が今夜予定しているランについて、テオドールはこれまで掴んだフィル少年／ライアン・ブレナン／トニー・アボットの足取りを元に想像してみた。

今夜の仕掛けは彼らの仲間内でも限られた人間にしか任せられていないはずだ。たらし役のフィルは顔と舌先三寸をオブシーダに見込まれている様子だったから、何かしら下調べを任せられていてもおかしくない。そう決めつけてアルフレッドから貰った情報を読み返してみると、ここ一週間ほどダウンタウンのソードー地区をうろついているのが目に留まった。ソードー地区は元々倉庫街だ。一時期は開発が進んでいたが、《覚醒》と戦争のごたごたで結局逆戻りした。ステラの見解を思い出す。彼のような生い立ちの人間は昔の成功体験に縋りやすい。サムライになる元手を得たのはマフィアの倉庫襲撃だったという。こじつけかも知れないが、しかし最後に一暴れしつつサラの退路を断つランとしては、ダウンタウンでの倉庫襲撃というのは悪くない案ではないだろうか。

ソードー地区のどの倉庫が《ハウンズ》の狙いであるのかを調べるには明らかに時間が足りなかった。そこはアルフレッドを頼むしかないだろう。

テオドールはメイソンに連絡を取り、《カッターズ》がソードー地区の仕切りに関わっているかどうかを尋ねた。ヤクザとややこしい折衝をして一枚噛んでいるようだ、との返事。

「今夜ソードーで騒ぎが起きるかも知れない。シャドウランナー何人かで加勢するから、メイソンの手柄になるように持っていけないかと

思うんだけど、どうだろう」
「詳しく聞かせてくれるかい、グレイ」
十五時を回った頃、件の商売女からアルフレッドのコムコードに対してペドロ氏のＰＡＮに対する招待がかかった。イーストン少年は約束を果たしてくれたようだ。アルフレッドはすぐさまファイルを洗い出し、復号化し、調査結果をテオドールに回してくれた。やはり《ハウンズ》のランはソードー地区だ。狙いの倉庫も特定できた。
その頃にはもう、メイソンが《カッターズ》の仲間に声を掛け、人数分の銃を集めていたところだったから、外れていたらどうしようかと気が気でないところだった。
「ギャング相手にあてずっぽうかますのはどうかと思うよ、ボス」
ステラは呆れ顔だった。ガセネタを掴まされたギャングが木っ端探偵相手にどういう態度を取るかというのは余り考えたくないテーマだ。が、メイソンの根回しが片付くのはどうやらギリギリになりそうで、結果的に予断で動いたのは悪くない結果をもたらしてくれそうだった。
メイソンに持ちかけたのは、《カッターズ》が仕切りに関わっている地区に狼藉者がやってくるから、情報と助っ人を提供する代わり、彼の顔が効く親しい仲間だけで手柄を掴んで欲しいということだ。襲撃者に混じっているサラのことを見ない振りをして貰うためだった。
パイクプレイスマーケットのナイトクラブ《ハデス》の個室でメイソンと作戦を立てた。メイソンが合法的に手柄を独占するべく《カッターズ》の兄貴分や折衝先であるヤクザにどういう根回しや言い訳をしたのかは興味深かったが、テオドールは突っ込むことを避けた。メイソンと付き合いを持つ中で、彼が従っている兄貴分の中に強かで食いつきの良い奴がいることはなんとなく察しがついていたが、今後友達づきあいを維持していく上でテオドールがメイソンを透かして交渉していると思われるのは上手くなかった。
《ハウンズ》の標的は《カッターズ》のフロント企業が所有している倉庫だ。機械部品に混じって税金逃れのオリハルコンが隠されている。《ハウンズ》は――というよりもレックスとサトウ夫人はそれを

嗅ぎつけたらしい。ヤクザと《カッターズ》の主導権争い。《カッターズ》のしくじりを作って点数を削ぐつもりだろう。だがヤクザが直接手を下せば筋を違えるから、ＳＩＮなしのチンピラを差し向ける。これぞシャドウラン。

《シャドウ・ハウンズ》の戦力は推定で十二人（サラを除く）。それとサブマシンガン搭載の回転翼機ドローンが五機。車三台。

メイソンが集めた《カッターズ》のメンバーはメイソンを含めて七人。クロウラードローン二機。

頭数ではかなり遅れを取る格好だが、魔法使いが助っ人につくという約束が彼らを強気にしてくれていた。

ファーストとシルバで《カッターズ》の支援。

テオドールとステラがサラの確保に向かう。

アルフレッドも手を貸してくれることにはなっているが、幾ら彼の腕が良くても公共グリッド越しの支援は限界がある。《ハウンズ》がハッカーを雇っていた場合に抑えてくれるという程度だ。サイバーウェアの制御を奪うような芸当は期待できないだろう。

シルバにアストラル投射をして貰い、サラへの伝言を頼んだ。細かい相談をするのは難しいから、大まかな流れを伝えるだけだ。「こちらで騒ぎを起こす。それに乗じて保護する。魔法は痕跡が残るからなるべく使うな」と、ただそれだけ。

魔法使いが怪しい素振りを見せたら即座に射殺するという裏社会での定石を、彼女には教えないことにした。トリッドで知っているかも知れないが、見せ場を演出するトリッドとは比べものにならないほど呆気なく魔法使いは殺される。教えたらきっとサラは冷静でいられなくなるだろう。彼女は狼の導きを受けたシャーマンだ――覚醒から日が浅くても、つい最近までただの学生だったとしても、戦士としての教導を精霊から受けている。怯えて萎縮するだけならまだしも血の気に逸ってしまうと厄介だ。

イーストン少年の手回しが《ハウンズ》にバレていないかどうかが心配だったが、彼からのパニックコードは送られてきてはいなかったし、シルバが偵察して盗み見たオーラの霊視でも《ハウンズ》メンバー

には特別動揺を示すような心理状態は見受けられなかった。
《ハウンズ》の襲撃チームは十七時過ぎに《サザンクロス》で景気付けの一杯を呑り、バン三台に分乗して出発したようだ。その頃にはテオドール達も準備を追え、ソードー地区の倉庫街でじっと待ち構えていた。
★
「まずドローンで偵察。後衛が退路を確保、周囲を警戒。前衛が突入」
チームの囁き回線に向け、テオドールは改めてコメントした。それらしい語彙を使ってみてはいるが、テオドールも軍隊や警察の経験があるわけではないから恐らく正確ではない。しかしシャドウランナーがやらかす強奪事件にはどちらの立場でも関わっているから、内容自体はそう的外れでないはずだ。
テオドールとステラは標的の倉庫から数ブロック離れた貸し事務所の駐車場にフォードを停めて潜んでいる。
「偵察ドローンと斥候には手を出さず、こっちが警戒してるのを気付かせないで引き込む」
こちらの見張りも《フライスパイ》ではなくシルバのウォッチャーに頼もうかどうか迷ったが、シルバの体力を温存しておきたかったので素直にドローンを飛ばすことにした。マトリックス探知をごまかすツールはテオドールが持っていたから本職デッカーが出てこなければ対策できるだろうし、欺瞞をしくじってドローンの存在がバレてもどこかよその倉庫のセキュリティだと思って貰えるのではないかという楽観があった。
「敵前衛が接近してきたところでファーストが出鼻を挫く。敵のドローンはシルバが魔法で始末してくれる。その後は《カッターズ》のみんなに大暴れして欲しい」
倉庫の警備にあたるメイソン達《カッターズ》メンバーの配置と装備についてもそれなりに最善を検討し、話し合い、打ち合わせをした上でのことだ。予想される敵の動き、人数、武器について。どの侵入箇所に対してどう守るか。たかだか数時間、３Ｄマップ上のアイコンをぐりぐり動かして議論を交わしただけでその通りに動けるわけは

ないだろうが、メイソン達は場慣れしているし、ファーストとシルバはもっと場慣れしている。上手くやってくれるだろう。

１７：５０。

周囲を監視させている《フライスパイ》四機のうち一機が敵のバンを一台捕捉した。倉庫からやや遠巻きな位置に停車しており、後部ドアから回転翼機ドローンを飛ばすところだった。同時にテオドールのコムリンクがマトリックス探知を警告してくる。《フライスパイ》やチームの囁き回線が見つかると厄介だ。事前に走らせていた欺瞞ツールが自動で対応したはずだが、誤魔化せただろうか。

他の二台のバンはまだ見つからない。

と、シルバの囁きがポップアップする。

「グレイ。サラの精霊が来た。その、偵察を命令されたって。何か誤魔化すことはあるかって」

「倉庫に六人、武器を持って詰めてる。クロウラードローン二機。サムライや魔法使いはいない。って伝えさせて」

「わ、わかった。そうお願いしとくね」

通話が切れる。寒々しい思いで一息。サラと内通してなければ、シルバがいなければ、一方的にこちらの人数と配置が割れているところだ。

回線を監視してくれているアルフレッドからのステータス表示はまだグリーン。倉庫の監視カメラに侵入されている様子はない。

《ハウンズ》の回転翼機ドローンが倉庫の周囲を飛び回り、入念な偵察を始める。テオドールは《フライスパイ》四機を事前に取り決めた隠れ場所に潜ませる。

シルバの囁きが再度ポップアップ。

「グレイ。あの、南東から四人と、南西から五人、来てる。サラは東から来る組にいる。サムライはいない。えっと、サラの精霊が実体化して暴れるのと一緒に、突入、してくるって。精霊の人、どうするって聞いてる」

予想通りの情報と予想外の情報があった。オブシーダは先陣を切ってくると思っていたが。しかし戸惑っている暇はない。シルバ

がマップ上におおよその敵位置をプロットしてくれた。南東から来る組をアルファ、南西から来る組をブラボーとタグ付けする。倉庫の裏口に近いのは南西のブラボー側で、こちらが前衛と思われた。

先に精霊をけしかけようとするのは予想していたから、どういう演技をして見せるかは打ち合わせ済みだ。

「予定通り、精霊には《ドーベルマン》と戦っているフリをして貰う。メイソン、よろしく。ファースト、ブラボーが突入する寸前で一発かまして。シルバは風の精霊に、ファーストが動くのと合わせて敵ドローンを始末するようお願いして」

《フライスパイ》が望遠視野に敵ブラボーチームを捕捉した時、彼らは回転翼機ドローンの射線に守られつつ、なかなか上手く身を隠して倉庫に肉薄するところだった。そしてシャッターの裏側でサラが呼んだ狼の精霊が実体化し、本来の段取りであれば武装した警備クロウラードローン《ドーベルマン》二機を破壊するはずだったが、狼の精霊は倉庫の天井近くに浮揚したまま何もせず、メイソンが命令する《ドーベルマン》も銃架のアサルトライフルを無為に発砲し、シャッターに幾つもの穴を空けた。それなりに長く銃声が響き、ややあって《ドーベルマン》が一機発砲をやめ、少し遅れてもう一機も発砲をやめた。戦闘で破壊されたフリだ。

敵ブラボーチームが殺到してくる。覆面にゴーグルをした体格のいい男が五人。先頭の一人は突入用のモノフィラメントチェーンソーを、他の四人がアサルトライフルを構えていて、シャッター脇の通用口に向かい――

テオドールは倉庫前を映す監視カメラのサブウィンドウにフォーカスを移した。

通用口が内側から開き、黒い大きな犬のようなものが飛び出し、駆け抜けた。

飛び出したのはファーストなのだが、あまりに動きが素早かったから、カメラの視界では一瞬そのように見えた。敵五人も咄嗟に反応できなかったほどだ。ファーストは彼らの鼻先に飛び出し、交差し、そのまま駆け抜けて路地へ去った。

ライフル三丁の銃口がファーストを追い、発砲する。
ファーストは既に小路へ飛び込んでいる。
先頭の男がチェーンソーを捨ててショットガンに持ち替える。
五人のうちの一人が倒れる。
首が半ばもげており、血が飛沫を上げて流れている。
見えなかったが、ファーストが擦れ違いざまにイアイで斬ったのだろう。
四人になったブラボーチームが状況を把握しかねて二秒か三秒ほど戸惑っていたところへ光が瞬き、銃声のそれに似た小さく鋭い雷鳴が響く。
彼らの頭上を守っていた回転翼機ドローンの一機が、稲妻に破壊されてから地面に落ちるまでが一秒ほど。
ドローンの落下音はかなり大きかったはずだが、通用口の中から《カッターズ》の面々が浴びせた銃声が重なったので監視カメラのマイクでは拾えなかった。
ブラボーの四人は撃ち返しつつ、遮蔽のあるところまで後退する。
メイソン達の銃撃は何発か当たったようだが、分厚いアーマージャケットが彼らを守ったようだ。
《フライスパイ》の視界には倉庫上空で風の精霊が実体化し、凄い速度で回転翼機ドローンに接近するところが見えていた。少女の姿をした精霊はその細腕から魔法の稲妻を放ってドローンを破壊した。
上空でドローン達と精霊が目まぐるしく飛び回り始める。
《フライスパイ》を隠す必要がなくなったので、テオドールは改めてドローンを上空に飛ばし、周囲の状況を俯瞰させる。オブシーダは一人で倉庫の中に忍び込もうとしているのかも知れない。そうなったら厄介だ。ドローンを自動操縦で警戒にあたらせる。
この時点で敵も待ち伏せに遭ったことは察した。敵アルファはブラボーと合流に動き出す。精霊とドローンでどうにかなると踏んでいたのか、壁を爆破するような装備は準備していない様子だ。アルファの装備は二人がスコープ付きのライフル、一人はサブマシンガン、一人は拳銃だ。やはり覆面をしているが、ライフルを持っている

やつとそうでないやつで明らかに体格が違っていた。拳銃持ちは特に小さい。
この敵チームアルファを、テオドールは物陰から目視で捕捉している。
近くのビルに潜んで、サラの居場所が分かるまで待っていたのだ。
アルファのライフル持ち二人が銃撃戦に参加するため前へ出てブラボーに加勢し、残り二人は流れ弾を避けて後ろへ下がる。
拳銃を持った小柄な一人――要するにサラだが、彼女がサブマシンガンを持った恐らくはフィル少年に向き直る。そして囁き回線を介さず、肉声で何かを言った。よく聞き取れなかったが、冷めていて、それでいて煮えたぎった響きを含むのは分かった。
サラが息を吸い、ただならぬ気配を纏った。覆面とゴーグルで隠された顔を尚も上書きするように神秘的なオーラが沸き立ち、狼の顔貌が浮かび上がった。シャーマニックマスクだ。魔法を使う時、シャーマンが祖霊の姿に変貌する現象を言う。
固まっているフィルめがけ、サラが呪いの言葉と共にオーラの弾を放つ。
寸前、テオドールはサラのゴーグルへ仕込んだアクセス権を使用して視界の明度を一気に下げた。オーラの弾は狙いが逸れて無関係な倉庫の壁を一部粉砕するに留まった。かなりの威力だ。人間に当てれば十分殺せるだろう。
大体同時に、忍び寄ったステラがフィル少年の背中にスタンバトンを押し当てて悶絶させた。
「なんで邪魔したの」
サラが剣呑に唸る。肩を竦めて返す。
「魔法で殺された死体が転がってたら、後々面倒だから。自分の身を守るだけに使えって言ったはずだけど」
「騙してくれたケリをつけなきゃいけなかったのに」
「そいつの誘いにノったのはさぁ、自分じゃん？」
ステラが冷ややかに茶化す。
「それにさ。騙された分はこうやって騙し返したでしょ。なら借りは

返した。違う？　……ああ、そっか。魔法目当てにヤられたのがムカつくっていうなら、タマでも潰してやればいいじゃん。ほら」
　言って、ステラは気絶したフィル少年を蹴り転がし、仰向けにして局部を指した。だが狼の戦士として目覚めつつあるサラにとって、気絶した人間をいたぶるのは気が進まないようだ。呪文を放とうとする気配を見せたものの、すぐに殺気が萎む。
　ステラが鼻を鳴らし、フィル少年が腰に下げたコムリンクへスタンバトンを振り下ろして破壊する。
「まずはここを離れよう」
　テオドールはサラの手を取り、走り出す。
　彼女は抵抗しなかった。
　ウィンドウの視界では激しい銃撃戦が見えていた。
《ハウンズ》は倉庫の中へめったやたらに撃ちまくっている。
　バンで待機しているであろう敵ドローンのオペレーターは精霊相手に応戦する愚を犯さず、回避に専念させて時間を稼いでいた。ドローンがいる限りファーストも《カッターズ》も大胆に動けないので放置できず、精霊は追いかけっこを強いられている。
　メイソン達《カッターズ》は負けじと応射して立て籠もっている。《ドーベルマン》もシャッター越しにライフルを撃っているが、パイロットプログラムが安物な上に、あまり弾も積んでいないから無理はさせられない。敵が無理押しで突入してきた時、盾になって貰う必要がある。
　倉庫の中には予め鋼板のバリケードを配置してあり、ライフル弾や破片手榴弾を防ぐ備えにはなっていたが、焼夷手榴弾でも投げ込まれたら瓦解してしまうのは明らかだ。《ハウンズ》がそれをしないのは倉庫の中に強奪したい品があるからだが、追い詰められたらどうするか分からない。
　窓から狙い撃ちしようとするとドローンが撃ってくるので《カッターズ》の面々は釘付けにされていたが、《ハウンズ》のドローンも精霊に邪魔されて効果的な援護はできないでいる。特に窓からドローンが侵入していたら《カッターズ》にとっては相当に厄介だっただろ

うが、風の精霊とは事前のミーティングでそれを絶対阻止するよう頼んであった。彼女は役目をよく全うしてくれていた。
装備では《ハウンズ》に分があった。
しかし《ハウンズ》が体勢を整えようとすると、ファーストがどこからか飛び出してきて手近な者を斬る。
はじめと合わせて既に三人、ファーストのカタナの餌食になっている。
敵は残り四人。
回転翼機ドローンが残り三機。
オブシーダはどこに行ったか。
テオドールは近くのオフィスビルを目指して走る。そこにフォードが停めてある。とにかくサラをこの場所から連れ出し、安全を確保しなければならない。
「ボス」
ステラの声。
突如、有無を言わせない衝撃に押されてテオドールは訳も分からず倒れ込んだ。サラともどもステラに突き倒されたのだと咄嗟に理解できなかった。置きっぱなしの錆びたコンテナの脇に体を叩きつけられ、痛みに悶えつつステラを振り仰ぐ――
ステラが走ってきた後ろへ向き直るのが見えた。性急な仕草。顔を庇うように両腕を振り上げ、体を捩っている。コンテナが邪魔で、テオドールの視界ではステラの視線の先が見えない。
ステラの額が爆ぜ割れ、彼女の小さな体が仰け反る。
焦げた血の臭い。銃声の残響。
一瞬遅れて、ステラとの共有視野がウィンドウに開き、寸前まで彼女の見ていたものが分かる。黒いサイバーリムに拳銃を構えた男。オブシーダ。
ステラが倒れる。奇妙に捻れた姿勢で手足を投げ出し、打ち捨てられた人形のようだ。
声を上げる余裕もない。ただ冷たいものが背筋に差し込まれる。恐らくはサラもそうで、彼女がヒュッと息を呑む気配が分かった。

ディア・マイ・サムライ【後　3】（完）

立て続けの銃声と共に、倒れたステラの体が跳ねた。フライトジャケットの生地が弾け、焦げた血の臭いが濃くなった。それと火薬の臭い。炸裂弾だ。貫通すると体内で破裂し、犠牲者の肉をグチャグチャにする。ステラは捻れた格好のまま動かず、うめき声一つ上げない。サラが悲鳴を漏らした。テオドールもそうしたかった。

「何もするな。呪文も精霊もなし」

テオドールは断定的にサラを制した。サラが本来感じるべき恐怖と、魔法的トランスによる勇猛さの板挟みで突飛な行動に移るのを予防しなければならなかった。「やられるよ」サラが案の定抗弁する。だが反射神経を強化し、鋭く精密に動く機械の腕を持ったサムライをひよっこ魔法使いがどうにかできるわけがない。呪文をかけようとしてもこの位置関係では先に撃たれて終わりだし、精霊をけしかけたところで実体化を終えるまでの僅かな隙にサラへ詰め寄って撃つだろう。それを説明して発憤されても困るので、テオドールは「こっちでどうにかする」と即答し、プレデターを抜いて見せた。「余計なことをされると邪魔だ」

《フライスパイ》一機をこちらに差し向ける。テオドールとサラが隠れているコンテナに悠々と近づいてくるオブシーダの姿を捉える。覆面にゴーグルで袖なしの迷彩ボディアーマーを着込んだ大柄な男。他の《ハウンズ》メンバー同様覆面とゴーグルをしているが、今回はマーカスみたいな黒光りするサイバーリムの両腕を剥き出している。派手な出入りに際してそれとなく名前を挙げるつもりでもあったのだろうか。だが、何故わざわざ隠れていたのか。不測の事態に対応するためか。サラに何か起きると予想していたのか。憶測が頭を過ぎるが、テオドールはすべて忘れ、後回しにする。

手元をズーム。武器はプレデターだ。ライフルも背負っているのに拳銃を構えているのは、ファーストを警戒して不意の白兵戦に備えていることと、跳弾や貫通弾でサラを傷つけないようにだろうか。しかしサラが裏切ったことがバレたら躊躇しないだろう。

銃口がテオドールの居る位置を指したまま近づいてくる。オブシーダがもう少し距離を詰めて、オブシーダの銃口から見た遮蔽とテオドールを結ぶ角度がほんの少しずれればテオドールは撃たれる。サムライの手による射撃の素早さと正確さはよく知っている。破れかぶれに飛び出して撃っても、なんの意味もない。ファーストであれば良い勝負になるだろうが、彼との距離はかなり離れている。オブシーダが近づく前に来てくれるはずもない。

オブシーダの射線がテオドールに噛み付くまで、ほんの数秒。

眼鏡のウィンドウが目まぐるしい光景を映し出す。

倉庫に向けて二台のバンが猛スピードで迫り、銃撃に晒されてボロボロになったシャッターを突き破ろうと突撃してくる。《カッターズ》の銃撃が迎え撃つが、バンは防弾で食い止めきれない。

光がカメラを塗りつぶす。シャッターを内側から突き破って迸った雷撃が、バンの片方を焼き焦がしたのだ。シルバが放った雷撃の呪文だ。そちらのバンは火花を散らしながら横滑りして止まったが、もう一台をどうにかする暇はなかった。それにあの威力の呪文をもう一発となると幾らシルバでも体力が持たないだろう。防弾処理車の凄まじい質量がシャッターにぶつかり、へしゃげ、歪む。《カッターズ》の必死の銃撃がバンの車体にぶつかって火花を散らす。

片や《ハウンズ》ブラボーチームはグレネードランチャーを担ぎ出し、《カッターズ》の注意がバンへ向いている間にグレネードを叩き込もうとしていた。破片榴弾やガス弾なら対策済みだが、焼夷榴弾だったらまずいことになる。それを察知したファーストがランチャーを準備しているやつに斬りかかる。だが、流石にもう予測されていた。アサルトライフル三丁の銃口がファーストを出迎え、十字砲火を浴びせる。

オブシーダが最後の一歩を詰めようとしている。

サムライの挙措は荒々しいが手慣れていた。足取りは無造作なようでいて滑らかであり、プレデターを構える手つきはぴたりと据わって、歩行と銃口の操作が見事に連動している。彼は次の一歩と同時にテオドールを捉え、射殺するだろう。

テオドールはプレデターを両手で構え、一気に三発撃った。手の中で強烈な音と反動と光が乱舞する。だが、ただの威嚇だ。銃を遮蔽から突き出すことさえしない。もしそうしていたら逆に銃口を見られてかわされ、即座に反撃されていただろう。見えない位置から闇雲に撃った方が却って警戒させられる。僅かな先延ばしに過ぎないとしても。

果たしてオブシーダの歩みは滞った。ほんの一瞬、遮蔽を挟んで呼吸の読み合いになる。こちらがドローンで彼の様子を把握している分、状況は有利。しかしそれだけのことでただの人間がサムライの素早さに対抗できるわけがない。オブシーダは瞬発的な動きの予備動作として僅かに膝を撓ませ、大きく踏み出して、

その足を蹴り払われた。

オブシーダはよろめきながら即座に銃口を振り下ろし、発砲する。

ステラの体が倒れたままくねり踊った。蹴りの反動を使って小さな体をねじり、回転させ、照準をかわした。その勢いのままに、どういう身のこなしをしたものか、瞬時に跳ね起きてオブシーダに挑みかかっていく。割れた額から流血し、幼げな顔を凄絶に染めている。キアイの叫びと共に爆発的な動作でもって、ステラの小さな握り拳が突き出される。

ぱっと見には、小柄な彼女のパンチは癇癪を起こした子供のように他愛なくも思えた。だが彼女のカラテは実のところ堂に入っており、かつ、恐ろしく速かった。彼女の挙措を見慣れていなければテオドールは到底目で追えなかっただろう。

不意を突かれたオブシーダの腹にステラの拳が突き刺さり、見た目を真っ向から裏切る重い音をさせた。オブシーダが覆面の下で呻き、よろめく。「エェイッ!!」ステラは留まらず、綺麗な一直線にワンツーパンチを繰り出す。オブシーダが左腕をガードに下ろしているが、ステラは構わず装甲サイバーリムを殴りつけた。金属と金属がぶつかり合う、硬い衝撃が連続する。

ステラが〝ヒューマンの小娘〟ではなく〝のっぽのドワーフ〟であると……オブシーダは気がついただろうか？　そうでなくともス

テラの骨格がアルミニウム補強されているのは思い知っているだろう。それから皮膚が強靭な防弾バイオ皮膚に置換されており、額の皮膚と頭蓋骨だけでプレデターの弾丸を防ぎ得たことも。

今やステラはオブシーダに半ばしがみつくほど密着し、絶え間なくフックやエルボーを叩きつけていた。だぼだぼジャケットに隠れたステラの逞しい背中や二の腕が盛んに駆動し、筋繊維のうねりと熱気さえ感じ取れるようなフル回転だ。オブシーダとステラの間には四〇センチ近い身長差があったが、小さな体に恐るべき密度の筋肉を詰め込んだドワーフ、それも培養筋肉で強化された瞬発力を持つステラであれば、体格差は武器に変えることができる。現に今、オブシーダは懐で暴れ回るステラに対し、思うような反撃が出来ずに手こずっていた。オブシーダがプレデターを撃ち込もうとしてもステラは巧みに脇へ回り込んでかわし、或いは銃に掴みかかる素振りで牽制する。オブシーダは泥沼の揉み合いを余儀なくされ、左腕で肘を叩きつけたり膝を振り上げたりしてはいるものの、ステラはそれを食らって怯みもせず、飢えた犬のように暴れ狂う。ステラの拳はまともに食らえば人間の肋くらいは簡単に砕ける。オブシーダがガードしている腕が装甲されたサイバーリムでなければとうに折れていただろう。

オブシーダとステラ、運動神経を高速化し、肉体を増強したサムライ二人の攻防は激しく、目まぐるしかったが、ステラが優勢であるのはテオドールの目にすら明らかだ。そしてとうとう、どすん、と肉の凹む音がして、ガードをすり抜けたステラの拳がオブシーダのボディに入った。オブシーダは初めにもカラテストレートを一発食らっているのだ。揉み合いの中で浅く入った拳といっても相当に効いたはずだ。オブシーダが濁った喘ぎを漏らし、なりふり構わずに飛び退き、よろめいた。ステラがとどめの拳を腰だめに追う。俯いたオブシーダが、ゴーグルの下からステラを睨む。悪寒。テオドールは警告を発しようとするが、サムライの速さには口も呼吸も追いつかない。逸る思考ばかりが猛烈に空転し、二人の遣り取りを追う。苦しげなオブシーダの右手、ステラに銃を奪われまいと掲げたままにしているサイバーリムの拳が僅かに捻られ、小指の付け根辺りからナイフのよう

な刃物が飛び出した。仕込み武器だ。ステラからは見えないように抜いている。テオドールはドローンで俯瞰しているから見えたのだ。ステラが踏み込む。弱々しくよろめくオブシーダ。だが、彼の右腕は別の生き物のように、まるで金属の蛇が寄生しているような異様な動きで鋭く畝り、ステラへ襲いかかった。サイバーリムは人間の腕として接続されてはいるが、一個の駆動系だ。人間がボディブロウで悶絶し、呼吸と循環が滞り、筋肉を稼働させるためのエネルギー供給や信号伝達がままならなくなっても、リムそれ自体の動きに陰りはない。オブシーダのダメージが本物だからこそ右腕の動きが異様に素早く感じられる。

やられたのがテオドールであったら、その落差に意表を突かれ、なんの抵抗もできずに顔面を切られて目を潰されていただろう。そして怯んだところを間髪入れずに炸裂弾を叩き込まれて脳味噌の大部分を失っていただろう。間違いなく。

ステラは引っかからなかった。

左手の平をアッパーカットのように叩きつけてサイバーリムを受け止め、腰を入れ、がっちりと力強く掴み返した。同時に腰の後ろへ右手を滑らせ、ジャケットの中からマシンピストルを抜いている。銃はステアーＴＭＰだが、フォアグリップを外し、弾倉にすっぽり納まる長さのショートクリップを使ってコンパクトに仕立ててあった。勿論スマートガンシステムを増設済みであり、ステラが握っただけで安全装置が解除できる。

ステラが銃を向ける。

オブシーダの左手がすかさず受け止める。

両者、がっぷり四つに掴み合った。

ステラの唇が意地悪くひん曲がったのをドローンのカメラ越しに捉えながら、テオドールは遮蔽から歩み出し、眼鏡越しの補正視野で彼女の後頭部を見た。オブシーダとステラの間には四〇センチ近い体格差がある。掴み合うことでオブシーダが多少前傾姿勢になってはいるものの、それでもステラの癖っ毛頭の上にオブシーダの逞しい胸板が丸見えになっていた。

念のために、テオドールは視界に映るスマートガンの照準をその更に上、覆面をしたオブシーダの頭に重ねた。両手でしっかりプレデターを構え、落ち着いて狙う。オブシーダがこちらに気づき、体を捩る。照準を修正。撃つ。

手の中で反動が跳ねる。補正された視界にオブシーダが健在である旨の警告が表示される。テオドールが撃つ瞬間、首を振って避けたようだ。完全に、とはいかなかったらしく、覆面が裂けて流血している。銃弾は彼の頬を抉ったようだ。

テオドールは更に撃った。一発ずつ、落ち着いて撃った。二発目は掠りもせずに外れ、三発目は左肩の辺りに当たって火花を散らした。その瞬間、ステラが捕まれた右手をもぎ離す。

オブシーダは何か言いかけたようだった。

ＴＭＰのフルオート射撃が掻き消した。

つんざくような一連の銃声。小口径のマシンピストルとはいえ、至近距離から十発以上も一気に叩き込まれたのでは幾らアーマージャケットで防御していてもたまらない。ジャケットは貫通せずによく耐えたが、着弾の衝撃までは殺しきれない。巨漢のサムライが体を折って頽れ、項垂れる。

ステラが脇に退く。

テオドールは改めて狙いを定め、撃った。

プレデターの弾丸がオブシーダの額を貫き、後頭部から抜けて脳の破片を撒き散らした。

ステラがスタンバトンを抜き、オブシーダのコムリンクを破壊した。

サラを地下駐車場のフォードへ連れ込んだ頃には、どうやら倉庫の方も片がついていた。

映像記録を確かめたところによると、ファーストは壁を蹴ってニンジャのニンポであるところの三角飛びを極め、銃撃をかわすと共に敵三人のブロックを飛び越して逃げ去った。スロー再生してみると彼は飛んだばかりでなく、そのままグレネードランチャーを準備している敵の頭上を飛び越し、宙返りしながらイアイをやっていた。そんな

無理矢理の姿勢から斬り付けたにも関わらず、グレネードランチャーを準備していたやつは一撃で右腕を斬り落とされており、賞賛や畏怖を通り越して呆れ果てる他はなかった。
シャッターに食らいついていた二代目のバンは、風の精霊が電撃で追い払ってくれた。回転翼機ドローンに手こずっていた彼女だったが、アルフレッドがドローンの命令系統を撹乱することに成功し、ドローン達の動きを鈍ったところを手早く始末して地上に助太刀してくれたようだ。
流石に分が悪いという敵のムードを、《カッターズ》が一際激しい銃撃で煽る。現に半数がやられている。《ハウンズ》のメンバーらは恐らくオブシーダに連絡を取ろうとしただろうが、その時にはもうオブシーダは死んでおり、返事があるはずはなかった。彼らはやがて戸惑いがちに、恐る恐るに引き上げていった。
メイソンにオブシーダをこちらで始末したこと、現場の後始末を頼むことを連絡し、テオドールは車を走らせた。後部座席をミラー越しに覗くと、サラは体を投げ出して覆面を脱ぎ、虚脱した顔で呆けていた。その横のステラは体をリラックスさせ、サラを含めた周囲全てに注意を配っている。割れた額の出血は強化された血小板産生作用のため既に止まっており、褐色の顔に粘ついた血糊がべっとりへばり付いていた。追い打ちで食らった弾はジャケットとバイオ皮膚で止まっており、こちらも軽傷とのことだ。だが、後できちんと手当はしなければならないだろう。頭の中がどこか出血していたら大変だ。
テオドールはアドレナリンの燃え滓で手が震えるのを押し殺し、手動運転で目的地へ向かう。
「これからかなり遠回りして、とある人目につかないモーテルで、大手探偵社の担当調査員と落ち合う。サラのことは彼らが見つけて保護したことになるからよろしく。アリバイ工作も頼んでるから彼らと良く相談して、口裏を合わせること。それで今日あったことや《シャドウ・ハウンズ》で関わったことは忘れること。いいね？」
サラが「ん」と頷くまでに、エスプレッソ一杯くらいは窘めそうな間があった。

彼らはテオドール達よりもずっと身元や経歴がしっかりした、社会的に信用のおける人員であることを説明すると、サラは皮肉っぽく笑った。
「グレイ。要するにさ、あんたたちもシャドウランナーなんじゃない。金貰って、ヤバいことやって、綺麗な服着てるヤツのために働くんでしょ。それでよく、私に偉そうなこと言えたよね。そりゃ、そっちの仕事のためなんだろうけどさ」
「ランナーなんかになる前に、考えた方がいいっていうのは本気で思うよ。君の才能は安売りしていいものじゃあない」
「金なんかどうでもいい。私はやりたいようにやりたい」
「世の中、自分を幾らで誰に売り飛ばすか、っていうのが唯一の自由らしい自由なんだよ、サラ。魔法の才能すらもね。影の世界なら自由だなんてとんでもない話だ。却って見えない柵や地雷原に気を遣うばっかりさ。ガッコを出たらイヤでもそういう話ばかりになってくる。そしてこれは魔法使いに限った話じゃない」
「……」
「君が持ってるものを欲しがる人はたくさんいる。高校卒業くらいまで勿体ぶったってバチは当たらないさ。詐欺に引っかかって安売りするのは間違いなくためにならない。第一、腹が立つだろう、君も？」
「……パパとママはダメだって言うに決まってる。シャーマンのことも魔法のことも気持ち悪いって思ってる」
「興味本位じゃなく、本気で本物の魔法を勉強すると言ってみればいい。君が本気だと理解すればご両親の態度も変わってくるかも知れない。まずはよくよく話し合うんだね。それでもご両親が反対するなら、ご両親に換わって学費を出してくれるヒトだって探すことができる。ＳＩＮを捨てなくったって、合法的なルートでね。何度も言うけど、君に投資したがるヒトは多いよ、サラ」
「投資、なんだ」
「どうしてもそういう話になってきちゃうんだよ、世の中ってのは。ただ少なくとも君のご両親は今回の件、決して安くない金額を君のためにポンと出した。君が魔法使いだと知らないまま、損得抜きで、た

だ家出した君を無事に連れ戻すために魔法使いやサムライが雇えるくらいの金を払った。そこのところは、ちょっとは汲んであげてもいいんじゃないかと思うけど」
サラは答えなかった。
《T＆T》社のスタッフと落ち合い、彼女の身柄を引き渡し、別れるまで、ずっと何も言わなかった。
★
《重力》のブース席でホルヘが広げた支払い保証済みクレッドスティックは五万新円分。
バイオ皮膚の再生と定着を促すための大きな絆創膏をおでこに貼りつけたステラが一万新円一本を摘まみ、指先で弄ぶ。テオドールは友好的に微笑みかける。
「サラが覚醒者だってこと、知ってたね、ホルヘ？」
「グレイ。済まないが――」
「ホルヘに情報を開示する権限は与えられてなかった。それは分かるよ。全部こっちの空想だとも。依頼元はサラのスカウトを狙ってるどこかの会社。予算と成功報酬、危険手当はサラの両親が支払った金、プラス、某社のミスター・ジョンソンが支払った金から工面されている。君がこちらに悪くないよう差配してくれているのも承知している。この追加の二万五千新円を引っ張り出すために交渉してくれたであろうことも想像できる。黙って受け取って、意図を察して欲しいっていうのも分かる」
「……」
「ただ、近日中にサラ・エファーソンに接触するであろう某社の誰かさんに、やり方をよくよく考えた方がいいだろうとは言わせて貰いたいね。サラ嬢は酷い失恋を経験したばかりだから疑り深くなってるだろうし。下手に持って回った小細工をやらずに、真正面から堂々とやった方がお互いのためだ。福利厚生と勤務態勢をきっちり説明して、短期研修なんかもいいだろうね。勿論、彼女の自由意志で断る余地は残した上で。どうだろう、どう思う？」
「ああ、いいね。そうあるべきだと思うよ」

「伝えておいてよ」
　四本のクレッドスティックを掻き取り、席を立つ。ステラがホルへの胸ポケットに残り一本を差し込んで、テオドールに続く。
　昼下がりのインターナショナル・ディストリクトの雑踏に踏み出し、屋台売りのホットドッグを三つ買い求め、二つをステラに手渡す。ステラは大口を開けてかぶりつき、おろしたてのフライトジャケットの袖を汚してしまう。
「傷はどう？」
「すっかりいいよ。シルバが呪文で手当してくれたやつがすごい効いたから」
「良かった」
「あたしが撃たれた時さ、ボス、マジで死んだと思わなかった？　声めっちゃ震えてたよ」
「ちょっと思った。かなりビビった」
「実はあたしもちょっとチビった。頭ぐわんぐわんして、すぐ動けなくってさ。悪かったよ」
「いや、悪かったはこっちだよ。ステラが庇ってくれなきゃ死んでたとこだ。ありがとう」
「ドーモ。でも、ボスを守るのはいつものことじゃん」
「それでもさ。……大体そもそも、ステラくらいのストリート・サムライに引っ付いて貰えてるのが贅沢過ぎるんだよ」
「それもいっつも言う」
「もっと良い仕事選べると思うよ？　今回みたいなのはまだしも、浮気調査だのストーカー退治だの盗聴対策だの、能力の無駄遣いもいいとこだ」
「あたしが要ると邪魔？」
「まさか。凄く助かってる。けど、公平じゃあない」
「ボスがくれる仕事、好きだからいいんだよ」
「まあ……ステラがいいなら、いいんだけどさ」
「いいの」
「なら、まあ、いいんだけど」

「んで、どうする？　帰って寝る？」
「いや、ファーストとシルバにお金渡さないと。あと、イーストン君の消息を確認しとく」
「あいあい」
★
その後ひと月ほど経って、ギャング兼ランナーチーム《シャドウ・ハウンズ》は解散した。《カッターズ》に返り討ちに遭って面目を落とし、豪腕のリーダーをも喪ったことで勢いをなくしたらしい。タイラーことレックスは以前ほどサトウ夫人の贔屓を受けられなくなったという噂。近々東海岸に引っ越すのではないかと言われている。テオドールはレックスからの復讐を警戒していたが、矢面に《カッターズ》を引っ張り出したのが良かったのか、目立ったリアクションは見受けられなかった。ただ、今後も彼の名前は覚えておく必要があるだろう。
イーストン少年に対しては何度か《アッシュ》の顔で接触し、その後のケアをした。《ハウンズ》解散に伴っては他の地区への引っ越しと、自動車修理工場への就職を斡旋した。今のところ無事にやっている。
サラは家に帰り、高校にも通っている。魔法の世界に目覚め、裏社会に足を突っ込んだ彼女の価値観は今まで通りではないだろうが、ひとまず、再度の家出をする様子はない。魔法使いの先輩として連絡先を教えたシルバのコムコードにも、サラからの連絡は入っていない。
そう言えばホース氏も引っ越しをしたようだ。店がもぬけの殻になっていたと、シルバが教えてくれた。
ファーストやシルバとは、たまに情報交換がてら落ち合って食事をする。《ハウンズ》やレックスやサラのその後については、スペースニードル近くの日本料理店で話をした。シルバのリクエストで注文した前菜のチョコレートソース・スシは悪くない味わいだったが、ファーストはキラキラ笑顔のシルバに見えないよう、密かに悲しげな目を伏せていた。
この二人には結構派手な立ち回りをお願いしたので心配だったの

だが、テオドールが聞き及ぶ限りでも、二人の気付いた範囲でも変わったことは起きてないようだ。念のため、ファーストはしばらくシルバの警護に就いていたという。ストーカーと間違われて第三者に通報されないかが心配になったが、テオドールは口に出さなかった。

幾つか、仕事の種になりそうな話や、お互いの頼み事を交換した。スシを食べ、サケとソフトドリンクを飲み交わし（ファーストもシルバもアルコールを呑らない）、ごく和やかに会食を楽しんだ。ステラが少々飲み過ぎて騒がしかったが、なんとか全員の許容範囲だった。独断でサラ嬢捜索の報酬を一部貰い渋ったことについてはファーストもシルバもあっさりしたもので、「俺は構わん」「あ、うん、あの、それでいいと思う」と承諾してくれた。お詫びに会計はテオドールが持った。

「あのヒト、どうなるかな」

シルバはサラ嬢のことを結構気にしているようだった。食後の緑茶に砂糖を入れつつ、我慢しきれなかった様子で話題を切り出した。

「企業のスカウトチームなら、木っ端フィクサーなんかよりはずっとスマートにやると思うよ。彼女がシャーマニック様式に覚醒してることも、狼の導師精霊に指導されてることも織り込み済みでね。騙す必要なんかない。変てこな陰謀ごっこがしたいんじゃなければ、良い条件、良い金、良い大学と良い師匠で真正面から釣りにかかるはずさ。今回こんなまだるっこしい手出しをしたのだって、有望な新入社員候補の経歴に傷がついて欲しくなかったからだろうし」

「かな」

シルバは頷きつつ、釈然としない顔だ。白く繊細なビスクドールの美貌が憂いに揺れている。

「彼女が納得しなかったなら、シルバに連絡が来るよ。多分」

「う。……うん」

シルバは自信なさげに硬直し、一呼吸置いて頷いた。微笑ましくも頼もしい、良い子だ。

半分が酒を飲まない集まりなので解散も早い。会計を済ませ、キモノ姿のウェイトレスへチップを弾み、店を出る。酔ったステラがシル

バに抱きつき、怯んだ彼女にちょっと面倒臭く絡んでいるのをファーストが手際よく引き剥がした。ステラがへらへら笑う。「分かった、分かった、帰ってクソして寝るよ。しっかり彼女を送ってあげな、むっつりニンジャ＝サン」

大声でがなり立てるステラにファーストが何か言い返したが、観光客が通り過ぎるざわめきに紛れて聞き取れなかった。ファーストはテオドールに会釈を寄越し、シルバを連れて立ち去っていく。テオドールは手を振って二人を見送り、夜の街を路面電車の停留所に歩き出す。

ご機嫌に酔っ払っていたはずのステラは妙に静かになっていた。ファーストに何か嫌なことを言われたのかと思いきや、別に臍を曲げている風でもなく、やけに神妙な面持ちをしていた。

ファーストに何を言われたのかと尋ねてみても何も言わないものだから、気になったテオドールはイヤホンの短期記録からさっきの会話を呼び出し、ファーストの音声波長を抽出して何を言ったのか解析した。あの男はステラの軽口に付き合わず、空気を読まない真面目腐った挨拶をしていて、その後に日本語のイントネーションで呼びかけていた。

「ああ、失礼する。そちらも気をつけて帰れ、《さむらい》よ」

ステラは背筋を伸ばして、心なしか酔いのためばかりでなく顔を赤くして、テオドールの傍らに侍っていた。テオドールの気のせいでなければステラは妙に嬉しそうだったが、ファーストの言ったことの何がそんなに彼女の気分をくすぐったのか、よく分からなかった。

「ボス」

むずむず落ち着かない様子のステラは、急にテオドールを呼んでくる。

「うん？」

「あの家出捜し、上手く片付いてよかったね」

「ステラのお陰だよ。ありがとう」

「それで、次はなんの仕事する？」

「しばらくは張り込みの応援ばっかりだ」

「ウン、分かった」
「あんまり面白くはないと思う。色んな意味で」
「ボスとやる仕事は好きだよ」
「そっか」
「うん。そう」
ステラは瞳を輝かせ、あどけなく笑っていた。

チェイス・ザ・ゴースト
チェイス・ザ・ゴースト【序】

サイバネティクス手術で高度に肉体を増強した兵士、特にフリーランスで都市部に活動している人種を、俗にストリート・サムライと呼ぶ。世間では営利犯罪者（シャドウランナー）の代表格的な存在と認知されている。

当然ながら、通販サイトのアカウント登録やアンケート回答の職業欄にストリート・サムライだのシャドウランナーだのと書く馬鹿はいない。

全くいないとは言えないが、普通はやらない。

もっともらしい経歴を偽り、それ用のＳＩＮを用意する。

ステラ・ミラー。インド系ＵＣＡＳ国民。二十二歳。女性。ドワーフ。前職はインド映画のスタント・パフォーマー。四年前に撮影中の事故で重傷を負い、保証金で顔面修復手術とバイオ皮膚移植、骨格の補強手術を受けた。原状回復ではなくサイバー化を選んだのは、損傷が重度かつ広範囲に渡っていたため、クローン培養組織よりもサイバーウェア・バイオウェアの方が却って安上がりであったことと、復帰後の利便性を考えてのことだ。なお、神経系の増強も元は危険なスタントに対応するためのものである。彼女は回復後、当初は現場復帰を目指したものの、ＰＴＳＤを発症していたために断念、ＵＣＡＳに帰国した。現在はシアトル市に在住。探偵事務所に就業中。

大体全部デタラメだ。

だがデタラメだからといって馬鹿にはできない。警察だって偽造ＳＩＮによる違法な市民籍が横行していることは知っているし、職務質問でＳＩＮの照会をする時、経歴に関連する話題を振って探りを入れるのは警察の常套手段だ。テオドールとしては苦労して精巧な出来映えの偽造ＳＩＮを手配したのだから、ステラにはできるだけ長くこのＳＩＮを使って貰いたいし、つまらないドジでボロが出てしまう

ようでは甲斐がない。だからステラが人前に出る時はこのデタラメをしっかり演じて貰わなければならないのだが、ステラは偽装の経歴にあるような学歴は勿論ないし、実際はインドで暮らしていたこともない。ヒンディー語は少しだけ喋れたが、読み書きはからっきしだ。そんなわけでテオドールは週に一度、ステラに英語文法やヒンディー語、数学などを勉強させることにしており、またインドの街並みを体感できる疑似旅行シムセンスを一緒になって鑑賞している。ステラには当初、「何もホントにガッコのベンキョーしなくても」と不評だったが、無教養な振る舞いというのは悪目立ちするものだし、人の話を聞けないことが多く、行動パターンも直情的になる。幾ら肉体が強靭でも、粗野なだけのシャドウランナーは長生きできないことをテオドールはよく見知っていた。

お陰でテオドールは無駄にムンバイに詳しくなってしまったのだが、ステラの方はといえばトリッドは好きだがシムセンスは苦手なようで、五分少々も入っていると音を上げてしまうのだった。インド映画のアクション俳優を目指していたはずの彼女が、自分のアパートにほど近いカリーショップの名前、オートランドリーや市場の場所すらろくに覚えられていない。ステラが言うには、焼けたムンバイの街路を歩くアクター、肉体感覚をシムリグで記録しながら漫ろ歩く誰とも知れない女性の歩調や目配りが、ナメクジが這うようにのろまで間抜けで気持ち悪くなるのだという。どうやら彼女の増強された神経系が他人の肉体感覚に酷い違和感を覚えるらしい。サムライが全員そうだとは聞いたことがないので個人差によるのだろうが、ともあれステラはシムセンスが大嫌いだ。そんなわけで週一の勉強はシムセンスによる地理の復習三十分（シムセンス五分と休憩十分を二セット）、インド製トリッド鑑賞、休憩と食事にインド料理のデリバリー、そこから基礎教養の学習というのがお決まりのコースになっていた。ざっと三年続けて、高校卒業を名乗るのはまだ難しいが、ようやく中学生くらいには落ち着いてきたところだ。

「計算なんか、コムリンクでやればいいじゃん」

「コムリンクにどういう計算をさせればいいか、を考えられないと困

るよ。それに肝心なのはモノの考え方だ。カラテもそうだろ。本能だけで体を動かしていたら思いも寄らないような動きを練習して体に覚えこませるから、複雑な動きが一瞬でできるようになる。脳味噌だって同じさ。普通ならやらないような考え方をする訓練をしないとね」

というような遣り取りを何度やったか分からず、一桁のかけ算すら難儀していたステラが、ジュニア・ハイ向けの教科書を開いて連立方程式や三角関数の公式に頭を抱えて唸っているのを見るとテオドールは色々と感慨深い気分になるのだった。

クリスマスを控えて、二〇七五年の十二月半ば。

探偵などという不規則な商売をやっていると曜日は他人の行動パターンに関連するものでしかなく、手がけていた素行調査に区切りがついて今週分の勉強時間が取れたのは木曜日の深夜だった。アパートに引き上げるのも面倒だったので、ジェームス・ストリートのオフィスビルにある《アルゴイ情報サービス》事務所に引き上げてきたのが二十二時。「面倒臭い。明日にしよう」と渋るステラに「どうせ明日起きたら遊びに行くだろう」と言いそうになるのをぐっと堪え、深夜営業のスタッファーシャックで買い求めたニッシンの培養肉ステーキ・ベントーで懐柔して今週のノルマ消化にこぎつけたところだ。

ステラは外見だけならローティーンくらいに見える幼い顔を顰め、いつものだぼだぼジャケットから小さく飛び出た指先にペンを持ち、時折クルクル回して弄びながらも、電子ペーパーに計算式を書き付けていく。ドワーフにしては細身で長身の彼女は、外見だけならちょうどヒューマンの子供のように見える。肩や背中の逞しい筋肉を隠せばより完璧にただの子供に見える。勿論、オーバーサイズのジャケットはそのためのものだ。

彼女がスラムに幾らでもひしめいているＳＩＮなし孤児の中から拾い上げられ、サイバーウェアと銃を与えられてカラテを仕込まれたストリート・サムライにされた理由は、要するにそういうことだ。子供の素振りで銃を隠し持ち、標的を油断させ、近づいてバババンッと

撃つ。或いは素手のカラテで首をへし折る。そういうことをするための人材というわけだ。彼女の本当の前歴を査定すれば恐らく何十人かは殺しているだろうし、いずれの被害者も厄介な身元の相手ばかりだろう。幸いにしてステラは前歴の仕事上のことをほとんど知らされていなかったし、テオドールも探るつもりはなかった。

テオドールはステラの最初のボスを知らない。自前でサムライを仕立てられるからには、大規模なシャドウランナーチームか、犯罪組織の下請けだったのだろうと見当がつくくらいだ。テオドールがステラと出会った時には彼女はもうローニン（野良のサムライ）で、ケチくさいチンピラの下で誰彼構わず銃を撃つ仕事をしていた。最初のボスがどうなったかはステラ本人もよく知らないようだ。突然音信不通になってそれっきり。よくある話ではあった。

「ボス、ここなんだけど……」

電子ペーパーに浮かび挙がった回答の解説を睨んでいたステラが、内容を消化しかねてテオドールに質問してくる。ジュニア・ハイの数学はテオドールも随分昔にやったきりなので参考書を検索しながらの説明になるが、ステラは至極真面目な顔で聞き入っている。辿々しく指導するテオドールの方が申し訳なくなってくるほどだ。ドワーフという人種の常なのか、彼女生来の気質なのか、何事でも一度始めてしまうとステラは生真面目だ。素養はないが粘り強く、難しいとか分からないとか喚きはするものの、放り出すことはしない。その分、一度イヤだと決め込んだことをやらせるのは苦労するのだが。

テオドールが成り行きでステラとつるんで、もう三年になる。

テオドールとしては「悪いことをしている」と思っている。

表の世界で事務職とかウェイトレスとかをやるならともかく、影の世界で言えばステラは相当な人間だ。銃とカラテ、目配りの鋭さ、タフさ、身軽さ。数々の高品質サイバーウェアと天性の素質による運動能力。出会ったばかりの頃はともかく、今なら良いフィクサーのところに紹介すればかなりの高給取りになるだろう。金を貯めて本物のＳＩＮを買い、安泰の暮らしを目指すこともできるだろうに、テオドールの下でケチな暮らしをさせてしまっている。多少影の世界と

関わりがあるだけの木っ端探偵の仕事と稼ぎが、一級品のストリート・サムライに見合うわけがないのに。テオドールとしても何度か独り立ちを薦めているのだが、ステラは頑として承知しない。彼女は何やら〝ギリ〟を感じてしまっているようだ。テオドールにとっては重たい話だった。テオドールは彼女の人生に責任を持つことはできない。

ステラの家庭教師をいまだに続けているのは、そのせめてもの埋め合わせでもあった。

数学と文法の問題集がそこそこ進んだところで遅い夕飯を採ることにした。午前零時少し前。ベントー・ボックスを調理器に暖めさせ、レモン水の缶を開ける。加熱が終わると飾り付けられていたバターが良い匂いをさせて溶け、フィレの食感を模したニッシンの細胞培養肉に絡みついて、敷き詰められたガーリックライスに滴っている。付け合わせの養液栽培野菜グリルも瑞々しい。一人前二十新円だがステラの分は二つあるのでしめて六十新円。冷凍輸送されてきたミールボックスの製造元はトーキョー・ハチオージ。一センチ厚のステーキは予め一口大に切り分けられており、テオドールはフォークひとつで、ステラは付属のハシで手軽に平らげた。

食事の後はカフェイン含有量多めでソイ・カフを煎れて、ステラが英語文法のテキストを広げる横で、テオドールはＡＲキーで報告書をタイプしていた。意識が散漫になりかかっている時に思考筆記するとノイズが混じりやすい。しかしそれも午前二時を回ると億劫になってきて、エンジンのかかったステラは高い集中力を保っていたが、テオドールはなんとか眠気を抑えつつ、ただぼんやりとソイ・カフを啜っているばかりになっていた。

不躾なメッセージが入ったのはそんなタイミングのことで、差出人は使い捨てのコムコードで名前も符丁を使っていたが、マキシミリアンという通り名の男だと見当がついた。密輸を軸に商売しているシャドウランナーだ。国境を越えて税金逃れの貴金属を運び、マトリックスに痕跡を残したくない秘密のメッセージや荷物なども取り扱う他、ヤクザのＢＴＬにまで食い込んでいる。どこかの死体から剥

ぎ取った中古の強化反射神経を施術しているからそれなりに素早くて腕が立つ。メッセージの文面は「今すぐに会いたい」というものだった。

それから、

「幽霊を追ってくれ」

という、巫山戯た一文が添えてあった。